女人藝術

昭和三年十月廿三日印刷納本　第一卷第五號
昭和三年十一月一日發行（毎月一回一日發行）



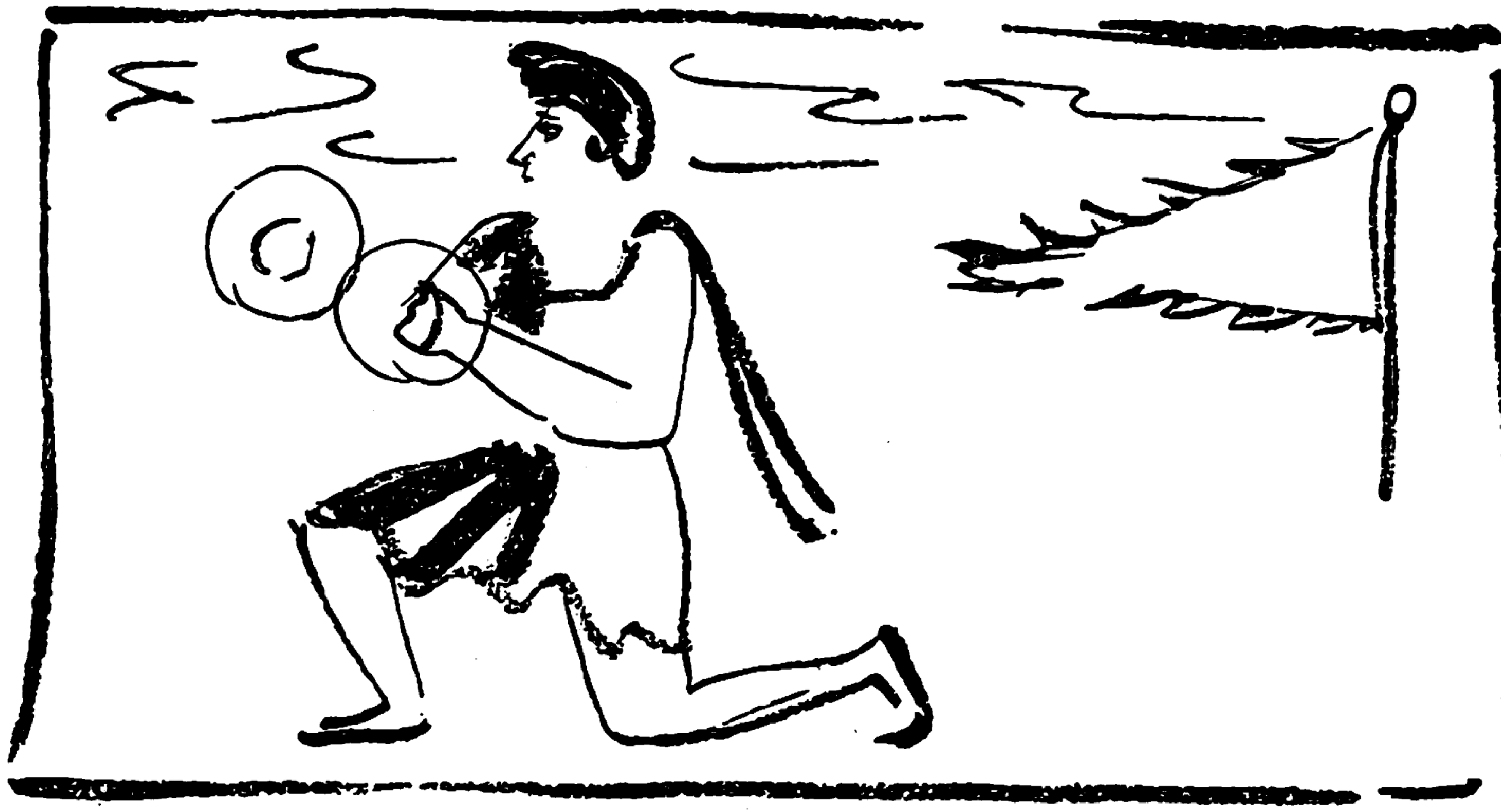
十一月號

弊社は最も文學的價値に富む二大奇書を諸姉に推薦する光榮を有する。即ち三上於菟吉氏作「百萬兩秘聞」直木三十五氏作「合戰」がそれだ。「百萬兩秘聞」は德川期最大の謀反兒由比正雪の軍用金を繞る野心、情慾、正義、奸惡の渦卷のすがたを描いて、しかも戀愛が人間一切の慾望を克服するに到る青春道德を暗示し、「合戰」は合戰もの書きとして折紙をつけられてゐる作者が、古代近世の著名な肉彈的爭鬪を近代的な視點から、或ひは熱烈に或ひは皮肉に、大膽輕妙な批評描寫で寫し出した名作だ。　大衆文學に文學的ニュアンスに乏しとなす人々よ、ひと度この二書をひもといて、此等の作品が何故に萬人の魂を打つかを知り給へ。　**各册一圓三十錢、送料拾貳錢。**

東京市麴町區下六番町十番地

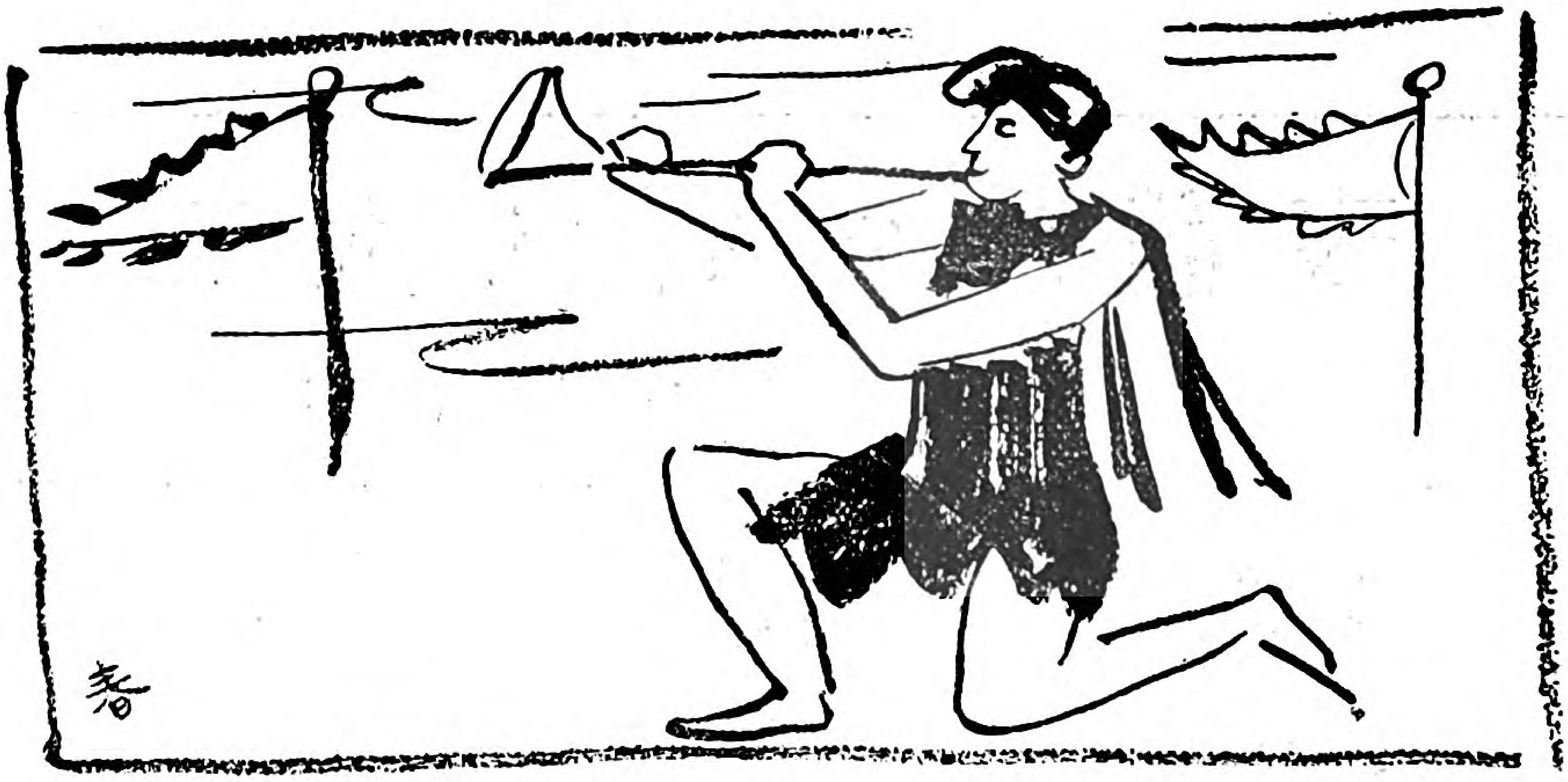
平凡社

（振替東京二九六三九）



女人藝術十一月號目次

—禁轉載—



男性訪問

二大流行名歌發表

(日本名物セノオ樂譜)

ラモナ

ウエーイン作曲
妹尾幸陽譯詞

印度の子守歌

ガス・カーン作曲
廣瀬明夫譯詞

アモング・マイ・スーベニール(思ひ出)

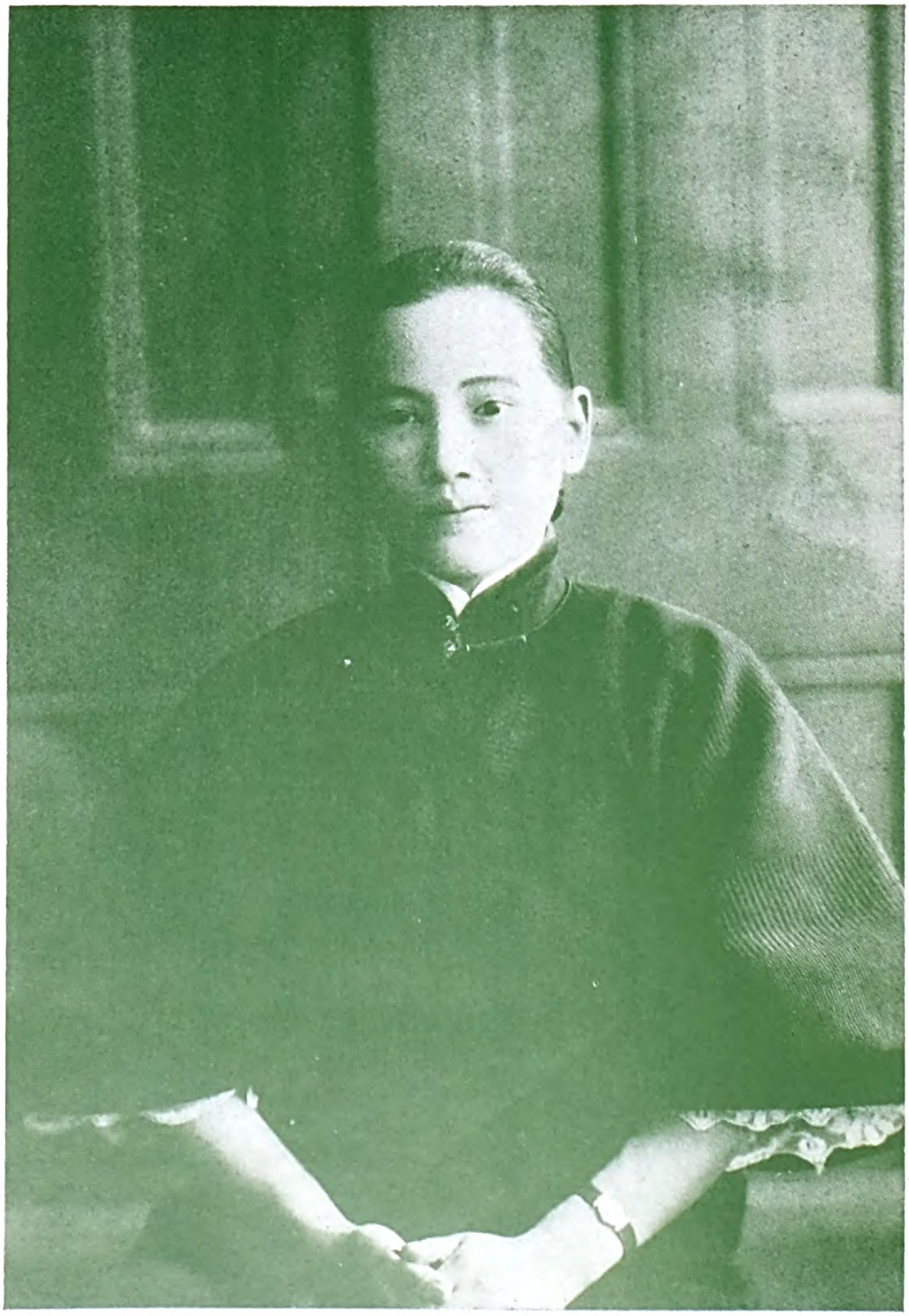
ニコルス作曲
深澤五郎譯詞

(定價各金參拾錢)

セノオ音樂出版社

(東京市芝區濱松町四丁目・振替東京三一〇一九一番)

Miss Takenaka.



Sun Soong Ching Ling.

心持ち前歯のすいたのも、本場仕込みか、すつかり板についた滑らかなイングリッシュの發音にはならず、缺陷の美？　とでも言はうか、却つてその表情に一抹の柔らかみをそへて、革命の母、孫宋慶齡女史への親しみをまづ感じさせた。

時は一昨年の十二月二十五日午前十時半、所は漢口の特別模範區にあつた國民政府財政部の三階の一室、そこには孫夫人が、革命の精神によつて平定した廣東の地を出て、問題の顧問ボロディンと相携へて陸路沿線各地の人心の歸嚮を覗ひながら、漢口の地に入つたばかりの時であつた

師走の空に、かてゝ加へて揚子江を吹きなぶる風のいかに身にしみたことよ！　が、ストライキと反帝國主義、反キリスト教、打倒北軍等々の示威運動に張りつめた武漢人の血管はもえてゐた。この間に迎へられた孫夫人の滿悅想ふべきであらう。

夫人の顔を見るなり私は覺えず言つた「御良人孫先生のお志がかくまで着々成就の途につくので、定めし御滿足に思はれることでせう」と　その時嚴格に結んだ口もとを綻ばして夫人はかう答へた「南京から速やかに革命が成功して來ようとは思ひませんでした。が、廣東からこゝまでの二週間の旅の間に通つた各地方の人々が、路ばたに勞働してゐる女に至るまで、よく私共の心持、卽革命の意を解つてくれたのは本當にうれしい事でした。これから私達は各地に幾つもの婦人團體をこしらへて、革命の精神を教へて行くつもりです」と。

弟君宋子文氏はそれ以來南京政府にある、姉君宋美齡女史は國民政府の蔣介石氏の内助者となつた。

そして何に背いて宋慶齡女史はロシヤに去つた？

（竹中繁子）

日本製蓄音器の覇者

マーヴェル蓄音器

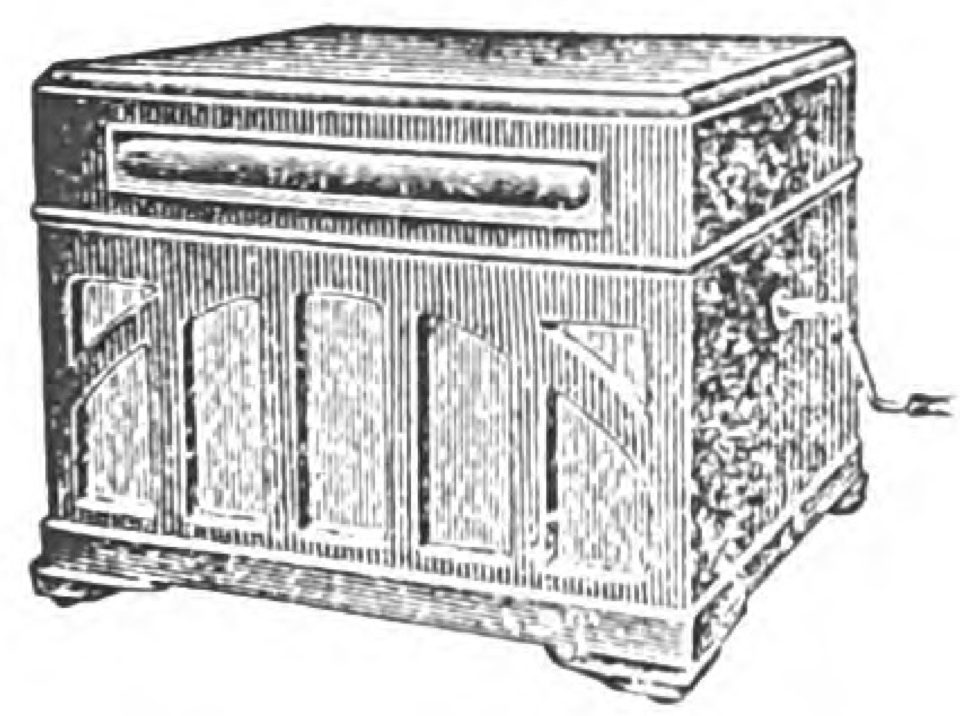
實演其のまゝに發音する蓄音器として壓倒的に斯界を風靡し、輸入品の要なしとまで好評を博したものです。

蓄音器を求められるに先だつてこの機械を聞いて他品と比較して下さい、最も自由に各種蓄音器を比較撰擇出來る處に於てさへ本器の頭角を抜く賣行きが其の優秀な事を物語るものです。

選擇眼ある士よ

いつまでも滿足して御使用の出來る蓄音器を選ばれん事を

本器を試聽せずに蓄音器を求めらるるは早計なり



No.65—¥65



No.125—¥125

定價

No. 65	¥ 65
No. 80	¥ 80
No.125	¥125
No.190	¥190
No.450	¥450

◆目錄贈呈◆



私はこんな優しい愛らしい顔を
してゐたことはございません　寫
眞くらい間違ひ易く胡魔化し易い
ものはございません。ありもしな
いものが映るのです。そのありも
しないものが、映つた上はあるこ
とになつて了ふのです。そこで、
私はこの寫眞を見乍らわれとわが
幻影に夢を描いて喜びます。ああ、
もう一度このやうな十七歳の春が
來て、このやうな優しい愛らしい
女になることが出來るなら

宇野千代

鈴ケ森ポプラの家に
て——十月六日撮影

第一巻第五号、口絵写真は、高群逸枝氏の写真と文章が掲載されておりましたが、同氏の著作権継承者の了解が得られませんでしたので、本復刻版では割愛致しました。

（龍溪書舎）

女人藝術

十一月號



男性訪問

1

里見弴——大井さち子

里見　今月の改造に書いたモダンガアルだね。どうです。あれは新しい女になつてゐませんかね

大井　私、あの小説についてはさういふ風には見なかつたの、あなたが——何ていふんでせう。大分年をとつていらつしやるんでしよ。それに馬鹿に性慾的な事をお書きになる——そこばかりに眼をつけてたのよ、新しい女とか古い女とかいはずに——

里見　年をとつたつてまだ四十代ですからね

大井　どういふつもりで私に遇はうとお思ひになつたの？

里見　あなたの顔に興味を持つた、寫眞を見てね‥‥

大井　そりや少し漠然としてるのね。顔が好きなの？

里見　好きだ

大井　そりやあたりさわりがありやしませんの

大井　大丈夫だ。ほんとう正直な事を言へば寫眞の方が面白い。

大井　そりや少し悲觀するわね。

里見　寫眞を見て興味を持つたんで、別に遇はうつて言つたんぢやなかつた。

大井　里見さんだつて寫眞の方がいゝわ。私ほんとはもつと綺麗になる自信があるのよ

里見　そりや僕の方にもあるね‥‥さつき小説の話をしてゐたが、ほんとうに小説をよんだのならあの中の女の言葉が斷髮の人がいふやうになつてなかないかと思ふんだがな

大井　いゝえ、別段さういふ風に感じなかつたわ。私もさういふ場合なら——さうね、あゝいふ場合になるかどうかわからないけれど、それに對手によつて色々變るでせうから

里見　‥‥‥‥

大井　あたしね、里見さんていふ方、小説で拜見するととても女の氣持ちなんか御存じの世界を書いてらつしやる。さういふもの拜見しただけでお目にかゝらない方がいい氣がしてゐました。然し里見さんが遇はうとおつしやつたさうだから、どういふつもりなんだらうと思つたの

里見　逢はうとまではいはなかつたが寫眞はずゐぶん興味を持つてみた。鎌倉の房子さんの處で麻雀をしながら話しが出て、戀愛座談會の寫眞の中でとても興味を持つた人

がゐるといつたら。誰でせうつていふから、その寫眞を見なきやわからないつて言つたんだ。そしてこの人だつていつたら、その晩麻雀の間中何かいゝ手がつくと、「あゝさち子さん　さち子さん」て來るんでね

大井　あたしみたいに形の野暮な人間が、先生みたいにいきな人ばかり週つてる人と、會ふのはいやだと思つてた。その氣持ちわかる？

里見　君の方ぢやねえ、そりやわからなかないが、僕の方でもあなたに嫌はれさうだと思ふね

大井　きらやーしないけれど――

里見　僕のものは、書いたものなんかでも面白くないだらうと思ふよ

大井　面白いわ。――あたしあの「暗い夜空」や「くすぐり達磨」なんか好き。だからさういふ花柳界の女――

里見　うん、そんな事ありませんよ、唯僕の方ぢや話がうまくないんだ。素人の人と話す時はわりにすら〳〵出て來ないんだ。

大井　花柳界の女をみてゐると、アラを探されるやうな氣がするの、

里見　花柳界といふと割になれてゐるからね素人では言葉がうまく出て來ないんで、實は苦手なんだ。

大井　そりやあたしだつて同じだわ

里見　素人をきらつてやしないけれど、自分が不馴れな點で苦手だといふだけだ。これから精々勉強して…若いお孃さんや奥さんに交際ふ機會が僕は非常に少いんだ。

大井　でも女の人から隨分お手紙が來るでしよ。



里見　いや來ませんね、

大井　あたしも出さうと思つた…

里見　思ふだけで出さなかつたんだろ？さういふんが多いんで、ほんとに來ればいゝんだが――

大井　出さうと思つても――、

里見　僕に妹があつたら、若い人とのつきあひもつとあつたんだらうと思ふが、姉ばかりで年下の女が來る事など少かつたから――若い女と交際ふ機會がないから自然花柳界へ行くやうになつたので、氣の毒なもんですよ

大井　そんな事あない。あたし男だつたら素人なんか對手にしない。素人はコクがなくてつまらないわね。

里見　さうかね

大井　一寸手を握つた場合――そんな場合ありますか？

里見　さうですね、素人には僕は臆病でね

大井　臆病つていつたつてないわけはないでせう

里見　そこまで君がきくんならこつちも正直に白狀すれば、名前は一寸具合が惡いが、Tの義妹×××子が、素人としてはその時分割にぱつぱつと口の利けた、女だつたんだが――初めて男女交際は愉快なものだと思つた、花柳界の以外に。その時分小田原にすんでゐたのだが、箱根へ行かうといへば實に氣輕でついて來るし、歸るから送つて來いといへば、國府津まででも送つて來るし――かういふんが澤山ゐてくれると世の中は愉快だと思つたんだが――それつきりあはないんだ。

大井　殘念ね、ホヽヽ。素人の人は手なん

か握られた場合、あいつは俺にほれてゐるなと思ふ。思つたつて惡くないけど、實に自惚れが多くて困つちやふ、

里見　さうだね

大井　男にしてもそれがあるわ。やつ俺に握手しやがつた、いゝ氣なもんだわいなんて思ふ

里見　然し玄人の男といふとどういふ事になるかね

大井　役者だの……活動俳優だの――

里見　そんな事いふが君、役者は自惚れが强いものだよ。

大井　さうね。鈴木傳明なんか大いにね。素人の男つていつてもあなたなんか玄人の部類ね



里見　さうかなあ　光榮だな

大井　たとへば手を握られた場合、突嗟に握り返すでせう。

里見　握りかへす！

大井　そんな時、うぬぼれる？

里見　素人だつたらうぬぼれるだらう。藝者だつたら何しやがると思ふかも知れないな素人はよく知らないから自惚れるかどうかわからない。まあやつてみなくちや……

大井　それは可哀さうね。一度機會があつたら握手しませうね

里見　あゝ　いゝな

大井　お差し支へない？

里見　お差支へなんかあるもんか

大井　ね、このお家の門に表札が二つあるわね、あれ　どういふ方？

里見　第二夫人！

大井　第一夫人と第二夫人？便利でせうね。

里見　便利な事も　不便なこともある。

井大　便利な事つていふのは　わかるけど、不便なといふのはどういふ場合？まさか便利の反對だとはおつしやらないでせうね

里見　そりや仲々複雜ですね、どういふ意味から言つても、それは力の問題で男が二人を對手にしても、いけなくはないが、力がなくつてはいけるいけないに係らず、不可能でせう。力といふのは人格の力、體力、金力すべての意味の力の事をいふんだが不便があるといふのには、その中の何か足りないものがあるといふ事になるだらう、たとへば時間が足りないとか、忙しすぎて仕事が出來ないとか――兩方の女の嫉妬心を整理してやる事が出來ないから、力さへあれば便利ばかりだらう。

大井　私もさう思ふ。けれどこちらの方はしつかりあなたを握つたつもりでせう

里見　兩方とも握つたつもりでゐるに違ひない。その時男は自惚れが强くなければいけない。さうでないと、どちらかにゐる時、不機嫌になるわけだが、あたしはどちらでも機嫌がいゝんですもの

大井　隨分あなたは不幸ね、つまりそこが腹藝なんですか――そつちから少しお聞きなさいよ、さつき聞き度いつておつしやつたでせう、もう聞きたいこともなくなつちやつた？

里見　どうも大變に――何から聞いていゝかわからない。ちやんとみなくちや――

大井　ちやんとみるつてどんな事なの？

里見　あなたは奥さんでせう。つまりあなた

と御主人との關係はどういふのか一寸口でいへないやうな・・・

大井　私たいがい話せるわ、どんな事でも―

里見　そんな事を聞くと、お惚氣を聞かされるやうな事になりますからね、あたしの場合のやうに――

大井　あれ、おのろけなの？　ケチなお惚けね。あたしさうは思へない。あんなの何でもないぢやないの。今まで交際つた女で特に心を引かれたといつた樣な女の人はどんな人？

里見　さういふ人とはまあ何とかなつてゐるから――

大井　なつてゐるつていふと？こゝでは聞かれない。

里見　女房も第二夫人もさうだし、大ていさうなつてゐる。中には心を引かれたけれども失戀つていふわけぢやないが――何でもなくなつてしまつてる女もあるがね、

大井　一體そんな方どんな方達？　もしこれからこのお交ひが續くとすれば承つておいても惡くないと思ふ。

里見　さうだなあ

大井　心を引かれたといふのは、思ひがとげられなくてか、とげられて思ひ出があんまり樂しいからか――

里見　心を引かれたつて、惚れたつて事かね

大井　いつまでも思ひが殘る――

里見　そりや、ないことはありませんよ、というと、ですね、僕は一體律氣者だから律氣のある人が好きになるね」

大井　律氣のある人が？　つまり心の堅實な實意のある人――ぢやあどういふ人？

里見　あたしは割に浮氣でないんですよ。初めつから浮氣の氣でするならそれでよし、また、戀愛といふ言葉は嫌ひだが、戀愛的になつて來ると、律氣つ氣のない人は駄目兩方承知の浮氣なら結構よ、

大井　そりやさう、浮氣をしませうつていふんならいゝんでせう、モダンガアルに對ては？

里見　貴女は自分をモダンガールだと思ふ？

大井　あたし思つてないわ

里見　割に律氣つ氣がある方ぢやあないか

大井　さうね、やはりその人によつては律氣もだす。張合ひがなければ出しませんよ。

里見　モダンガアルなど、ほんとに交際ふ機會がない

大井　あつたことない？あの改造に出てる小說は空想？

里見　空想だから、不安だから聞くんだよ

大井　神經質ね、いゝぢやないの、書き捨ててしまへば――さうはいかない？

里見　そこは律氣つ氣があるところでね

大井　この部屋へ入ると赤いものが大變眼につくんですが――赤がお好きね。赤いお机のことは聞いてゐたけれど――

里見　非常にすきですよ。

大井　どういふわけでせう

里見　色として、すきなんです。殊に朱の色がすきなんです。

大井　失禮ですが、女のおこしなんかやつぱり赤がお好き？

里見　さうもいかないね、腰卷の問題になると、年に合はして、年寄りはやはり白いのでなくちや

大井　そりやさうね、婆さんが紅いのぢやねでも大體先生の廻つてる女の人、それも年長者は？　どんなの？

里見　若い人を知らないんで――白い腰卷の部類ばかり、遺憾ながらね。

大井　つまりお好きなわけね。

里見　とう〱赤い腰卷にされちやつた。

大井　お嫌ひ？　あたしみたいななりは――

里見　非常に結構ですよ。

大井。日本髪の方ね、××××××××××××××××、あの油の匂ひどういふ感じを與へるでせう

里見　さうだなあ、髪の匂ひはいゝといふ事になつてゐるが、二月も洗はないのは、やり切れませんね。

大井　さういふ意味でなしに、あたしの言ひ方が悪かつたの。

里見　いゝ方の髪の匂ひ、とはどういふことになるかなあ。刺戟されて‥‥

大井　刺戟されて？　どういふ風に？

里見　舶來の白粉や、クリームの香も中々よいですよ

大井　といふと御經驗がありさうね斷髪は？

里見　斷髪は經驗がありませんね。しかし斷髪の誘惑は‥‥

大井　くすぐつたいんぢやない？　たとへばあなたの××××××××××××、日本髪のびんを頬にすり寄せられるのと、どつちがいゝ？

里見　女の人が髪を斷るのはいくらかサヂズム的の興味がありはしないか。日本髪にきちんと結つてゐると、いくらかこはれることを遠慮するところがあるだらう。けんかして、わし掴みにしやうといふ時には、斷髪の方が便利だからね

大井　斷髪がね。だけどサディズムをもつと滿足させるには、チヤントしたものをこはした方がもつといゝのぢやない？

里見　そりやそうかも知れないね、だが斷髪の方が手つとり早いわね

大井　だからおやりになつたらいゝわ

里見　地震前でしたがね、淺草にバンタライシヤとか云ふおどりをおどつたり遊ばしてくれる怪し氣なものがあつて、そこに斷髪の人がゐたんです。まだ斷髪も珍らしい時分でしたがね、そこへ行つて踊つてみせてもらつた。その時あゝいふのをぎゆつと握つてみたいと思つて、君の頭を握らしてくれないかと云つたら、いゝといふからやつてみましたよ

大井　お金でもお拂ひになつたですか

里見　向うでも非常に嬉し相だつたですよ——女の人が髪を斷る氣持にも、マソヒズム的要求がありやしないか。いま云つた意味で男にサヂズムを考へさせるのは、女のマソヒズムかも知れないからね。髪を切つて、ひどい目に逢はせ安いやうにこしらへておく‥‥

大井　そんな勝手な云ひ方ありやしない

里見　ひどい目に逢ふ形で、可愛がられやうといふ‥‥。君はどういふつもりで斷髪したかしらないが——

大井　外の方は知らないが、私は髪を斷つて綺麗になればいゝと思つて斷つた。何も男の人にひどい目に逢はされやうと思つたんぢやあない相當な年配になつた男が、おしやくなんかをよく×××つていふやうなことするでせう。あれにも、その氣持があるんぢやない？　え？

里見　あれと似たやうな氣持、人によつては×××にもサヂズムがあるかも知れぬが、新らしいものだといふ事だけぢやないかなあたしはそういふ事にあまり興味がないからよくわからないが‥‥

大井　興味がないの、いつも古物で結構なの屑屋みたいね

里見　あなた方はあるかね？。男が童貞だといふことが‥‥

大井　あります

里見　さうかなあ水揚げといふのは年をとつてから興味があるものでせうが、あたしはまだ若いから——

大井　さうですか、ハ‥‥

里見　これぢやあたしが君をくどいてゐるや

うで弱つたな。里見淳。大井幸子をくどくといふ題で出すかな。

大井　だけどそんな事思やしませんよ。あたしがくどかれに來たといふの？

里見　あなたの言ひ方か、私の云ひ方の故かどうも話が變な方へ來ちまつて……

大井　さうですか、かういふ風なんですか、女人をくどくのは……

里見　斷髮云々などゝいふことから……

大井　斷髮いゝぢやないの段々ふえますよ

里見　あんたは家庭生活に興味はないの？

大井　家庭生活つてどういふ意味で？

里見　つまり今の、あんた奥さんでせう、御主人と、聞き惡いからだが、つまり仲がいゝかといふの。

大井　仲がいゝわよ。どんなに他の人を愛しても、家庭は亂さないわよ。愛人があつても、主人と一緒にゐる間はお互に樂しい氣持を出し合うとしてゐるわ。

里見　いゝね、面白いね。

大井　そんな家庭面白い？

里見　つまりあんたが二人の男を愛せる力をもつてるといふことになるね。

大井　二人でなくてもいゝぢやないの？

里見　そりや關はないがね。二人以上の人を愛すといふのは深刻なことで、二人の人のしつと心を整理し得なくちやならないし、それを具合よくやる力を持つことは中々ではない。どんなことでも自覺してやつてゐれば……。生活に破たんを來たすとか、人に迷惑をかけたり爭鬪をおこしたりするのは、いゝ惡いにかゝわらず恥だよ。世間へ對してではなく、人間としてぐうだらな駄目なことだよ。力さへあれば、幾人もつても關はないがね。

大井　キスなんか花柳界の人は巧いですか。

里見　うまかありませんね。といつて、素人のは知らないんだが……

大井　さつきおつしやつた××さんなどは一度もなさいませんでした

里見　まあありませんね。キスつて云ふのは何も外國ばかりの事ぢやなく、德川時代からあるのだから、花柳界の人など上手でいわけだが、やつぱり感じが外國風の方がよさ相だね

大井　ほんとに先生は素人を知らないですか

里見　知りませんよ。これから大いに勉強しますよ

△2 三上於菟吉——今井邦子

三上　これからすぐ裁判されるんですか…

今井　裁判なんて、あなたみたいな大家には私なんかとてもそんな…ホ…

三上　戀愛論でも伺ひますか

今井　あなたは戀愛の大家でせう。私はもうお婆さんだから戀愛なんて少々氣がひけるわ

三上　ぢやあ家事のことにしませうよ。瓦斯がどうとか電氣の使ひ方がどうとか…

今井　どうもさういふ事は不得手で…

時雨　（傍から）家事を火の事としたらどう？

三上　今井さん、長流記の内輪ばなしでも伺ひたいもんですな

今井　モデルが大變…

三上　面白いですよ。大いに——

今井　それよりあなたのお書きになつたものなんか拜見すると、ずい分深刻な戀愛をお取扱ひになつていらつしやるが、あゝいふのは、體驗のないことでは、あゝまで出せないと思ひますが…

三上　ところが人間は出來ないことを望むもんですよ。貧乏人が金持になりたがつたり、金持が貧乏人の生活を羨ましがつたりするやうに。僕などは實際經驗が貧弱だから、筆の上に實現する…



今井　だめよ。小學校の生徒が先生の前でお返じするやうにいゝ事ばかりいつてお逃げになつちや…あの炎の空の笙子の氣持——あれなんかとても、御自分の御經驗なしにはね…

三上　經驗といつたつて、あゝいふことは僕が女だつたらやつてやれ、といふやうなことですね

今井　ずい分凄いんですね。ではあの小野の氣持ちね、深刻な純粋な…あなたの場合はやはりあゝいふ風におなりになつて？

三上　そりや心意氣はそうあり度いもんですが、煩はしくてさう行かないものね

今井　あゝいふ型（タイプ）の婦人にはお近づきがあるんですの？

三上　そりやないですな、私は一體に空想家で、内氣で、臆病なんですからハヽヽ

今井　それを信じる人はまあないわね

三上　いやほんとなんですよ。僕は毎日の生活でも一人ぢや不安で仕方がない。芝居へも一人ではゆけないし、活動でもどこでも一人で行つたことはないし、道も一人ぢや歩けないです。壓迫されるやうで恐い。だからいつでも誰かと一緒にゐるんですが、對手が女の人ではなほ困る。自分が參つてしまつた時に、傍に友だちがゐないと、どうにもならないと思ふと實際、氣おくれがして…

今井　ほんとに氣おくれなさるの？、それと

も壓迫を感じられる？

三上　柄ばかり大きくて芯がないんですよ。とても臆病でね‥‥

今井　あらさうぢやないのよ。穩やかでいらつしやるのよ。

三上　時には本屋へ前借に行く時なんか一寸困りますがね。僕がいかに公明正大な男だといふ事がそれで解るでせう。どんな時でも同じですよ。それは指方君に聞いても解るんですが、外にゐる時には始終かうしてついてゐてくれるので、この人達が知らない行爲は何もないです

今井　時と場合によるんでせう？

三上　例へば何か私が惡事をする時でも、火つけか人殺しでもするとしても、僕にはそばに人がゐなければ駄目なんですよ――一人ぢやあ――

今井　失禮ですが花柳界の婦人についてはそんな氣持はおありにならないんですか？
大變美人だとか‥‥

三上　まあね。‥‥（ニヤ〳〵笑ふ）僕あ小説でも、書くよりか讀む方がずつと好きですよ。若い時分には讀んでばかりゐたんですが、そのうちに親父が死んだり、家が破産したりして僕に責任がかゝつて來たんで、仕方なしに書き出したんだが、今でも書くのは辛いですよ。だから僕は自分のものを讀み返したことはない。一行書き出したらもうそれつきり先のことばかり考へて書いてゐるので、書き出しの方なんか覺えちやゐませんよ。

今井　それぢやもしかすると、小説といふものがこの世の中にないものとしたら――書く氣持は引き出されて來なかつたかも知れませんのね



三上　何しろ僕のは何でも出鱈目で、昨日の生涯を尊敬しないし、明日のことだつてどうかわからない

今井　唯、何かに刺戟されて‥‥

三上　その〳〵でその他の事は考へないんです

今井　では御自分の物をお書きになるときでもそうだとおつしやるんですか。でもしかし、ありや女性の心理なんかにひどく立ち入つていらつしやるわ。とてもお考へなしになんか‥‥

三上　さういやあなたの長流記は男の氣持にひどく立ち入つてゐますね

今井　さうやり返すやうな事おつしやらずに正直なところ――

三上　私の友だちなどの中にも、非常に恐縮してゐるのがゐますからね

今井　そりやちがふ、でせう――色々な女性の心理の中に、花柳界の女とか、普通の女性とか、私たちのやうに新らしい女とかで多少戀愛の仕方でちがふでせうか

三上　結局昔から男に變りはなし女に變りはなし、後天的な智識などによる違ひはあるでせうが、根本はちつとも違はないですよ。

今井　男の方はこんな事を感じてゐらつしやるやうね。ある時には才氣のある女を、ある時は粹な人を求めるいふ風に色々に――

三上　そんなぜいたくな氣持は刻々ないぢやないでせうね

今井　しかし氣分的とか、發作的とか云はす

に自然にさうなる・・・

三上　そりやみんなのよさを一人でもつた人があれば一人でいゝでせうね

今井　そんな完全な方にお會ひになつたことでも・・・

三上　惚れた女はあばたも笑くぼで、惚れてゐる間は何でもよく見えるでせう。それでいゝと思ふですね

今井　では最初のものが段々うつつて行く！男の方は今と昔と戀の對照がちがふか、今も昔も一つの俤が・・・

三上　戀愛は永遠で人は變つてもそれでいゝぢやないかと思ふがね

今井　でも、あなたはどうです、あなたのほんとうの理想のタイプを仰しやつて下さい

三上　複雜でわからないですな、戀愛關係は昔の人程難かしくはなくなつたでせうが、今いつたやうにアバタもえくぼで、作家がどんな形式で書かうとも結局戀を得て惱むか、惱んだ後で戀を得るかといふやうなあだけで、戀愛の喜びや惱みは根本的にはギリシヤの時代から遂に變りないものですよ

今井　でも大抵人の好みといふものは――どうしてもあゝいふ人でなくちやあといふやうな――女にはそれがありますがね

三上　女の人にはあるんですよ、だつて女は生殖といふことがありますからね、つまり畑ですよ。男は種をまいて歩く方の側ですからね。女は男のやうな氣持ぢや困るでせう、そこで女には貞操が飽まで必要だといふことが解かりますよ

今井　つまり女は種族を廣めるやうな――

三上　人は誰でも自分と似た氣持を持つた女に・・・

今井　だから男の方から云つたら、自分の型を殘す目的ですね

三上　男はさかんに種をまきちらして歩いたらいゝと思ひますね。その生殖の目的は自分と同じものを殖やしてゆかうとするのだから

今井　併し、その場合色々な問題が起りませう。幾人もの女を男があやつる場合――若し自分がさうだとする。他の男もさうであつて、一人の女に同時に思ひを掛けたとすると――

三上　そりや強い方が勝つにきまつてゐる。他にどう仕様があるもんですか、雜草だつて、ねんばり強い精のいゝものが殘つて、ぐうたらなのは失くなるんですから――

今井　そんな場合力が及ばなければあなたは潔く身をお引きになりますか

三上　引くも何もありやしませんよ、お前いやだよ、と云はれりや仕方がない

今井　さういふ風に段々なつてゆくんでせうが、なか／＼簡單にはゆかないことがありますよ。

三上　併し僕は昔からそう思つてゐるんだがこの頃コロンタイなどゝいふ人のものを讀んでも何にも新らしくはない。前からあつた、またいつでもある感情ですよ、たゞ周圍の事情が違ふといふだけ・・・

今井　女の貞操觀念も、ずいぶん動搖して來てゐるのです、であなたは新らしい方をおとりになるか古い方がお好きか――

三上　併し、それはまだはなはだきつぱり云はれないんだが、つまりは表現の形式がちがつて來てゐるだけですからね。昔のハイカラもだん／＼さうでなくなるやうに、今のやうなのはまた翌日が來れば古いのですから要するに古い新らしいはわかりませんね。戀愛で火花を散らすのも、燐光のやうに靜かに燒えるのも、根本は同じで、その表現の形式がちがふといふだけですから――人類の進歩といふことも要するに科學の進歩だけで、感情の進歩とは云へないでせ

う。汽車も電車も飛行機もなかつた時代でも、感情の點では今より退歩してゐたとは云へない

今井「では新らしい古いは中止にして、今までの觀念と、現在の觀念と――戀愛のですね

三上　これや變なものだ。今日のものも、昨日のものも要するに生活してゐるものにとつては違はない。われ／＼だつてちよんまげを結つてゐる時代に生活してゐたら、女もちよんまけに結つてゐる男がよく見えるだらうが、今ちよんまげに結つてゐたらお笑ひものだから――たゞ科學的に進る化す人類が、內心的にどう影響するかといふことが問題ですが、戀愛悲劇は昔から運命的なんですからね

今井　つまり處を取ることになるのね――でもほんとはさう云へばそうですけれど、さういふ風にならないぢやないでせうか。けふあの人が好きでも、明日は誰がすきになるかわからないといやそりやさうよ。けふ香水を好んでも、明日はお香(かう)がすきになるかも知れないし……ずつと端的にいつて、不義をされたやうな場合は一體どうなるの？今の言葉で三角關係は……

三上　こいつは許せるも許せないもない、不義されちやつちや仕方がないぢやありませんか。

今井　ではそういふ世界は許せるんですね。あるものと思ふのね。私そこの處をお聞きしたかつたのですよ

三上　そんな事あ僕なら舌を嚙んでも、人前ぢや笑つてゐますね。勿論文學者だから書いて便利な時は書きはするかも知れませんが、人がとるかも知れないし、また自分が人のをとるやうなことになるかも知れない――好き嫌ひは變つて行くものですからね。結局永久に在ることでせう

今井　でも昔は一寸氣持が違やしなかつたか？――意地のために笑つてすますといつたやうな――

三上　不義とか姦通とかいふ言葉は未來にはなくなるでせうが、昔でもほんとうの男はそうでしたよ、意地もあるにはあるが、やつぱり智慧ですよ――そりや科學的なあきらめでも、非科學的であるにしても、よんどころないと自分の微力を歎ずるか、意地張つてしまふかするより仕方がありませんよ。女の氣持は飛行機みたいなもので、飛んで行けば限りがないし、おつこちるまではやるんですから――

今井　そりやそうね、しかし、昔の女のやうに如何なる場合にも夫にすがつて行くやうなのがすきか、今のやうにはつきりした態度がお好きですか？

三上　しかし昔でもはつきりした女もあつたでせう

今井　そりや、そう云ひ出したら……

三上　今僕達は職業婦人といふ獨立心の強い自分で働いてゐる人とか、貴女方のやうな新らしいマダムとか、極わずかな部分を見て新らしいとか古いとか云つてゐるが、大部分の庶民階級は昔からちつとも變つてやしませんよ。昔にも、少數の先進的な婦人は常に在つたのだが、今日のやうに交通機關が發達してゐなかつたために、たま／＼一堂に會して話し合ふといふことがなかつただけですよ。だから各々の家庭ではがんばつてゐても今のやうに徒黨を組んでおし寄せて來るといふことがないだけですな

今井　ホ、、、ずいぶんお話が眞劍らしいのね。唯感心したのは、なるほど三上さんは噂に聞いた狸だと思つたわ、どう突込んでも巧く逃けなすつて――

三上　僕は元來女性尊敬家だから――



大原アヤ子

社會時評

大木耳子

一、米價の下落

米が案の如く下落した。

私は前號で、端境期に於ける米價の釣上げについて、一般婦人に警告を發して置いた。

實際に端境期に市場に正米の供給が減ずる（或は不足する）と考へるのは封建時代の考へであつて、今日の如く外米の輸入が自由自在に出來る時代にあつては當事者に國民に對して深切な心掛けさへあれば、決してこの期に正米の不足を來すことなどは有り得ないのである。そして一年中、米價の價格を一定のレベルに置き、程度の限られた高下に置くことさへ不可能な事ではないのである。

國民全體の利便をはかる爲めに價格を調節するどころか、國民の際に乘じて利得しやうとするのが、今日の職業政治家大多數の唯一の目的であるかにさへ見へることがある。現に前月あたりの米價暴騰の際の如きも、某々の代議士政商等は、數百萬の利得をしたといふ噂が巷間に傳はつてゐる位である。

米價の暴落は、あはれな農民が半歳の勞苦の結晶である米の收穫時に、必ず見舞ふ現象である。資金を有しない農民達は、植付け時に當つて地主より借り入れた肥料代その他を、收獲と共に米をもつて納入するのが例である。その納入期に米價が低下することは農民にとつて沸湯を飲まされるが如く、泣くにも泣けぬ苦痛であるに引かへて、地主と田舍の小店主とに好都合であることはいふ迄もないことであつて、かうして米價の引上げ引下げは、長い間自然の現象であるが如くに見せて實は人爲的に行はれて來たのであつた。

今日漸やく一般大衆は此種の奸策を看破し始めた。農民が賣るべき米を持たなかつた先月一駄（二俵）四十圓近かつた米は、彼等が米を得た時には二十一二圓に下落した。今日農民に下されてゐる奸策は、やがては異なつた形に於いて私共に加へられるのである。私共は若干の米を安價に買へることに安心して、その下落の根本にひそむ眞の原因を見究むることを怠つてはならないと思ふ。

二、正しき者は誰か？

東京市の疑獄は、芋蔓をたぐればたぐるほど犯罪者がころがり出て來て、このところ何時を終りとも知れなくなつてしまつた。議院に席を有する者數名、市議員に至つては三十名の上にのぼり、市會の解散說すら眞面目に市民の間で問題となりつゝある狀態である。かゝることがあることは平生想像されないことでもなかつたのであるが、眞相を知る事が豫想以上であつたことに驚愕の外はない。

彼等は全部一樣に、金の爲めにその公職を賣つてゐる。多きは數萬或は數十萬少きは數千と、その額にこそ相違があるが、金によつて節を賣つたといふ罪質に於いて凡てが同罪である。否、地位そのものが（法外に高く）賣らんが爲めに（法外に安價に）買つたものであつたとも云へば云へやう。彼等にすればそれは當然なる物の順序であつて、司直の手に不運にして懸かるゝことになつたことこそ、諦め切れない不幸に思へることであらう。

それにしても、これら醜類の犯罪內容と比較して、所謂共產黨事件の犯罪內容に想到するとき、私共はそこに一種の犯しがたい崇高な精神が漲ぎり流れてゐることを感ぜずにはゐられない。

私共は、今日まだ共產黨事件の內容については、審らかなことを知ることは出來ない。彼等とは正反對の位置にある支配階級の役人達によつて發表されるのであるから、決して彼等によつて共產黨員の好き部分が報告される筈はないのである。であるのに、私共は未だ嘗つて共產黨員が金錢の爲めに、又は彼等の利得の爲めに犯罪したといふことを聞かない。反對に彼等が罪を犯したのは全然ソリダリテーの精神からであつて、赤貧に甘んじて陋居に住み、無產階級の利益の爲めに自己一身の利害を顧みずしてかゝつたのであつたといふことがよく想像できるのである。

彼等は、彼等をとりまく世界に於いて、いかに農民と勞働者との階級が思ひのまゝに搾取され利用され、飢餓と疾病とに委ねられてゐるかを知つてゐる。そしてそれらの人々を救助せんとして彼等自身捕へられることゝなつた。合法的であると非合法的であるとはこの精神には問題ではなかつたのである。從つて、支配階級に屬しない私共が、彼等を怖れる理由は少しもないのである。

巷間傳へきくところによると、これら共產黨一味の掃蕩の交換條件には、日本の一財閥は八千萬圓の支出を承認してゐるといふことである。つまり日本の共產黨を徹底的に彈壓し盡す報酬として、日本の有力な一財閥が政府なり政府の與黨なりの爲めに八千萬圓を與へるといふのである。まるでお伽噺のやうな話ではある。しかし共產黨の上述の精神を知る時、私共はこのブルジョアの恐怖が決して據るところなしとは思へないのである。

今日の彼等を掃蕩しつくすことによつては、共產黨は決してつきないであらう。今日の支配階級の腐敗墮落と、農民勞働者の間にソリダリテーの精神がある限り、それは刈つても刈つても盡きずして、最後に農民と勞働者とを燒き盡くす迄燃えつゞける事であらう。

三、陪審制度の實施

長い間の懸案となつてゐた陪審制度が、愈々この十月一日から實施せられることゝなつた。

原始人の間では、犯罪は今日の私共の社會に於けるとは、よほど

異つた內容を持つてゐた。他人の林檎を窃むとか、仲間と喧嘩をして傷を負はせるとかいふことは、今日の私共の社會に於ける犯罪のやうには、決して重大性を帶びてゐなかつた。從つてその裁判も又至極手輕な、その村落の長老などの考への上で少數の人々と會議の上で決定された。民衆はそれに少しの不平もなかつた。

近代の陪審制度は、この原始村落の裁判の組織に似て、その內容はやゝ異なるやうである。陪審制度は、普通選擧の發生と同じく、中世紀式の專制政治の暴壓に惱んだ、當時勃興しつゝあつた第三階級（後日のブルジョア階級）が、王と王黨の抑壓の下に或時は流血の革命を通じて獲得した權利であつた。從つてその當時こそそれは稍々健康な民衆の意志に沿へるものであつたが、その後第三階級それ自身が支配の地位に据はり、第四階級を抑壓することゝなつた時、その制度の內容は全然別箇のものとされた。

日本などでも、ブルジョアの支配權が今日の如くに確保されてから實施された結果から見て、その內容は略々想像できると考へられるのである。

有產階級化された陪審制度が、いかに馬鹿々々しいものであるか、私はその極端な例として擧げるにかのサッコ、ヴァンゼッチ事件ほど切實にして適當な例を見ない。

昨年八月、サッコとヴァンゼッチといふ二人の伊太利人が、アメリカの恐怖政治の犧牲となつて全くの寃罪で殺人罪として死刑に處せられた。彼等が課せられてゐる殺人事件に關係のない者であるといふことは、凡ゆる方法で證明された。全國の民主々義者、宗教家、無數の勞働組合は、彼等の救命運動を起した。そしてそれは八年續いた。しかも彼等は陪審法廷で公判に附せられ、陪審員の會議の結果として死刑に處せらた。

私共はこの一つの事件をよく記憶して、今日の陪審制度の實施を迎へやうと思ふ。誰かはこの制度はその運用さへ過またなければ、眞に國民の慶賀すべき制度であると云つた。私共はその運用が過またない希望は持てないことを他の多くの制度の場合に餘りに多く見せられて來た。

又一つの僞瞞制度が殖えた！　私共はこの位の興奮程度で御免蒙むつて、扨てこの制度の運用を監視しやう。

四、中學校の改善案

文政審議會に諮問さるべき文部省の中學教育改善案なるものが發表されて、今や教育界は到るところこの問題を中心として是非の議論が渦卷いてゐる。

今回の改善案は、教育の機會均等を促成する意味に於いては、委員の間に可なり頭をつかつた人があつたといふことを語つてゐる。例へば高等小學の卒業生を直ちに中學三年に編入せしむるが如き、夜間中學の公認の如き、實科學校を自由に中學に連絡せしむるが如き、今日迄資力なき子弟にとつて最も不合理不公平な規定とされてゐたものが緩和されて來たことは、喜ぶべき現象であると云はなければならない。

しかしその點をのぞけば、中學の實際化は果していふところの目的を達するであらうかどうか、疑はしいと思ふ。特に、別に實科教育の設備がある中に中學に一部を設けて實科學校に代るべき組織とせんとするが如き、數學、語學等の基礎教育となるべき課目の時間數を減じ、三學年以上は選擇科目とするが如き、要するに『今の學

校出は役に立たない』などゝいふ俗論に媚びやうとして、餘りに小刀細工をし過ぎた感じがないでもない。

劃一主義の弊は、子弟に基礎教育を與へすぎて、實用にうとくなつたのではなくて、基礎教育を與へ足りなかつたか、與へても與へる態度に何等か不滿足なものがあつたことに根ざしてはゐないだらうか。若しさうであれば、これを改善しやうとすれば、いかにしてその質をよくせんか、いかにしてそれを頭の活動に結びつけんかに凡ての考慮が拂はるべきであつて、決してこれを頭腦のない手足のみうごく人間を造ることに向けてはならないのであつた。

要するに、中學校卒業程度でその教育を終る者を使用する工場にある人々にとつては、今回の改善案はある利便があるかも知れない。その點でこれを時代の進歩に適應せしめた（といふことは、今日の資本家組織の利便をはかつたといふのであるが）といふのであれば、私共が共容喙すべき範圍ではないが、もし眞摯な教育家達が眞に國民の將來を憂へて國民の質をよくせんとして練つた案であるとすれば、そこにはまだ考へ直すべき餘地があるやうに思へるのである。

序に云つて置きたいことは、教育家の頭で案出された思想善導の企てほど滑稽で惡趣味のものはない。西洋に對する東洋の復活によつてこの目的を達しやうとして東洋史の講座を置くといふ大學があつたが、平生必要と思つてゐたことをこの際火事泥式に設備するといふのならその役人に不似合ひな機敏さに一應敬意を表してもよいが、それによつて國民の隷屬が確實にされる見込みがあるとするのは餘程おめでたい話である。そしてそれと同じ程度に馬鹿げて滑稽なのは、中學改善案に大日本史、孔子、孟子等の復活によつて忠君愛國の精神を涵養しやうとする企てゞある。

孔子を生んだ支那ですら、（日本が後輩として事毎に下風に見て來た）孔子教が封建的な支配階級的道徳であることに反感を表現して來た。婦人の間に『反三從』運動があつたことは、もう十年も昔の事であるが、最近にも九月十五日の濟南電報は、孔子祭なるものが全國を通じて今年限りで廢止さるべき氣勢にあることを報じてゐた。

本國支那で封建時代の遺物として、書庫の隅にでも置かれやうといふ孔子を、日本に復活させやうといふ教育家の頭は、いかに窮すれば迚餘りにもあはれなものではないか。それらの手段によつて國民の隷屬が確保されやうと考へるその頭こそ劃一主義を生んだ頭であつて、その頭にして改善されない限り、百の改善案も水泡に歸することであらう。

五、ファシストの伊太利統治

九月二十日のローマ電報は、首相ムッソリニ氏を議長とするイタリーのファシスト黨大會議は、茲今同大會議が王位の繼承、皇帝の權力特權、閣員その他の大官の任免を司どり、國家の條約その他國家の政務全般に容喙する權利を保有し、同會議を事實上イタリーの統治者とする新法案を可決してムッソリニ氏の萬歳を叫んで會を閉ぢたといふ事を報じてゐた。

こえて二十八日のパリ聯合は、フランス急進社會黨機關紙コチヂアンのローマ特電であるとして、伊太利現國王エマヌエル三世に退位の意志があり、首相ムッソリニ氏に現王の甥アブリア公擁立の意があることを報じ　ゐた。

近代國家としての伊太利の出現は、まだ百年に充たぬ生々しい歴

史である。その時までオーストリーの支配をうけてゐたイタリーが、國家として統一され獨立を得たのは、主としてカヴール、マヂニ、ガルバルヂ三人の意志によつてゞあつた。このうちマヂニとガルバルヂ（彼の赤シャツの騎兵團は、勇猛の聞えがあつた）とは、統一後のイタリーを共和國にしやうといふ意志を有してゐたが、カヴールは君主政を主張し遂にサルヂニア家を推してイタリーの王とした。茲來八十年、三世代伊太利を支配したサルヂニア家が、今又黒シャツ黨たるファシストに事實上の權勢を奪はれて、次第にその地位を失ひつゝあるのである。イタリーの歴史から考へれば、敢へて驚くほどの出來事ではないかも知れない。

私共が却つて奇怪に思ふのは、嘗つてはこの黒シャツ黨の親玉ムッソリニを氣取つて、反動政治を高調した人々がそんぢよそこらにあつたことである。ムッソリニが映畫にとられてその獨裁振りを世界に誇示すると、それに倣つて宣傳用の映畫に納つたこともあつた。ファッショを自ら名乘る下位春吉とかいふ人物を援けて、全國に演説行脚をさせた者もあつた。會津の人々は、現に白虎隊の遺跡に建てるべき銘碑を、ムッソリニ氏から送られて、これを受取つたばかりである筈である。

云はないことではない。彼等は本質的には何にも知らないのである。知らないものを一寸した氣まぐれに擔いで、今度は引込みがつかなくなつたのである。會津の人々が、ムッソリニ氏寄進の銘碑をどう始末するか、見物である。

しかも彼等は、口を開けば外來思想のキケンを叫ぶ人々である。國家主義の見地から云つて、皇位の繼承に容喙し、勝手に自黨に有利に憲法を變更する以上の危險思想があるであらうか。

かゝる危險思想をである。彼等はこの思想を摸倣し、支持して來た。共産黨の危險思想に較べて、彼等は現に權力を有し、支配の地位にある丈けにその危險思想は更に深刻であり更に危險である筈である。

その彼等が、危險思想と見られず、彼等の行動を監視し、彼等の密議をかぎつけるスパイも警官もゐないところを見ると、權力を有する者の危險思想は、又自ら別だといふのであらうか。

六、流行を排す

春と秋との季節は、新聞や雜誌に流行記事が賑ふ季節である。特に秋は結婚シーズンと云はれる位で、普通最も多くの結婚が行はれる故か、ともかくも秋の流行宣傳は最も盛んである。

流行であるといふと、誰も格好や色などは問題にせず、若い人など特にどんなものでも買つて行くやうであるが、流行品をつくる資本家のコンマーシャリズムの反映といふ譯でもあるまいが、流行品には實にどこか俗惡で輕薄なところがある。それと同じやうに、流行品づくめといふ風采は、決して高く評價出來ぬ何かゞある。

この二三年前から、婦人雜誌が夏の浴衣地、冬の銘仙地などを盛んに誌上で宣傳して賣込んでゐるやうであるが、あれらは東京の大デパートとの連絡だといふ者がある。つまり東京の大資本なり大デパートなりが婦人雜誌の宣傳力を利用して、何等かの部割で宣傳させ販賣させてゐるといふのである。事實だとすれば、卑俗な記事で俗化され、流行品だと云つて高いものを賣付けられる婦人雜誌の讀者たるもの、こゝ踏まれたり蹴られたりの御難であると云はなくてはならない。

流行品とは何であるか？　資本家の大工場で多量に生産された品物が、季節に當つて賣り出されるのをいふのである。であれば、それは買手の利便といふことより、無論賣る者の利潤と利得とを目標として製産されたものであつて、資本家は品質の不滿足な點を宣傳と廣告とによつて糊塗して國民の手にわたすのである。

かうして私共は一から十迄資本家の支配をうけることになる。流行を逐ふなど〻いふことは、最も多く資本家の支配を甘んじてうけるといふことになる。今に假に自覺して見れば、婦人は單に流行を逐ふといふことの惡趣味であるといふことにより、資本家の支配を自分の身體にうけるといふこ とに侮辱を感じて、反流行的なものを、身につけることによつて自分達の反資本主義的な立場を表示するやうになるかも知れない。又婦人の自覺がその程度に實際的のものとならなくては、今日の社會の飛躍は仲々に實現は困難であるであらう。

七、『女人藝術』の立場について

入交總一郎氏が『婦人運動』で發表された漫文については、山川菊榮氏が前々號で明快に反駁された。

『婦人運動』の奥むめお氏も、實は入交氏の意見には『全然反對であつて、私はこれとはまるで反對の考へだ』と云ひ乍ら校正にたづさはつたことを明記して、陳謝の意を表明して居られた。しかるに入交氏がその奥氏の立場を少しも顧慮せず、既に事理をつくした山川氏の説明があるにも拘らず、その反フエミニズムの一本槍で同じことを何時迄も忠告して下さるのは滑稽である。今時フエミニズムの立場がどんなものかを知らないで、雜誌なんか拵へられるものではない。又よしんばそんな雜誌を拵へたところで、全體何の足しになるのだらう。

第一に、私共は入交氏が危惧される如くに『女人藝術』に鑵詰にされてはゐない。『女人藝術』に書くものは、他の雜誌に書くことを許さないとか、かく〱の行動を許さないとかいふ規定もない。『女人藝術』は私共により多く機會を與へこそするが、私共から機會を奪つたことはない。無名の人の投稿が殺到するとか、前にどこかに一度でも物を發表して才能を持つことを示した人の住所を求めて、その人のものをとつて見ることが、營業雜誌であるならこんな煩には堪へぬであらうと思はる〻努力をして來てゐるのである。これはそれらの人を捕へて鑵詰にしやうとする意圖からでは決してなく、反對にそれらの人にも機會を與へやうとするが爲めである。

從つてかうした態度が、『進歩しやうとする婦人の袂を掴んで無理に保守の線内に止めて置かうとしてゐる』ものでないことも無論のことである。長谷川氏の意圖はそれとは正反對に、折角進歩し自己を表現しやうとしてゐる人々が機會を有たずに空しく保守線内に朽ちやうとしてゐるのを引出し、彼女達の爲めに道を拓き機會を與へてやりたいといふ老婆心から起されたものであつたと聞いてゐる。實際に出來上つた雜誌そのものから云つて、主張にそのどこに私共が保守線下にあることを示すやうな記事があつたであらう。却つて私共は本誌は獨立した大雜誌としてはその主張に無産階級的のものを持つ唯一の婦人雜誌ではないかとさへ考へ乍ら、毎號を手にとつて見てゐるのである。この明らかな事實を無視して迄『婦人だけでつくる雜誌であるから保守的だ』と云はれるのなら、入交氏は物の見方を唯一つしか持たない人であると云はなくてはならぬ。

無產階級的に云つて、婦人が婦人だけて集まるといふ理由は皆無であらうか。

ロシヤでは、ゼンアトデルが出來る時に、入交氏のやうな器械論を持出した人が可なりあつたらしい。ゼンアトデルは（共產黨の婦人部）婦人を男子から引はなすものであるから、それはフェミニズムの運動であるといふ反對があつた。が、當時指導的地位にあつた婦人達と實際を知つてゐた黨の幹部達とは、集會又は組織の內部で、ともすると婦人達が傳統的な感情から男にゆづらうとする傾向があり、男達も又同じ理由からそれを當然として受ける態度があることを看取した。そして反對論には耳を傾けずにゼンアトデルを設けることゝなつた。それが千九百十九年で、從來『婦人の活動は急速にひろがつた。』そして『創設當時九千四百九十九人であつた黨員が昨千九百二十八年には十四萬人となり、黨員中の僅かに七分強を占めたのが約一割三分を占めることゝなつた。』

私共は、革命直後のロシヤにあつたことは今日の日本にも隨所にあることを知つてゐる。これが組合に婦人組合が起り、無產政黨が婦人部を有する理由であつて、『女人藝術』が同性のみによる孤立の道をとつたのも、同じ實際を知つてゐる事が一つの理由であつた。

くり返して云ふが、私共はフェミニズムの運動をしてゐるのではない。男女が混合してやるのでなければ超フェミニズム運動にならないやうに感ずるのは、入交氏の無經驗な頭が考へさせる錯覺であつて、私共は入交氏よりはもう少し經驗と頭腦とを用ゐてやつてゐるのであるから、入交氏は他人のことを餘り頭痛に痛まないで、自分のことを氣を注けられるがよいと思ふ。（十月三日）

新刊紹介

荊棘の實――柳原燁子著
新潮社發行

氏の一編の長編小說のやうな生涯はあまりにも有名である。然し何の場合でも同じくそれは紙に刷られ口に語られる度每に創作假作が附加されて終には全く異つた他の一編の傳奇傳說と變體するものである。氏の自抒傳はあるべくしてまだ本にならなかつたが初めて作者は自傳を綴つた。

自ら「荊棘の實は事實もあれば創作もあると思つて頂きたい」と云ふと同時に「この自傳を書くに際し第一に心に掛るのは誰かに迷惑を掛けることがあつてはならない」と云ふ。かるが故に嘗つて榮えた明治初期より大正頃の貴族富豪の私的生活を熟知した作者のこと故、――描寫はやゝ平面的ではあるが興味ある大衆向讀ものであらう。（ル・プランタン）

無憂華――九條武子著
實業日本社發行

一年の後の今日九條武子を人々はまだ記憶から消しはしまい。あの美しい顔、眉の線、佛教の伽りようびんがのやうな聲、いみじき存在であつた彼女、――然し時間はいくら手を差し伸べても過去は次第に遠ざかり消え去つてしまふが、この本を手に取るとも一度彼女が現前して來る。

自身の裝幀、自畫像、自筆、寫眞は內容と比しき位興味があらう。ともかく明治、大正、過去の貴族型佳人の最後の代表者の內部生活を識るためにも又單に綺麗なやさしい讀物としても此本はあつても惡くない。（ル・プランタン）



篠田ちか子

いかに婦人運動を展開すべきか

――困難なる反動期に際して――

北山常子

(一)世界資本主義の一般狀勢
(二)日本の狀勢
(三)過去に於ける婦人運動
(四)婦人同盟の解體
(五)新らたな私たちの任務

(一)世界資本主義の一般狀勢

世界資本主義は、その生產に於て貿易に於て、また生產の技術的進步に於て歐洲戰前よりも强力化してゐる。しかし、この强力化は相手を押しのけ、打ち倒すことによつてのみえられる。卽ち國際的には弱少民族大衆の利益の搾取と、その利權の爭奪、國內的には、自國無產大衆を常に飢餓戰につき落すことによつて。

まことに、それは、かみそりの刃を、渡る如き危險なる强力化である。

「帝國主義の時代は、××しつゝある資本主義の時代である。」

帝國主義的金融資本の鐵鎖は、あらゆる國、民族、種族のプロレタリアを、金融資本財閥の軛の下に、その「搾取、抑壓、奴隷化を無限に尖銳化する。」

かくて、あらゆる國、種族、性、職業の國家的限界差異を問はずして、萬國の勞働者はかたき團結の下に戰はねばならぬことの必要に迫られる。

國際的にみるならば、世界帝國主義に××する弱少民族の解放運動は新らたなる革命の波のたかまり來たのを私たちは知つてゐる。

支那××は、大衆的な大××にも拘らず×××黨の指導下に廣汎な大衆が反抗してゐる事實、またアラビアに於て、モロッコに於てシリア、インドネシア、エジプト等に於て、民族解放運動は、帝國主義國家にとつて決定的な打擊になりつゝあるのを知つてゐる。

かくて、世界の一般的狀勢は資本主義の强力化に伴ふ矛盾の增大、植民地再分割のための不可避的な第二世界戰爭の招來、各國に於ける無產大衆の增大と反抗、これに對する×××ひな支配階級の分裂政策、左翼組合及び前衞黨に對する大衆的××と投獄××は各國共通の事實となつた。

(二)日本の狀勢

日本に於ける、三月十五日以來、わが勞働者階級運動の、もつとも戰鬪的な前衞分子に加へられつゝある××は、いまや、はかり知ることの出來ぬ程に偉大に成長しつゝある勞働者階級の××的エネルギーと、眞に勞働者階級の友としての忠實なる指導者に對する、地主資本家權力の××の表現であり××狂ひの反抗である。

反××の强固な同盟を結んだ日本の支配××は、戰鬪的な勞農大衆の一切の組織の破壞によつて階級的前進を必死となつて阻害してゐる。

かくて、國民の血稅四千萬圓は、一部大金融資本閥の××保護のための支那××となり勞農階級の反抗を抑壓せんがためには、治安維持法の改惡、全國的スパイ網の完成、思想善導費による學生監の增員、東洋思想及び精神科學講座の新設、學校は××學校となり、社會科學研究の學生を放校する。

ストライキは××によつてふみにじられ、言論、集會、結社の自由は完全に剝奪されて今なほ、戰鬪的階級戰士の××は續けられてゐる。

まことに、××へる支配者の亂舞を見よ！

かゝる困難なる、反動の波の高まりゆく現在の狀勢の下に於て、私たちの任務は、人口の半を占める大多數の婦人の群——二千七百八十九萬餘の中五百三十六萬の大部分は小ブルヂョア及び小數の大ブルヂョア婦人である。他の一千萬人は多かれ少なかれ自己の收入を有する婦人である——を、反動の網の中にさらはせるか、ブルヂョア民主々義の獲得の歷史的鬪爭に參加させるかいづれかの必然に迫られてゐる時に於て、資本の攻擊にそなへ、且つ、鬪爭のために婦人大衆を動員し、かくて勞働者階級運動の陣營を强固にするところの、分散され、無力化せられたる力を統一せんがための戰でなければならぬ。

そして、こゝに「婦人運動」を問題にしたのも右の如き見地と、現下の情勢の要求するところだからである。

(三)過去に於ける婦人運動

まづ私たちは、一應過去に於ける婦人運動を大凡第三期に分けて考へてみよう。

第一期、かの赤瀾會の少數派の運動時代は第一期と云へよう、何等組織的な活動なしに衰微した。

第二期、大正八年總同盟が、明確に勞働婦人の利益のための組合鬪爭の機關として婦人部を設くるに至つた。大正十二年の大會には女代議員を見出し、また同じく十三年には、婦人會員のため勞働號外婦人版を發行した。大正十四年總同盟の分裂の結果、日本勞働組合評議會が創立され、婦人部を設け各地方評議會にも婦人部をおくことゝなつた。

この當時一方智識職業婦人の集團であつた新婦人協會は、當時のデモクラシー獲得運動の最高潮期に乘じ大正十一年治警五條の撤廢を要求し遂に兩院を通過させるに至つた。

第三期、無產婦人の政治鬪爭への進出である。

かの一九二二年頃より發展し來たり、一九二五年に至つて、最高潮に達した政治への傾向は、勞働者階級による婦人運動の問題を、現實に、政治的問題とするに至つた。勞農黨のかゝる方面への活動

が開始せられ、かくて一九二七年六月關東婦人同盟が結成せらるゝに至つた。

其後、相ついで、日勞黨の全國婦人同盟、社會民衆黨の社會婦人同盟の二團體が創立せられた。

まことに、左翼婦人同盟の創立こそは、從來に於ける個別的、分散的、排他的に戰はれた、小ブルヂョア婦人運動を、凡ての抑壓されてゐる勞働者、農民、小市民等により無產階級は運動への合流轉化による闘爭こそ、婦人を封建的隷屬と資本主義の鐵鎖から解放することを明確に認識して闘爭への第一步をふみ出したのであつた。

其他の婦人團體には、婦人參政同盟、全國廢娼同盟、婦選獲得同盟等がある。だがこれらの運動が小運動に止り、衰微するところの社會的根據は、曾て民衆に對して政治的自由を與へ、婦人に對してさへも或程度の政治的自由を與へるかにさへ見えた我國のブルヂョア政黨は資本主義が帝國主義的に發展强力化する過程に於て、プロレタリアートの政治的擡頭をみた。卽ちブルヂョアジーは新たに勃興した彼の敵をみて、早くも從來抗爭しつゝ來た封建勢力との妥協抱合によつて、普選はゆがめられたる普選となり、しかも、民衆を抑壓するところの反動政策をしかざるをえなくなつた。

こゝに、ブルヂョア政黨にたよる、婦人運動の發展せざる根據がある。

なほ、其他の團體は政府により、婦人大衆眠り込ませのための、或は露骨なる反動團體としての、愛國婦人會、赤十字、女子青年團等があり、向ふ六ヶ年間に我國の外債十四億七千萬を、一月一錢の貯金によつて償還せんとする愛國貯金があり、雜誌、主婦之友、婦人世界、等々は、俗惡なる思潮によつて、婦人の隷屬化のために貢献してゐる。

（四）左翼婦人同盟の解體

プロレタリアートを先頭とするところの、ブルヂョア民主々義獲得のための勞働者運動の一翼として、その闘爭の一步をふみ出した婦人同盟は、だが、その闘爭の過程に於て誤謬を重ね來つた。勞農黨の支部の存在するところ、全國的に支部準備會を有し昭和二年十二月全國準備會を開き、昭和三年三月全國大會を前にして從來の誤謬をみとめ、より進出せる闘爭に參加せんために遂に解體するに至つた。

以下、私は解散の根據をのべてみやうと思ふ。

第一に、舊婦人同盟は、工場に基礎を有せざる社會主義婦人の集團であつたと云へやう。

從つて、如何なる闘爭をも戰ひ拔かんとする努力と熱意とを有せるにも拘らず、否それ故にこそ、大衆から孤立するの危險があつた。これらの人々は、婦人同盟と云ふ限られたる闘爭團體に集つてゐるべきではなく、階級闘爭のあらゆる場面に行くべきであつた。

第二に、日本婦人は特殊的封建的社會的な壓迫と、あくなき資本主義の搾取の重壓を受けてゐる。だが、それにも拘らず、廣汎なる婦人大衆は、未だ資本に對する反抗にすらもふるひ起ちえない狀態にある。勞働する大衆は、彼れの職場、工場、限られたる世界より他のことを知らない。闘爭こそが後れたる大衆を啓蒙し、敎育し、階級闘爭へ參加すべく訓練づける。初步的反抗にすらふるひ立ちえない大衆にとつては、婦人の政治的自由獲得の要求は、直接、切實

の問題たりえない●

後れたる大衆を婦人の政治的自由獲得の鬪爭に、いかにしてふるひ立たしむべく戰つたのであらうか？

大衆は、現實的直接の壓迫搾取の發現に對してのみふるひ立つのである。だから私たちは、現實的經濟的鬪爭を戰ふことによつて、大衆は自己の政治的壓迫を知り、それに對する反抗と要求のために鬪爭するに至る、との見解の下に鬪爭を展開してゐたのである。

從つて、婦人同盟は、それ自身明確なる鬪爭目標を規定せるにも拘らず、事實に於ては、勞働組合の職能をも負うてゐたのであつた。

こゝに、舊婦人同盟は、組合の發展と相接觸するに至つたのであり、また、勞働組合との接觸のみならず、家賃、ガス、水道料値下げ運動の如きも、これらは斷じて婦人のみの要求でもなければ鬪爭でもあるのではない。それは、一般無産者運動の範疇に屬すべきものであつた。從つて、かゝる鬪爭も、婦人同盟のみが分散的、孤立的に戰ふべきではなく男子と共に、より强力化されたる要求として、戰ふべきであつたのである。

第三に、全被壓迫民衆のための共同戰線黨は、婦人の政治的社會的抑壓に對して、綱領をかゝげ、これが貫徹を期してゐる。婦人同盟は、直接には、この黨の指導下に鬪爭を展開すべきであつた。だが、以上の如く、組合の鬪爭及び市民的要求の分散的な鬪爭は、嚴密には、大衆黨の發展とも接觸するに至るのである。

だが、以上の如き舊婦人同盟の誤謬は、婦人同盟のみが犯した誤謬であるのではない。左翼勞働組合は、現實に勞働婦人に對する積極的な宣傳煽動組織の任務遂行の途についてゐなかつたのである。

「わが國の婦人が今日もなほ、封建的隷屬に縛られてゐることは事實だがこの封建的隷屬は今日の狀態に於ては全く變質してゐる。」

「支配の側から見れば、政治權力は資本家が覇權を握つたところの地主と資本家との同盟の手にある。被支配群たる婦人の地位も一面に於ては封建的隷屬を受け、同時に他面に於ては、資本主義的支配に縛られてゐる。と同時にもはや封建的隷屬は今日の婦人の地位にとつては何等基本的決定的意義をもつてはゐない。男子に對する婦人の鬪爭と云ふ反封建的鬪爭の代りに、資本家階級を盟主とする地主資本家に對する、勞働者階級を盟主とする勞働者農民の鬪爭と云ふ、階級と階級との全體的鬪爭が今日のわが婦人の解放にとつても、決定的意義をもつてゐる。」

「婦人は勞働組合に、農民組合に、その他、日常當面の經濟的利害に關する大衆組織に加入する。勞農婦人大衆は、この大衆組織の鬪爭の發展の中に政治的鬪爭の訓練を受けるのである。

「だから婦人は勞働組合、農民組合、その他の經濟的大衆組織に動員され、その組織の鬪爭に於て政治的に訓練されると同時に、その鬪爭を通じて事實上大衆黨の基礎をなすものである。」

「我々は婦人の政黨加入の自由の獲得參政權の獲得を階級的に戰はなければならぬ。それらの問題を婦人のみの問題としてはならぬし本來さうあるべきでない。

そこで、この鬪爭は勞農政黨に於て勿論なさるべきであるが、より廣汎に戰ふために、現在の婦人同盟婦人のみの組織を全根本的に改革して、男子と共に婦人の政治自由獲得を階級的に獲得するために、「政治自由獲得同盟」と云ふ全然別箇な組織に再組織することが必要であると考へる」

かくて、勞働組合、農民組合、借家人、消費組合等へ再組織され

つゝ本年三月婦人同盟は解體するに至つたのである。

（五）新らたな私たちの任務

三月十五日の日本共產黨に對する大衆的な逮捕投獄以來、支配階級の×××狂ひの彈壓は益々ひどくなつて來てゐる。階級戰士は日毎に××され、治安維持法は死刑をもつて迫り、暴力的に、立法的に、組織的な迫害を急いでゐる現在に於て、私たちの活動は極めて極限されてゐるが、まづ、私たちの任務は、解散されたる戰闘的勞働組合の再建のための闘爭である。私たちは、第一に、工場、農村の大衆の中に行かなければならぬ。

私たちの活動の主力は、何よりも先づ「大經營の勞働者の組織のうちにある。けだし大經營（及び工場）には、單に數に於て卓越せるのみならず、影響力、發展力、戰闘能力に於てより卓越せる勞働者階級の部分が集中されてゐるからである。」

かくて、私共は、かゝる工場の中に於て、プロレタリアートの闘爭に參加させ支持させるために、勞働婦人に對する執拗なる宣傳、煽動組織のための活動を開始しなければならぬ。

「私は、工場へ！　大衆へ！　と叫んでこの報告を終るものである。吾々が、より勢力的に、より強烈に、より執拗に努力すればする程、吾々は愈々早く大衆を獲得し、益々以つて資本主義の×局に切迫するに至るであらう」

支那を中心とする、世界帝國主義戰爭の危機は迫つてゐる。人類は、十年前の世界大戰爭よりも更に大きい慘虐な犧牲と禍とに近づきつゝある。日本帝國主義は、支那出兵によつて、日支勞農大衆を××せしめ、たかまりゆく國內勞働階級の不滿反抗を「國」や「戰爭」によつて×り込ませつゝある。

×國や、×國の名の下に、夫や息子を一部金融ブルジョアジーの××保護のための××に供されるに過ぎない帝國主義戰爭に對して、私たちは廣汎な婦人に對して、戰爭××を宣傳し戰爭反對同盟に組織しなければならぬ。

階級闘爭が益々尖鋭化し、白色テラーの横行が公然とのさばり出して來た今日、階級戰士は××され、家族は飢ゑに泣いてゐる。未だ階級闘爭に參加せざる婦人達を「犧牲者救援會」に組織し、前衛に對する大衆の信頼をたかめ、初歩的な階級動員のための組織體にしなければならぬ。

以上述べた組織の闘爭は、いづれもプロレタリアの闘爭綱領に属すべきものであるが、これらのいづれにも組織せられざる層――女子青年層小ブルヂョア婦人團體、またいかなる團體にも属せざる小ブルヂョア婦人等――がある。

これらの人々を、あますところなく我々の闘爭に參加させるために、即ち「より廣汎に戰はんがため」に、各組合、黨の闘爭と接觸せざる婦人の大衆團體が必要であらう。もちろんそれは極めて大衆的な、動員形態のものであらう。

「我々は、教養ある階級の精鋭が、我々の運動に參加して來るのを見てゐる。大都會に於ても、地方に於ても、到るところで、人々は運動に參加し、或は參加することを欲し、そして無爲のうちに過すことを待ちきれなくなつてゐる。我々の重大な過失の一つは、これらのあらゆる力を用ひることを知らないことであり、彼等にふさはしい仕事を指示することを知らないことである。これらの勢力の大多數は、完全に「勞働者へ行く」可能をかいてゐるのである。



婦人の坑內勞働と深夜業の禁止について

——鑛夫扶助規則改正と二つの禁止——

金子しげり

鑛山勞働者の勞働條件改善の爲の、鑛夫勞役扶助規則改正案が、愈々去る九月一日公布された。これに依て、從來屢々問題となり來つた婦人の坑內勞働及深夜業の禁止が愈々行はるゝ事となつた。

尤も本令の施行期日は昭和五年九月一日であり、その上附則に於て婦人の入坑禁止の第十一條の二の規定は更に施行後三ヶ年の適用をみない事になつて居り、又選炭作業に從事する坑外の婦人勞働者に深夜業を禁ずる第七條にも、二交替制にて就業せしむる場合は、同じく三ヶ年の適用猶豫を受ける事になつて居るから、婦人の坑夫が消滅し、深夜業がなくなるのは、今から五年後の事になる。

いつの場合にも、この付則といふものが、全く以て曲者なのであつて、彼の紡績工場に於ける深夜業の禁止の如きも、現行の改正工場法に於ては、已に禁止せられて居り乍ら、附則のおかげで、今日尙深夜業が行はれて居るのであり、その猶豫期限が愈々滿了に近づき、明年三月からは、深夜業禁止を實施せねばならなくなつた。昨今、しきりに、資本家の間に於て、實施反對の運動が劃策せられつゝあり、これが、實施に相當の妨害の動力あるべき事を知る時、鑛山に於ける如上の問題も必ずや五年後に、無事實施せらるゝか、否かは案じられるが、しかしともかくも、今日迄に何等の法律的保護を受けて居らなかつた七萬の婦人鑛山勞働者の爲めに新則の公布はまづ欣ばなければなるまい。

六百萬の農業婦人、百萬の工場婦人に對して、七萬の數字は餘りにも尠いが、しかも、勞働者として、婦人として彼等が、如何に劣惡な條件の下に働き、如何に悲慘なる生活に甘んじつゝあるかを知る時、彼女等の問題は今少しく一般婦人にも切實に考慮せられねばならぬ。

殊に、新則に規定された婦人の入坑禁止、及深夜業禁止の二項は共に鑛山に於ける婦人の勞働問題の中軸を爲すものであるだけに、彼女等を保護の目的で制定された法律が、（たとへ過渡的であるにせ

よ。)如何に彼女等の生活に根本的の變化を與ふる事になるかに就て聊か述べてみたい。

今日日本の婦人鑛山勞働者は約七萬、其數は年々減少しつゝあるが、總數の六割五分から七割は、坑內作業に從事して居り、又九割八分が石炭山に働いて居る。

從つてまづ婦人の入坑禁止は、約五萬の女坑夫の失業を意味する鑛山に於ける婦人の勞働者は、工場のそれと異り、年齡に於ては廿歲以上が七割から八割を占め、從つて已婚者が總數の約七割五分近くに上つてゐる。夫婦稼ぎは坑夫生活の常態であり、妻の賃金は直ちに家計につぎ込まれるのである。(未婚者の場合も父或は兄等の家計を補助して居る。)

茲に於て、婦人自身の保護及母性の保護の目的より出發する婦人の入坑禁止は、さしづめ彼女の家庭をして生活苦に陷れる結果を招來しない譯には行かない。

次に示すのは、先年某炭鑛を視察した時に得た實際の數字である

〇〇炭鑛×月上半期賃銀調

夫婦共稼	親子三人稼
四一・〇〇(圓)	七二・八七(圓)
二九・七九	七九・四八
三〇・一八	一一六・〇四
三七・五五	八五・〇五
二四・八九	六一・四一
四六・〇六	七一・八五
三四・八一	五八・七九
四六・九八	六一・四三
五八・六〇	六七・〇〇
四九・七〇	五二・九六
三六・四九	七二・六二
五五・〇九	五四・七二
五〇・六一	六一・一六
四八・二七	七一・五二
四八・六五	五三・二一
平均四二・五八弱	平均六四・四八強

この數字は主として母なり娘なり、妹なりが殆ど半ヶ月の大部分働きに出た家のみを舉げてみたのであつて、夫婦共稼ぎの平均四十二圓五十八錢の半分、即ち二十一圓餘は妻の所得であり、親子三人稼の內約二十圓は妻乃至娘の所得である。

同じ所で得た調査中、女二人で同期間に五十一圓三十九錢、女一人で四十一圓三十四錢を得て居る例もあつた。

更にこれらの收入で生活する家族數を調査したならば、次の樣な例を得た。(●印は稼働者、餘の家族はその收入で食べて居る。)

(一)共稼の例

A ●夫(三四) 祖母(六七)
　●妻(三四) 子(一一、一〇、五、三、二)

B ●夫(二七) 老人(六一、五六、六八)
　●妻(二六) 子(四、一)

C ●夫(四〇) 子(一一、一〇、八、六、四、三、一)
　●妻(三二)

(二)女主人の例

A ● 妻(三一) 夫(三三)
祖父(六一)
祖母(五〇)
子(八、三)

B ● 娘(一七) 母(四七)
妹(九、三)
祖母(七一)

C ● 妻(三三) 夫(四〇)
子(一三、一一、九、七、四)

婦人の入抗禁止が、直ちに明日の生活に脅威を與へるものである事については、政府も資本家も十二分に承知して居る。資本家の間ではこの事を、入抗禁止反對の有力な理由と屢々なし來つてゐる政府部内の、しかも社會局の內部にさへも、この事實に對する適應策の容易に發見し難い事の理由を以て、禁止尚早論を稱へる向さへあつたと聞く。

もしそれ當事者たる女坑夫に聞くならば勿論『明日が日からどうならう』といふ。

但し彼女等が、その抗內勞働に就て語る所を更に聽くのでなくては、この問題は解決しない。

彼女等はいふ。

『外で、これだけ稼ぐ仕事さへあれば、すぐに止めたい。』

ある鑛山で十六の年から二十五年間ほど炭坑內の勞働を續けた坑婦の話を聞いた。

『廿五年間一日も上から岩が落て來はせぬかといふ心配をしない日はありませんでした。』

資本も入らず、被服費も、雨具も、交通費も入らぬこの職業は、慣れて見れば、外部の人の考へる程の苦惱は尠いとは、皆がいふ所である。殊に共稼ぎでは女はいたはられ、工場婦人より餘程樂しみもある。たゞこの生命の恐怖だけは、如何なる設備でも今日取除く事は出來ない。だが然しこれは、男子の坑夫も同じ事である。

そこで婦坑の場合、女なるが故の苦しみは鑛山勞働者の生活が、炭鑛附近に家族的生活を營む關係から、いつでも女は家庭勞働に從事しなくてはならない事にある。炊事、育兒其他の繁雜な家事の雜務を、彼女等は坑內勞働の前後に於て働かねばならない。炭鑛主側では、托兒所の施設や、水道其他の設備、又或る所では、共同炊爨さへ計劃し、一部分實行して居る所もあるが、何しろ、未だ男子本位の封建的な家庭生活が行はれて居るから、坑から出れば、夫は旦那樣で、一風呂あびると、浴衣かどてらでも引かけ、晩酌、碁打と、世間の夫の生活をする。坑夫の生活で飲酒率の多い事は常に傳へられて居る所である。

勿論、女の側でも家庭勞働の忙しい折は、入坑の方を休んで、折合せるから、妻の收入は必ずしも夫と同額にはならない。又同じ程精勤する爲には、縫物を外に出し、子供の世話を他人に賴むから、妻の收入の半以上は、妻の仕事を他人に賴む爲に費消される。

そこで資本家側では、彼等の生活の仕方を改めて、共稼ぎ制度から、世間普通の夫は外に、妻は內にの生活に引戻せば、多く働いて多く散じない生活になると考へて、入坑禁止の對策として、教育運動に力を注ぎ、妻の自覺を促がす方針をとつて居る所もある。

又、偏に他の收入によるべきであるとして內職、副業の開發に研究努力して居る向もある。或炭鑛では、掘り出した炭を運ぶ籠の製造

を、或は疊表、養豚など著手しては居るが、まだこれによつて、入坑禁止による坑婦の失業に備へる見極めはついてゐない様子である。

要するに五萬の婦人坑夫の失業に對して、吾々は明確な對象を今日まだ示されてゐない。尤もその爲の附則であり、猶豫期限である事は一應首肯けるが、尙今から備へるべき事を、一般婦人も亦忘れてはならない筈である。

第二の深夜業禁止によつて、婦人の受ける影響は、入坑禁止の如く大ではない。

深夜業は坑內でも行はれて居るが、入坑禁止は、必然的に坑內の婦人深夜業を禁止する事になり、同時に他方に於て深夜業禁止が坑外選鑛場に於ける選鑛婦の上に行はれる。

今日選鑛婦は主として娘が從事し、全數は約二萬であるが、これが、坑內から掘出される石炭乃至鑛石を選り分けるのに、特に石炭に於ては、需給關係から、晝間のみの作業では足りないとあつて、(これのみの理由ではないが)現在深夜作業を行つて居る爲に、妙齡の娘が、或は寒風に晒され或は暑熱に蒸され乍ら、濛々たる炭塵を浴びつゝ、文字通り眞黑になつて作業して居る。

そこで之が禁止されゝば、資本家としては、選鑛場を增設して、或は二交替制を用ひて、晝間二倍の仕事をするか、貯炭場を增設して、夜間山から出る炭は一時そこに貯へるかの方法による事になる。從つて、選炭婦の需要が增加して、入坑禁止の失業者の一部分はこれに廻す事も出來るとされて居る。(この場合勿論坑外婦の方が坑內婦より賃銀は廉い。)

先づこの方には差當りの經濟問題はないが、年頃の娘が、(全部通勤)午後十時乃至十二時頃に、作業を了へて、歸宅せねばならない點などに、管理上の細い問題が種々橫つてゐる。

今度の新則の原案は大分前から內務省社會局で立案され、石炭事情調査會(官民合同)で、相當もまれて遂にものになつたものらしいが、仄聞すれば、二つの禁止とも資本家側が可なり積極的の賛成を表示したので、機運が速進されたらしい。勿論この資本家は大資本家で、禁止による打擊は群少炭鑛主にあるとされる。副業を考へたり教育を奬勵したりする事が出來るのは、大資本家である。小資本家は自身の破滅に對して、雇傭者の生活を、或は顧みられない場合、否顧みない理由とする場合がないとはいへない。

玆に於て、五個年の附則猶豫期間內に於て、與ふる限の對策が責任者間に講ぜられねばならぬ。と同時に、この問題に對しては、勞働組合無產政黨は固より、特に婦人大衆も亦、自分たちの問題として、この問題に就て考慮し、當局の責任ある對策が明示せられるやう、而して、豫定の期間に、禁止の實施のみられるやう、相當具體的な方法を以て今日から、對してゆかなくてはならぬ事を痛切に想ふ次第である。

勿論この事は、單に鑛山勞働婦人の問題に止まらず、紡績の深夜業禁止、製絲女工の待遇改善問題等他の婦人勞働問題に對しても同じく婦人の執るべき態度である。

今日の日本に於ては、政治運動、平和運動に於ても同樣であるが婦人の勞働運動に對しても自分はこの點から、今少しく知識階級の進步主義婦人の協力が献げられてもよい筈であり、その具體化を切望して居るものである。(三、九、六)



堀喜子

斷想

山川菊榮

『あなたはいつどんな動機で社會主義になつたか。』かういふ種類の質問が一番私を弱らせる。性來宗教心のない私は、突然、神の啓示に出あつて、悔い改め、生れ變つたやうなおごそかな氣分で、敬虔な信者として洗禮をうけるといつた、崇高な感激やロマンテイシズムを經驗せずに、いつとは知らず、平凡な眞理として、理の當然として、社會主義をうけいれてゐたといふより外はない。懺悔告白、宣言、聲明を要するには、私の改宗は除りに平凡單調かつ漫性的のものだつた。

始めて啓示にあつて神の榮光に目の眩むやうな感激も、高い崖から谷底へ身ををどらせでもするやうな英雄的な決心も、私の生涯に經驗のないことだつた。

私の家庭は父母共に歐化主義全盛の時代にさういふ教育をうけた、當時の進歩主義者であり、家庭は極端に自由で、何らの干渉もうけなかつたから、家庭より遙かに保守的で時代後れな學校や社會一般に對しては、かなり強く批判的、反抗的になつてゐたし、丁度私が女學校を出た當時から問題になり出した自然主義運動などによつて思想的に準備される機會もあつたからであらうがつまりさういふデモクラシーの思想や氣分が土臺になつて、いつとは知らず社會主義的に考へたり感じたりする傾向が養はれてゐたのであらう。始めてその理論を知つても、全生涯に一轉機を劃するやうな突然の思想的變化や感動を經驗することなく、昨日の次に今日が來、今日の次に明日が來るといふほどにも、自然な、平々凡々な氣持でそれをうけいれたにすぎなかつた。社會主義も、社會主義者も、私にとつて、偶像でもなく、神秘でもあり得なかつた。ロマンテイシズムとミステイシズムには、私は遂に緣なき衆生である。

『あなたが肋膜を煩つたのはいつでしたか』とお醫者に聞かれて、『存じません』と答へて笑はれた私は、社會主義についても同じやうな質問に會つて、同じやうな答へをするほかはない。私の肋膜はかなり惡性のものでありながら、一時に突然非常に高い熱が出たりせず、急激な著しい病狀なしで、ぢりぢりと漫性的に進んだものと見えて、氣のついた時は、何人ものお醫者が匙をなげたものだつた。しかも私自身は、いつどうしてさうなつたかを今でも知らずに

ゐる。私の社會主義もどうやら助膜と同じ流儀であるらしい。

私はそんな風にいはゞ無感激に、平々凡々の氣持でも社會主義者になつたので、それによつてよい意味でも、惡い意味で自分の人間が變つたとは、感ぜられないので――つまり淨化されたとも、墮落したとも考へないので、人から特別扱ひにされることを殊に迷惑に思ふ。或人々は社會主義者を惡魔の仲間入りをした、墮落した、人間だと思ふ。だから徹頭徹尾、人間扱ひを拒絶する。又他の人々は、社會主義者といふものを、普通の人間の水準を拔け出た、特別に高級な、淨化された人間のやうに考へ、人間以上のことを期待する。そして何かの機會に、社會主義者が人間並みの過ちを犯した時――例へば慣例的な道德に背いた戀愛をしたとか、借金をしたとか、酒が好きだとか、きれいな着物を着たがるとか――、自分が勝手に描いてゐた幻影が破壞されたのを憤つて、その特定の個人に對する幻滅を、社會主義の理論そのものゝ缺陷と混同する。中途で戰線を脫走する手合には、得てこの種の戰術が使はれやすい。が、まじめに運動に近づく人で、殊に若い未經驗な、純眞な婦人の中に、社會主義に對する迫害の結果、特異な刺戟をうけて、社會主義と社會主義者を神秘化し、殊に後者を偶像化して、夢のような憧憬と宗教的な崇拜とを抱いて近づいてくる人々があるらしいので、私はその純眞な心持を尊重すると同時に、それがもつと現實的な基礎の上に立たないと、即ち幻影の上に立つものであれば、必ず幻影の破滅を來さずにはゐない危險を想はずにはゐられない。

吾々社會主義者は、政治意見においてこそ特に神秘的な、又は惡魔的な人種だと思はれてゐるほどに、現在行はれてゐる政治的意見と對立して居り、殊に社會の極めて少數をなしてゐるに過ぎないが、その政治的意見と、誤解と迫害に甘んずる極端な少數派であるといふこととを除けば、何一つ世間の、普通一般の人間と變つたことはないのである。是れは平凡な人間である。人間以下のものでもなければ、以上のものでもない。だから社會主義者に對して、人間以下の取扱ひをすることが間違つてゐるやうに、人間以上の期待をもつてすることもまちがつてゐる。社會主義は社會の進化と改造とに關する理論であつて、個人の淨化を約束する神秘的な宗派ではない。

勞働者農民の婦人は、目前の經濟的利害から日常鬪爭を通じて無産者運動に參加するので、初めから運動についてのその觀念が現實的であるから、さういふ間違ひは少いらしいが、智識分子は、理想主義的な立場からはいつてくるので、ともすれば、宗教運動に參加するやうな感激と幻影を抱き、避けがたい現實にぶつかつてその幻影を破られると、もう進む勇氣がなくなるらしい。この點について私は、純粹な若い婦人の感激そのものは結構なことであるが、社會主義と社會主義者を混同したり、社會主義運動に對するに、中世のファナテイックス宗教運動に對するやうな態度で近づいたりすることは用心してほしいと思ふ。さういふ主觀的態度は、社會主義運動の發展に何等の寄與するところもなくて、却つて妨害する結果に陷りやすいからである。社會主義者は神でもなければ惡魔でもない。仙人でもなければ行者でもない。さういふ特異な人物や、超人的な奇蹟を求める人は、社會主義よりも、大本教か天理教にゆかねばならない。

依田ちか子



『女人藝術』の有つ實踐的意義への一つの考察

武羽よみ子

一

女人虐待――それは人類歴史がその數世紀を彩どる陰慘なる告白の文字である。虐げられたものは自由を求めて立つ。「弱き者汝の名は……」の傳統が强制した宿命觀も、一度その時代的制約の柵を乘り越えるや忽ち、平等を叫び自由を喝望する聲咳を四隣に聞くにいたつた。人類解放の途は踏み躁られた屍の堆積の上に築かれ、女人解放の途は涙のつゞる歴史である。

女人藝術」からして又、涙多い歴史の一頁を飾るけなげな運命人の出生を背負はされて來た。それ故に「女人藝術」の突進する行路はまぎれない苦難のそれを覺悟せねばならぬ。「女人藝術」は單なる婦人獨自の言論機關としてだけでなく、更に私達はこの機關誌を圍繞する一團の活動的實在の實踐に於ける意義をも附加せねばならぬ。

幾つかの個人の意志感情、婦人の正當なる社會的地位への要望に對する個人の意慾――それが「女人藝術」に具體化され、組織された時からこの意志は實踐的となる。斯くして私達には單に一部論者の如くそれの消極的利用の途が在るばかりでなく、積極的に此の意識を意識せしめ、具體化せしめるの努力が要請されてくる。

且つ又、それは直ちに「女人藝術」の生くる唯一の途でもある。

二

藝術行動に現はれる人間生活の一面は社會的性質を顯著に帶びる。そして又、人間行動に於ける獨特なる一分野は藝術生活の占める所である。故に、此の局面に於ける行動はそれ自らの境地を持ちつつ依然として人間性一般に附隨する。解放されんとする意慾は普遍である。藝術部内に於ける解放運動の本質も亦この普遍性への一の寄與に外ならず、然も且つ藝術價値追求の主觀的希求の源泉も此處に合致する。嘗ての日、靑鞜一派の踏み出した藝術的要求充足の一歩も當時の一般的人間生活の時代的制肘の下にのみ發展し、その意義を有しつつ眞摯な藝術價値への精進を勤め得たのである。此の展望から歸結し得る所のものは直ちに今、「女人藝術」に關する考察

の一切の基本的原理たらねばならないのである。

翻つて、現在に於ける專制的權力の實體を觀るに、それは一面封建的屈從の形に於て强制する傳統的權力と同時に資本主義的支配との强力なる結合に於て見出され、從てそれに對する反抗運動は二樣の型態を帶つて行はれ、卽一は單なる婦人一般の男性との平等權、社會的自由を求める組織と、他はプロレタリアの世界觀の下に行動化せられた反資本主義的な婦人運動とである。所で肝要なのは、一應理論的に私達は如上の分類を爲し得るも實踐に於けるこの二つの運動は、恰もその對象物の陣營が密接不離の二重性の統一である如く、否ある故に、結局に於てその決定的意義を階級と階級との力の平等の裡に見出さざるを得ない、といふことである。だから、前者を後者から切り離しての解放の運動はそれがブルジョア的遊戲としての手淫的快樂に役立ちこそするが、現實に於ては毫も所期の目的の途には立たなくなる。この事は自明だ。日常幾多の實例が何よりの裏書である。平塚雷鳥を筆頭とする一群の左傾化、資本主義肯定の基礎の上にたつ婦人矯風會運動のたあいいなさ——事實は雄辯だ。面白半分の戯れ氣から自分の身を「パンネアストのマント」に包む事に腐れ切つた英雄根性を自慰する女は問題外だ。少くとも自己の心臓に、全女人の鼓動を感じ、自己の生命の禁足に全同性の生命の不自然を實感し得る女人が個々正確なる進路を外すなら、間もなく實踐がその誤謬を教示するだらう。示された途はたゞ一つ。

三

「女人藝術」の有つ背景は主としてインテリゲンチャ婦人層である。巨大なるプロレタリア婦人——それこそ世紀が許す唯一の歷史の原動力である。然しそれだからといつて、私達インテリゲンチャは打ち棄てをかるべきものでもなければ寧ろ、此の人類解放の闘爭史に占めるインテリゲンチャの役目も可成り重要と言ひ得よう。世界の隅石の下から捧げられる、自由なるべき人間性奪還の運動の前面に血まみれの身魂を捧げつゝある數多くのインテリゲンチャ出の闘士を見るであらう。イデオロギーの領野に於て最も廣大なる部分を受け持つ階層に與へられた任務は當然である。社會變革の幾多の段階の、最も初めに遂行さるべき意識變革の領域を擔當する榮譽こそインテリゲンチャに許された無上の歡喜でなければならぬ。

女學校といふブルジョアの人間工場から大量製産された商品レッテルに包まれた概念の殻は餘りにも虚僞に滿ちてゐる。傳統の力は恐ろしい。教化の力も侮り難い。積年の傳統とブル道學の温室に育まれ、巣立つ若きインテリゲンチャ婦人の前には、何と哀れにも祝福された運命の雙手をみる事よ——「女とはお嫁にゆくもの」「そして、凡ての女は男より劣つたもの」——正體の知れない矛盾に苦しみ喘ぎ乍ら、彼女らの無智と從順に隱れた陰險な意志とは餘りにも傷ましい悲鳴と成り終はせてゐるではないか——、或は言ふであらう「時代は婦人を驅て漸次平等の扉に手を掛けさせつつあり。職業婦人の進出はどう？」と。然り、喜ばしき事象ではある。私達も亦何の意圖によつてこの事實を否定しよう。だが、この傾向に出陣の歡呼を和する前に再び省みて思へよ。それは僅かに全婦人の幾分かに過ぎず、然もこれに伴ふ惡の一面卽モダンガールなる戯畫化された一幅を手にし、且つ之等少數先覺婦人にして果してその幾許が正しく自己の運命の血路を識り得たであらうかと觀ずるに於て、全く問題は新しく提出さるべきであり、

啓蒙の時代は將に迎へられねばならぬ。

斯く言つてくれば結論は大體明瞭だ。

四

「女人藝術」は今や大多數インテリゲンチヤ婦人の生活感情を「女人」の鮮明なる旗幟の下に正しき途に純化せねばならぬ。然も「女人獨自」なる概念は一の過程的な合言葉の意味に理解されてゐなくてはならず、これが男性への反抗の爲めの反抗に終始すべきではない。その爲には機關誌「女人藝術」を中心として不斷の女人解放の爭ひに勤め、一時的準備的に男性一般への反旗を翳し且つ一面、私達の目的地の唯一の伴侶たる階級プロレタリアの存在を告げ、以て無自覺な大群の女人へ自己の地位とその自由への方向を知らしめ、積極的に自ら實踐への巢立をイデオロギー的に準備してやらねばならぬ。組織化された機關の責務は大きい。不斷の女人解放の爲の爭ひとは何？　正しくそれは悉くの機會に文藝運動に於けるプロレタリア的闘爭を自らのうちに戰つてゆくことであり、ここより生れる闘爭記錄と氣高き藝術作品の內容を織り出し、更に巧みなる形式の美はひとへにこの事を意識することから生ずる事を覺るにある。然も亦、同時に意識水準の低い讀者に、そのインテリゲンチヤ特有の世紀末的苦惱の捲つて來る所を筆の上に曝け出し、これら多數の婦人を同一戰線に繰り出すよう、明確に意識付けることも注意さるべきである。

斯くして、少數先覺婦人の實踐に於ける役割の重要さは「女人藝術」をして、愈々重なりゆく任務の祝福をひしひしと感ぜしめるであらう。

—九、三—

新刊紹介

雜誌「火の鳥」

「火の鳥」といふ名を聞いたゞけで、若い女性の手によつてなされた雜誌であらうと直感される。

卷頭の竹島きみ子さんの清素な六行詩は好ましいものであつた。窪川いね子さんの九官鳥は小說家としての手腕がある人と思はせる。明るく詩的な小金井素子さんの水兵人形、眞實性があつて思はずひきつけられた栗原潔子さんの疲れた父などおもしろく讀んだ。五島美代子さんの自叙傳林政江さんの歌、井本しげ子さんの詩、沼眞子さんの飜譯、それ〲未來を期待して女性の力になる本誌に祝福を送りたい。（邦子）

松助藝談　舞臺八十年

邦枝完二氏著　大森書房の發行、定價貳圓八十錢

大森書房はさきに名人棋譜をだして、貧乏な文壇人にさへ財袋を空にさせやうとしたほど、時機に敏く好適な出版をする。ことに今度のこの「松助藝談舞臺八十年」に至つては、讀書家でなくても、秋の夜のつれ〲に、つい繙きたくなるであらう。又さういふ方面からでなくても、故鈴木春浦の著書とか、おなじく田村成義の劇談とか、遠くは白猿海老藏の手記とか、仲藏の日記とか共に劇道に珍重されて長く殘るべき素質をもつたものである。この一編を讀んで感じたことは、劇界のことばかりを言つてゐる中に、すさまじい世の激變を語つてゐることである。人情、風俗、それらの點からいつても大切な史料である。口繪の「蝙蝠安」の寫眞にいたつては、松助の藝がほうふつとして其處にあるほど鮮明だ、紙質は寧ろ上等すぎるほどで、其爲に挿繪の上りが非常によい。（コスズ）

その後の北平

笙千鳥

馮玉祥夫人は、八月十三日燕京大學に於て、『人道主義』與『國家主義』といふ講演をしました、燕京大學は、亞米利加系の學校で、男女共學であります。烈んに反帝國主義を叫んで、

『就知道他們一面爲人道主義努力。但一面却還有國家主義的色彩。弱小民族受强盛民族的壓迫和剝削。强盛民族收弱小民族血汗。』

帝國主義の日本及び英國は、人道主義を唱へながら、一面國家主義である、日本は、一個の島國で土地狹く人多きため、人道主義を唱へつゝ東三省及び西比利亞に生活を謀り、一面武力を以つて壓迫してある。

『想把中國人殺盡、獨自享東三省的利益、是成們至死不能承認的。』と難じ亦『日本也有反對帝國主義的人、我們也決不倒他們、將來彼此結婚、不但有沒國界我們是人道主義的母親、要竭力造就人道主義的人才。』

壓迫的侵略は、宥すことは出來ないが、人道主義の爲には、國境をも取除き、人道主義の人才を造るに力を竭すことは、われわれ婦人の勉めであると、說いて居ります。

孫文氏は十幾年前、反帝國主義革命を、學生に吹き込みました、當時の學生は、全中國の中堅となつて居るのであります、北平にては、市民全體に、三民主義を敎へるための市政府にて、每朝六時半より七時まで三民主義講演をして居ります、小學生には、三民主義讀本を讀ましてゐます、かくして孫文の遺志は中國人の頭に、浸み込まれつゝあります。國民の革命思想は、ますます眞劍味を帶びてゆくようであります、全中國統一は、ただ時の問題でありませう、この統一の一日も早からむことは、中國及び日本の爲でもありますから共に力を盡したいものです。

然るに、我外交の無誠意、今更喋々と論ずるまでもありませんが、山東の出兵、東三省の外交、そのほか小さく神經的に見るなれば、林權助氏來奉當時、奉天停車場に於ける示威的な閱兵式、孤立の張學良は、複雜な壓迫のため卒倒したともいひます。

他國の領土へ機關銃まで据へ、いざといへば、打ち放すといふ、緊張味を帶びた我が軍隊を、見たならば、中國人ならずとも、武力侵略と曲解せずには置きますまい。

然し、日本國民の輿論が、必しも强硬では無いといふことも、幾分諒解されたるためか、反日本は、反田中と變じつゝあります。

北平では、私娼はすでに禁止せられましたが、前門外にのみあつた、公娼は、今年一ぱいで廢止を實行することを佈告されました、日本より一足お先に、文明國のお仲間入りをしました、多年叫ばれる、日本の廢娼問題も、是非とも廢止を急ぎたいと思ひます。

その後、成立した婦人運動の團體は、北平婦女協會。婦女解放促進會。北平女界協進會。などであります、婦女協會は尤も有力なる團結で、成立早々多數の會員を有して居ります、婦女運動を促進し、打倒帝國主義、打倒封建思想を、宣言して居ります（九月十八日）



そこばくの言

堀江かど江

本誌九月號所載の私の論文の中に矛盾した點や不明な點があるといつて伊福部さんが指摘してゐられますが、人間が性慾本能を純化することの生活意識を持つて居り、動物はその生活意識を持つてゐないために、人間の生活様式には進歩があるけれど動物にはそれがないといふ點では、私は動物の生活と人間の生活を比較して『人間の社會はこの戀愛あるために進歩する』（伊福部さんが私の文章を要約した文章）といつてゐるので、後段の『性慾解放は人間を愚劣にしないため、人を盲目にしないために必要である』（同前）といつてゐる場合のそれは人間生活に於ける色んな戀愛行動に比較して、所謂戀愛行動が人間を愚劣にするといつてゐるので、私自身にはこの間の考察にすこしの矛盾も感じません。政治や科學や藝術や宗教に現はれる人間行動が、戀愛行動でないといふ常識的の觀方からそれを非難されるなら兎に角、本質的に觀た戀愛觀を非難される言葉としては出發點に於て間違つてゐられるし、また、言葉の前後から想像して論者の省略し、または暗示してゐるところを知らうとなさらないのは文章を讀む方法として既に間違つてゐます。

もとより、私には紀元何世紀頃までが戀愛は人間社會を進歩させるものであつたり、何世紀頃からは人間を愚劣にするものだといふ理論があるわけではありません。私の考へによれば、戀愛の仕方如何によつて、戀愛は人を愚劣にしたり、また聰明にしたりするものです。それは、てうど劇藥が必ずしも人を殺すものでも、また生かすものでもなくつて、その活殺はかかつて劇藥の使用法にあるのと同じわけです。而して、聰明とか愚劣とかいふ言葉は何かの比較から生ずる言葉であつて、猿に比べた凡人を、次に人間の中の天才に比べて批評の仕方があべこべになつたといふやうな人を私は見たことがありません。

有閑有産階級の方に一夫一婦の制度が守られてゐる度合が、猿の間や人間の中のプロレタリアに守られてゐる度合よりもすくないといつたのは、決して『皮肉としては兎も角』ではありません。事實です。それをあなたは『眞面目な論としては誰が通用させるでせう』

といつておいでになられるが、それはあなたが形式本位に見て、その內容について、考察してゐられないからで、表面だけが一夫一婦でも、蓄妾や待合狂ひをしたり、役者買ひをしたり、若い燕を拵へたりしてゐたのでは一夫一婦を守つてゐるものといへません。あなたはてうど林檎の皮だけを見て『これは林檎だ』といつてゐられるのですが、私は林檎の皮と實とが別々になつてゐない林檎を林檎だといふやうな表現方法で、人間の性生活に對する感想を述べてゐるのですから、實際に於て守られてゐない一夫一婦の生活を一夫一婦の生活といふことも出來なければ、强制的にでなくては人間に守らすことの出來ない性生活の樣式を、人間の最高の道德とする空文にも等しい約束に贊成するわけにも行きません。

一夫一婦が人間本來、いな、生物本來の姿でも要求でもなくて、それは周圍の事情によつて決定せられたものであることは疑ふことの出來ない事實であります。

元來、性慾本能が繁殖慾を司どる本能である以上、それは本質的にいつてより多くの異性を要求する本能であります。それが一匹または一人の異性と性的生活を限るやうになるのは（形式だけであつても）さうした方法で、繁殖慾を滿足させなければならないやうな周圍の事情になつたからで、猿が人間よりもかへつて一夫一婦の性生活を嚴守してゐるといふことは、決して猿が人間よりも高等な動物であることを意味しないで、自族の繁殖慾のために、雌がニンシン中には雄が代つて外敵の襲來に當つたり、食物を探して來たりする、その中に子供が生れる、それを養ふ、また子供が生れる、といつた繰返しをしてゐるために、いはゞ、周圍の事情のために、猿の間に一夫一婦が嚴守されるやうになつたので、このやうな動物的な生活に近いプロレタリアをブルジョアと比較して、より一夫一婦が守られてゐるのもそのためです。あなたはプロレタリアの妻帶者よりもブルジョアの妻帶者の方が、より蓄妾や待合狂ひをして居り、金のないものよりある者の方がより複數的に性的生活をしてゐるといふ事實をお考へになつたことがないのでせうか。このプロレタリアに第一號から十號までの妻を同時に所有してゐるといふものがあるでせうか。

お說をきくまでもなく、私有財產制度が資本主義時代（制度ではありません）以前からあつたものであり、資本主義の發達（存在ではありません）がより近代に屬することは近頃の文學少女ならたいてい知つてゐるでせう。しかし、私は『發達』に就ていつてゐるので、私有財產制度が發達を遂げたのは資本主義が發達を遂げたのと同時です。ブルジョアのまだ自覺しなかつた中世封建時代や古代の後半期に於ては、近代から現代に於けるやうに私有財產制度が法律によつて完全に守られてゐたのではありません。特權階級は武力によつて絕えずブルジョアの私有財產を脅してゐたものです。從つて、その發達は特權階級に對するブルジョアの勝利となり、個人主義思想の發達となつてから以後のことゝ見るより他ありません。また一夫一婦制度がよし形式的であつても、性生活の最高道德とせられるやうになつたのは、やはりごく最近のことで、まだ女性の自覺がなかつた封建時代に於ては、この國を例に引いてみれば、一夫多妻の生活が支配者の性生活の道德？だつたのです。妾や手かけを多く拵へるのは『男の力』として承認されてゐたもので、その風習は、いまでも封建時代的イデオロギーをもつてゐるこの國の政治家や、支那などに殘つてゐます。

基督教國に於ての一夫一婦は資本主義發達以前にすでに行はれてゐたとあなたはいはれますが、私は、まだその國に行つてみないので知りませんが、それもあなたの形式的な觀方ではありませんか。私有財産制度治下に於けるトルコに一夫一婦の行はれないのは何故かといふお問ひに對しても、事實に就て物をいふ私は、トルコに行つてみないので何ともお答へ申上げられません。

社會の狀態は一枚の成文の法律によつて一擧に變化するものではない、一人一分子より徐々に起り徐々に傳へて大きな力となすことによつて變化するのだから、私に私の理想を實踐せよ、殊に公民權とか私有財産制とはちがつて、あなた（私）の個人の意志で直ちに實踐出來るものだとあなたはいつてゐられますが、これこそメイ論と同時に暴論であります。さういふ風に論ぜらるのでしたら、私もあなたは實踐と理論を相異なるものとお思ひですかと開き直らないではゐられません。本質的な觀方によれば理論は實踐です。それは文藝が政治の一分野であり、歷史が延長せられた地理であるやうに、理論もまた實踐であります。よし、それを常識的に區別して考へるのであつても、私は私の理想を實踐するに至る過程として、現代の社會組織に對する……××運動を起すのが妥當だと思ひ、主力をその方に用ひてゐるので、それを非難したり忠告したりするのは、てうど食はうと思つて食物を買ひに行つてゐるのを見て、食物を買はずに食へといふに同じい暴論といふより他ありません。

あなたはまた『社會が不自然に發達した場合』といふことも考へられない、この社會を他にしてどこに自然の發達があるかといつてゐられますが、私のこの場合の『社會』といふ言葉は人間の社會であり、それは人間の生活によつて成立つてゐることを意味して居るので、その生活が不自然に發達するといふのは、人間本然の生活から遠ざかつた『社會』といふ程の意味であつて、哲學的考察をすれば、不自然なる發達も不自然それ自體にとつては自然の發達でありますから、世に不自然なる（不必然）發達はないことになりますが、私の常識的にいつてゐる點を哲學的な觀方で揚足をとり、哲學的にいつてゐるところを常識的な觀方で揚足をとられたのではメイワクです。

『生活意識、生活無意識』の言葉の意味がおわかりにならないのも、言葉を形式的にお使ひになり言葉のあやや味ひに注意なさらないからで、『生活無意識』といふのは、『生活意識』と對蹠的に立つもの――本能といふ程の意味ですが、それよりも、もすこし潜在意識に近い生活なのでさういふ言葉使ひをしたのです。

最後に、あなたは本誌九月號の拙文がフロイドの精神分析學から出發してゐるやうに御想像ですが、拙文に參考にしたものは、長谷川如是閑氏の『現代の道徳』です。

これですべてをお答へしたことになります。あなたは、あなた（私）のやうなメイ論家の說を批判したり反駁しようなどとは思はぬといつてゐられるけれど、何かゞお氣になるらしく四五枚も批評したり反駁してゐられますので、私もあなたにではなく讀者のことが氣になるままにお答へしました。

×　×　×

×　・　×

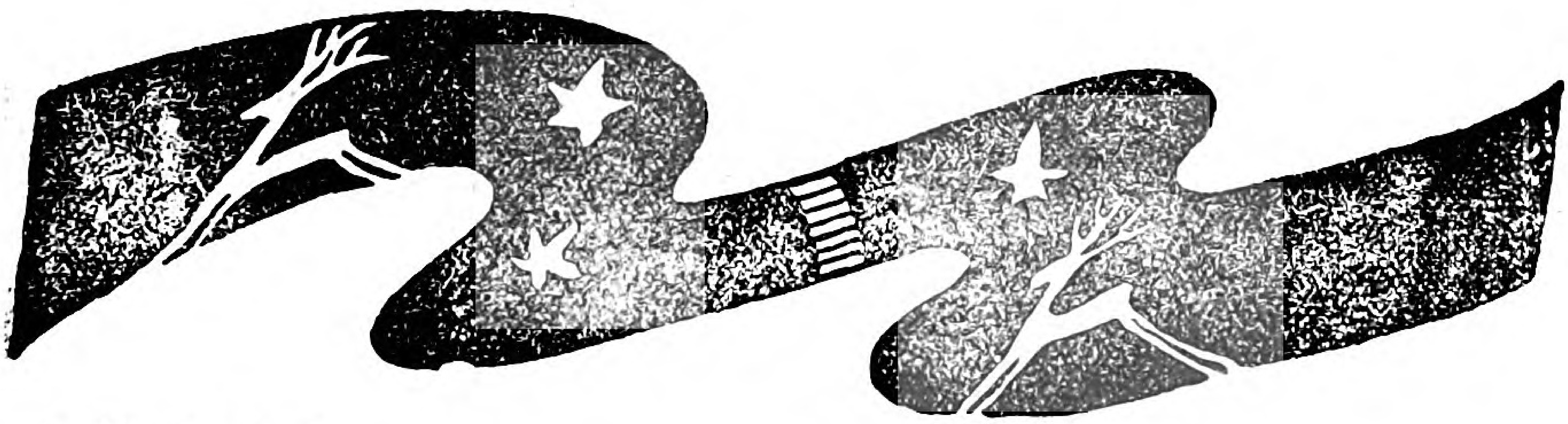
今朝の新聞

松本正枝

『右傾左傾の浮浪人を
うんととりしまつてほしい
私等無産者の爲に！』
かく云へる有名なブルジョア女流作家。
失ふべき何物をもたぬ
無産者私等に
浮浪人が何しようぞ。

かつては砂利にガスに
電車乘入に板舟に
さてもめまぐるしき收入の道
検事局の目が光らうと
市會淨化運動に
空うそぶく市議
寢耳に水の家宅搜索
いやはての風いとも早し
あかつきは近ければ。

一九二八・八・十七・



大原アヤ子

ひとりの秋

小野春子

おとなしいひとといはれたわたくしを氣むづかしい顏にさせたか貧乏

きらはれることも一つの經驗だと作家志望のわたしの言ひ草

これからだ何もかもまだこれからだ面白いぞッと絶叫する心

こんなとき言へば皮肉も役立つとおもつたばかりに利いた憎まれ口

必ず父の指環は受け出さうと二年越し今日も質屋へ利子を入れに行く

きりぎりす今夜もわたしはひとりで聞いてるよ月は曇らうと啼いてお呉れよ

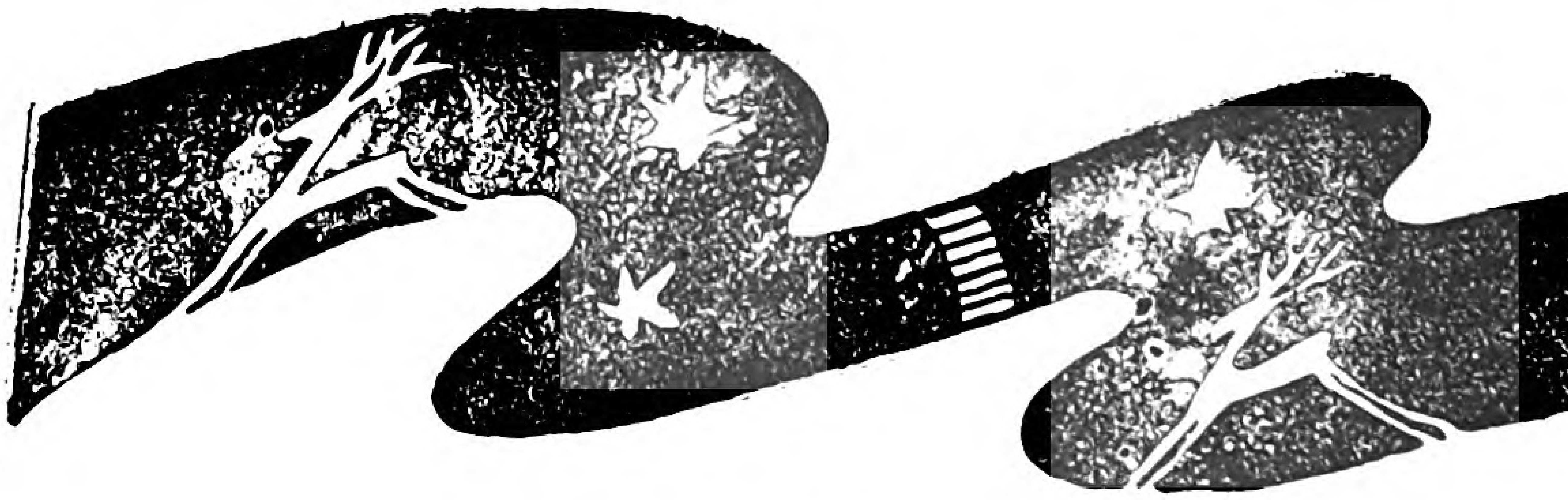
旅にゐる方がそれでも平和である旅で作つた悔いもあるけれど

おまへに何が出來るものかよとさも言ふやうないくつかの顏をみたさびしいこの胸

なぜ生きるのかなぜ死なゝいのかどつちみちまつくらなやみだこゝろもとない

さう急に捨てられぬのはいのちだと襟をあはせてつぶやくこゝろ

氣がかりなたゞ氣がかりな死ぬことが何の心の用意もないのに



とりかへしのつかないいまとなつてさがすわたしの青春はどこへ消えたろ！
あきのかぜにまかせてみだれるはぎのはなのくるほしいこひをもゆめにはゑがいた
ひとすじの蔓がどこまでものびてゆき杉の梢に咲いたあさがほ
さま〲な月日を經て來たやさしさがちよつとしたことにも心を傷める
氣のないつくり笑顔はどこかしらさびしかろとおもふさびしさ
幸福がそつぽをむいてすれちがつてゆく——なぜいつもわたしはひとりなんだろ
彼女のあの滿足さうな幸福があたしの身にはなぜにないのだろ
運命だとあつさり隅へ片づけてしまへないで惑ふ心よわが身はいとしい
お嫁にはゆくまいと考へたのが遠い昔の七つの頃か可憐なめざめだ
美しいごきりやうでとわらつた××樓の酌婦の顔は忘れたけれど
それつぱかりの理由で何で死なれよう神には疾うに懺悔した身だ
運命になぶられてると氣がついて心寒さを感じる秋よ
どうでもとほらぬ初一念ならなんで惜しかろさつさとどこかへふつ飛んでおしまひな
何もかも投げ出してしまつたがよささうなさうした氣輕さをほしいこのごろ
ほんにさうだよお手は引かれてひかれるまゝに世渡りしようかほんにさうだよ
これ以上放つておけない氣になつてみ捨てた自分を探すわたしだ
このこゝろへいまはおとづれるかげもなく忘却の生活になれたさみしく
理性もこゝまで來れば要なしだむかしは役にも立つたのだけど

實生活の一頁

人間でせうか？

小野塚ぎん

絲はきれ役わしやつなぎ役
そばの部長さんにらみ役、
工場は地獄よ主任は鬼よ
廻る運轉火の車

仕事の辛い時や苦しい時、私達はいつもさうした唄を歌ひます。誰がつくつたのか、誰から聞いたのか知らないが、まるで自分で作つたものでゞもあるやうに、自然に出て來るのです。

×

夏の日など百度近くの水氣のこもつた温度、冬でも六七十度を下らぬ中に、粉雪のやうな綿ちぎれをかぶつて、十時間以上立ちつゞけて働く紡績女工は、本當に人間であるといへるでせうか。近頃工場の設備が改善されたとか、待遇がよくなつたとか、言はれますが、私達働く者から見れば、とんとよくなつたとは思はれないのです。私達はまづ工場に入る時に見習ひとして日給五十錢をもらひます。見習ひを二三週間すると、受取りになり、その日の出來榮えで七八十錢から九十錢位になるのですが、罰だとか、積たてだとか、健康保險法とかにとられるので、手に入るのは、二十圓位のものです。仕事初めは、朝の七時から午後の五時まで、深夜業の時には、晩の七時から朝の五時まで、七時交替ですが、その間に休み時間が、お辨當食べる時に三十分、十時と三時に十五分宛ある事になつてるのですが、油をさしたり、機械の手入れをして、運轉の時にすぐ仕事に取りかゝれるやうにしますので、事實休みの時はないといつてよいのです。御飯だつて殆ど立つて食べる程です。賞與は一ヶ年一回の缺勤なく働いて、三日分か五日分貰ふのですから、賞與にお目にかゝつた女工つて稀れですね。

×

私の働いてゐる所は、市内に近い小工場で、女工は僅に百人内外であり、それも近所からの募集で間に合ふのか、寄宿舍はございません。私は結婚せぬ前、隅田川の或大工場に勤めてゐて、寄宿舍生活をした事がありますので、あの時の食物のまづく汚なかつた事や、手紙を主任に見られるので、思ふやうに書けなかつた事、外出が不自由で、親の病氣にもろくに見舞ひに行けなかつた事、殊に仲のいゝお友達が時々男の主任に無理を言はれ、泣いたり怒つたりして拒んでました

が、とう〳〵お腹が大きくなり、工場を猫のやうに追つ拂はれた悲しい記憶を持つてます。その時を顧みて通勤は樂なやうですが、僅かの賃銀でお辨當を持ち、電車で通つては、一體なんの爲に働いてゐるかわからなくなります。通勤工ばかりのこの工場でも、工場主や、工場長、事務員の無理に泣かされてゐる女工がよくあります。云ふ事をきかないと、よく首だと威かされるので、弱くて、貧乏な女工はずるずると、いふ事を聞くやうになるのです。工場主は、女工を澤山手玉にする男程、腕があるとか働き者だとか言つて御機嫌がいゝ樣ですもの。

×

工場には、時たま工場監督官とかいふ人が廻つて來ます。その前の日の工場は、まるでごつた返しです。いつもは糞が踏み板の上に散つてようが、つかへるやうに溜つてゐやうが、おかまひなしの便所はとにかく掃除される、冬なら窓に紙を張る、湯呑み所にはたわしがかけられ、水がたつぷり入れられる、手を洗ふ金盥、痰壺には消毒液が注がれます。私達は、監督官つて何をするのかしらないが、こんなに工場がきれいになるなら、毎日來るといゝのにねつて陰で舌を出しますが、さうした事に時間をとられただけ、後の仕事が倍になります。

病人は、夏も冬も絶えません。夏冬ともに多いのは、胃腸病、風邪で、また二ケ月位働いてゐて、身體がだるく、熱が出て止してしまふ人も澤山あります。一度訪ねて樣子を聞きたいと思つても、時間や電車賃がなかつたりするので、漸々行けば、もう死んでゐたり、引つ越してゐて行く先きのわからない人のある時は、本當に悲しくなります。

×

一番辛いのは深夜業です。晝間寢るので、なんでもないとよく工場で言はれますが、晝間はよく熟眠が出來ず、どうしても家庭の仕事をしなければならないので、夜働いてゐても十二時頃になるとうと〳〵眠くなります。三時頃になると、立ちながら眠る事は少くありません。深夜業を三日つゞけると、ぐんと身體の弱る事は自分でもわかります。眠くてもさあ寢るとなると眠れず、身體がだるくて食慾がないのですもの。それに辛いのは月經とつはりの時、そんな時には、つく〴〵貧乏は嫌になつて、いつそ死んでしまひたい位ですね。夜業の時に怪我をする方がよくあります。又流產する方も澤山あるやうですわ。

×

私は今まで、お勤めはほんの小遣ひとりだ、すきな時にはいつでも工場を止す事が出來ると思つたのが、夫がストライキで首になり、私が生活費を稼がなければならないので、女だつて貧乏人は、決して遊び仕事でないといふ事がわかりました。まだお友達は、勞働者の組合は恐い所だと思つてますが、私は此頃少しづゝ働かせる人と働く人の區別や利害はわかつて來たやうです。人事のやうですが……。

スタートを切る朝の歡び

市街自動車々掌・秋山いそ

幸か不幸か、雨の日をフエルト草履のまゝ自動車でどこへでも運ばれる結構な寄生蟲的御身分に生れあはさなかつた私は生活の第一戰線に立つて、皆樣を運ぶ乘合自動車の女車掌といふ職業を見つけ出してから、もう六七年にもなる。恐しく寒い冬の日、それから女性のみの知る身體の變調の時などは、辛いとも思ふけれど、他の職業に比して吞

氣ではあり、收入も働けば働くだけ多いし、まづよい仕事と思つてゐる。何よりも愉快なのは朝。今日も元氣よく勤めに出かける人々をステツプにあふれるほど滿載して、何の事故もなくスーツと走り出す時の氣持よさ。ほんとに私達のみの味ひ得る愉快さでせう。朝は忙しい。皆樣急いでいらつしやるが、一人でも多く乘れるだけ押しつめて差上げようとすれば、交通巡査さんのお眼が光る。停留所にすぐ近い所でも、飛乘りのお客樣を見つけられたら大變。そんな時のお客はよほど急いでゐられるのだらうから、こちらでも便宜をはかつて上げ度いのだけれど――。

お客といへば可笑しいのは、シートを讓る時である。美しい若い婦人が立つてゐる時、人々は爭つて席を作らうとするが、中婆さんなんかの時は、見ぬふりをして二人分の席をなゝめに占めてゐるやうな人が多いから滑稽である。震災以來、私共の職業は人々から可成り理解され感謝されるやうになつたけれど、まだまだ意地の惡い、侮辱的な態度に出て困らせる人も少くない。どうしても忙しい私達の感情はせまり勝ちなので、あまりわづらはしい事を仰言るお客にはつひ、つんとしたくもなるのである。勝手な言分かも知れないが、お客樣方は今少し私達の忙しさを理解して頂きたいと思ふ。

市營の自動車で先日爭議があつたが、私達はあの勇敢な態度を非常に美ましく思つた。それに、運轉手さん方が同じく働くものゝ立場から結束して女性の味方をしゐられたのは美しい事だと思つた。私達の會社では現業委員會といふ乘務員の組合が出來てゐて、一月に一度づゝ集り、會社側に對する希望など話し合ふ事になつてゐるが、運轉手さんはやはりどうしても自分達の都合のよい樣に動きやすいし、女車掌同志の團結力などもあまり固くないので、よく〳〵不平がつもつても市營の人々のやうな態度には出られないと思ふ。尤も私設會社だから市營側のやうな官僚的なところがなく、割合融通の利く便宜はある。プロレタリアトの女性としての立場から、會社側へ希望したい事は、現在の運轉手と女車掌の待遇の差別を撤廢してほしい事、公休日の外に月經時の休養日を與へてほしい事、從つて日給制度を月給にして頂ければ有難いと思ふ。

紺サージの制服に切符切る人々の上にも、戀愛の花はさく。三角戀愛の起る時もある。然し内部の者同志結婚して、ほんとうに幸福がつゞいて行く人々の少いやうに見うけられるのはどういふわけであらう。

時に、方々のカフエーなどまはり歩いてこゝへ入つて來る志願者もあるが、そんな人々はすぐ辛棒しかねて又外へ行つてしまふ。だから現在仕事にたづさはつてゐる者は、若い人々ばかりである割に、大變眞面目に、不平は不平としてまづ氣持よく働いてゐるのである。

ジヤズの中から

ユニオン・ダンスホール　**米田貞子**

ダンス・ホール、ダンサー、人々はさうした名稱にある概念的な忌はしい想像を抱いてゐられるらしい。然し、私の今踊つてゐるホールは、非常に眞面目な規律正しい一面のある事を知つて頂きたいと思ふ。勿論商賣だから白粉も濃くすれば口紅も紅くしよう、そして見知らぬ異性と相抱いてジヤズの音とともに華やかに踊り狂ふ。だからと言つて、それ以上に醜い事を想像するのは、想像する方が醜い。社交

ダンスは、ほんとによき社交機關であると思ふ。一度踊つた人とは、ほんとに親しみやすい。私達は大阪で可成り盛にやつてゐて、藝者さん達までずゐぶん上手に踊れるほど、大阪のダンス熱は盛だつた。それに何といつてもあちらは實業家が多いので、ホールでお金をお遣ひになる事の激しさは一寸東京では見られない程だつた。東京では、まだ開場して間もないせいもあらうが、五十枚の踊り札を一晩に使はれるとレコードだなどいばつていらつしやるが、大阪では一晩に四十圓位平氣で撒きちらして行かれる。ボーイさん達までその恩惠に浴したものである。

東京では學生さんや有識階級の方々が最も多いので、そんな馬鹿げた御散財をする方はないやうだが、私達ダンサーとしての收入は、相當多い。疲れる事はずゐぶん疲れる。お客様方は踊る事が愉快で踊つていらつしやるのだが、私達は午後三時から夜十時まで、(その中三時から六時までは稽古時間だが)まるで機械人形のやうになつてしまふ。然しその報酬は十五日毎に意外な金額となつて現はれるから樂しみである。どんなに踊らない人でも半月に三十五圓は下らない。そして夕食はホールで供される。レコード一枚まはる間踊る札が、二十錢で、その中から九錢はダンサーのものである。何十枚も札を買つて、それだけ踊らずにダンサーへ下さるお客様が多いからずゐぶん救はれる。やたらに着る物のぜいたくさへしなければ、やり方一つで後々の不時の用意に貯へも出來る職業である。脂粉の香とジヤズの音の中に異性相手の生活してゐても、やはり一人の婦人勞働者に違ひない私たち。いかゞはしい行ひをしてゐる人もあらうけれど、ほんとに眞面目に踊つて働いてゐるダンサーたちまで、世間から疑惑と誤解の眼を向けて下さる事のないやうに願つてやまない。

時々の喜悲劇

至誠病院女醫　下山松枝

私の今やつてゐる當院の仕事は產婦人科と小兒科が主で、花柳病などは注射ぐらゐより他は殆んど致しません。今は女子醫專に花柳病科といふのもありますが、大低は助手として働くので、女醫が主になつて花柳病を扱ふといふやうなことは先づないといつていゝでせう。醫學の方面について大低のことは女醫で及ばないことはありませんが、やはり適當なのは產婦人科、小兒科、內科、耳鼻、眼科などではないかと思ひます。

不妊、苦痛を訴へて來る婦人科の患者は、大體既婚者が主で、その大部分は花柳病に原因してゐますが、若い婦人の數の如何に多いことか！　當院は社會事業としてやつてゐますので施療の患者も入院してゐますが、極貧困者に花柳病は比較的少なく、中流の生活者に多いのは當然なことでせうか。

人生の喜悲劇！　實際涙の出るやうなあはれな可笑しさ、こつけいさも、からいふことをしてゐますと時々出逢ひますが、そんな一つに河船への往診があります。こゝは場所の關係やら何やらで河船へは始終參りますが、河岸から船まで細いぺか〳〵の板を渡して、その上を渡るのが大變、下駄でもはいて行つた時ははだしになつても未だ危な

いので、船の男の人が手でも曳いてくれやうものなら、岸に働いてゐる人夫やら、他の船の人たちやらが手を叩いてはやし立てるといふ大騒ぎをします。それでも、板一枚ですむ時はまだいゝ方、辿りついた船は別ので、それからまた船べり傳ひに二つも三つもとんでやうやく患者のゐる船へ着きます。病人は大低、お産と胃腸ですが、船の病人位氣の毒なものはないと思ひます。苫と云つても四尺四方がせい〳〵頭のつかえる程の中に色々な物が置いてあるので、産婦が座敷を斜に寢て、お産婆さんでも來てゐる時には、文字通り座る場所がありません。それでも産婦は人が覗くのがいやだから入口の窓を閉めてくれと云つて利かず、夏など暑さと息苦しさに窒息するかと思ふ程ひどいものです。そんな中でお湯も澤山は沸かしてくれず、消毒も充分に出來ないで、こんなことで産褥熱でも起こさねばよいがと、はら〳〵して歸つて來ますが、よくしたもので何事もなく快くなつてしまふのには不思議な氣がします。

勿論醫者の仕事など云ふものは好きでなくては出來ないものですが、手術も治療も、やつたことのない人が思ふ程感情的に嫌なものではありません。何處か異常はなからうか、何はどう變つて疾患の原因をなしたのだらうかと云ふ風に、すべてのものを醫者の立場から見、醫者の立場から考へるやうにいつの間にか習慣づけられて、それ以外の事は幾分人情的な氣持が動くぐらゐなものです、極たまには、わざわざこゝへ來なくとも、と思へるやうないやらしい男の患者など來ることもありますが、そういふのはすぐ他へ行くやうにはからつてしまひますし、夜おそく知らない家から迎へに來た人に女性としての警戒心を起させられたり、不安がつたりすることはしば〳〵ありますが、私は醫者の仕事は一面宗敎的だとさへ考へてゐる者ですから――。

宗敎的といへばほんとにさうです。

今年の三月頃でした。淺草の方で地下工事か何かに働いてゐた朝鮮の若者が、揮發油が爆發して頭と胸の上部を殘したきり、全身大火傷をして入院して來ました。睡眠劑もモルヒネの注射も效果がなく、夜晝痛い〳〵と大聲で苦痛を訴へてゐて、とても正視出來ない程慘い容態でした。附添ひには伊藤さんといふこれまでも模範的な親切な看護婦が看護してゐましたが、二晩も三晩も殆んど一睡もしません。少し他の人と代つたらと云つても、病人が氣の毒だからとずつと續けてゐました。夜中など少し落付いた時には、如何にもなつかし氣に故郷の話を聞かせたり、快くなつたらお禮に京都見物に連れて行くといつてゐた相です。ラムネが飲みたいから、ポケットの財布からお金を出して買つて來てくれといふので、さぐつて見ると財布はあつたが中には一錢も入つてゐないので自分のお金で買つて來て飲ませたりして涙ぐましい程親身になつてゐましたが或る朝こんな話をしてゐました。

「僕が朝鮮人だからといつて、伊藤さんは嫌やがらないでせうね」と病人が云つたので、伊藤さんが「そんなことはありませんわ、日本のお姫樣だつて朝鮮の王樣のところへお嫁にいらしたんですもの」と答へたら、可愛相な程喜んで一緒に泣いてしまつたのださうです。お姫樣や王樣ではまるでお伽噺ですけれども、その涙の如何に尊いものであるか――。たとへ日本のお姫樣と、朝鮮の王樣との結婚が伊藤さんの思つてゐるやうな美しいお伽噺でなくとも、こゝには何の關係もない、何といゝお話ではありませんか。……その若者は間もなく死んでしまひましたが、病人にはどんなに正しくても理屈ばかりでは何にもならない……のです。

珍らしがられる仕事

佃速記事務所　大野優子

S様!!　あなたはW縣、私はO町時代お互にJ雜誌上で名前を知り合つたまゝ、數年を過して來た今、偶然に、本當にはからずも意外な處でお目にかゝる事が出來た悦びに笑んだその時――私は、あなたの御自信ある御發言（無論他にも澤山の方々が集つて會談されましたが）を、一句も聞き洩すまいとして、鉛筆を走らす速記者の立場にゐやうとは……何と云ふ奇しき引合せでございませう。

あなたも、「珍らしいお仕事」と仰しやいましたね。速記術を習得した婦人はかなりあるのですけれど、その割に職業的婦人速記者として働いてゐる人は少いやうです。ですから、女の身で速記をすると云ふことは、出掛けて行く先々で隨分珍らしがられます。「ア、速記者つてあなたですか――」「へえ女なのか……」と言ひたさうな、妙な表情をしながらジロツと體中を見廻はされると、かけ出し速記者、いゝ加減熱くなつてしまふ上に、ギツシリと詰つた聽衆の全視線を浴びながら、廣い講堂の眞正面に案内される晴れがましさに馴れるまでには、餘程の場馴れを經驗しなければ、唯もうカツと上せるばかりで、肝心の手先が竦んでしまひます。中には又「女の方で偉いですね。全く速記は婦人に適した仕事ですよ、ま精々お勵みなさい。」なんてひどく恐縮させられたり、こんな女に速記が出來るだらうかと、疑はれながらのお話を、あなたも御覽になつたあのボーフラが踊つてるやうな、妙な字で書き初めると、やつと安心したやうに喋べる調子を早め、速記文字を見い〳〵「變な字ですね、それが讀めるんですか？」などと脫線してしまふ滑稽さに、失笑させられる事が、個人訪問の速記の時なんかよくあります。

何の仕事にも伴ふ苦しさ……私達にとつてのそれは、迚も速口で少しも纒りのない長談議をする人、發音のはつきりしない人、或は周圍の雜音の爲に話が聽取れない場合、等、等、限りない程ありますが、要するに速記を取らせ馴れてゐる人と、さうでない人とで、速記の易さ難さもしみ〴〵と味はひます。御自分の演說振りはすつかり棚に上げてしまつて、唯速記者の無能さをのみ咎められる無理解さに泣かされる一方には、所謂辯舌爽かに、よく意味の徹底したお話の書取り易さ手の動きの輕さに、其人のお胸にすがつて感謝したい程の嬉しさを感じも致します。

兎に角、技は拙なく、頭腦も鈍い自分ではあるが、精一ぱい根限り疲れるまでも努力し續けて、常に講演者の蔭に隱れて文字に直した講演振りを引立たすべく、地味ではあるが尊い仕事に生きやうとする、緊張しきつた生活の歡びに浸る時、もつと〳〵婦人速記者として、拓いて行きたい向上の道への精進を、一しほ怠るまいと念ずるのであります。さうして、珍らしがられる域から脫して、どんどん速記常用者達の間に活動し得るやう、婦人の仕事として認められることを希つてやみません。

私達の前に閉ざされた扉――兩院議場の壇上に、國事を議する獅子

吼振りを筆に寫し、各縣に開かれる縣會議事に依つて、それ〴〵のローカルカラーを忍ぶべく……軈ては開かれるであらうことをも期待しながら……。

終りに、速記者として立ち得るまでの過程を一寸お話添へて置きませう。それは――二年間斯道の先生に就て速記術を習得する……斯う申しますと、大變簡易のやうに聞こえますが、速記文字のイロハから習ひ始めて、千に近い略符號（長い言葉を纏めて一字で現はす）の全部を覺え盡し、扨、演說者の音に伴れてスラ〳〵と指先が動くやうになるまでの苦心と云ふものは、到底拙い筆に現はし得ない、並々ならぬ努力を拂はねばなりません。その間の、緻密なそして單調な勉强に堪兼て、中絕してしまふ生徒の多さを考へる時、一寸とした職業へのあこがれから、この仕事を志願する人に對して、しみ〴〵忠告したい氣持になります。そして又、速記して來たものを、巧く反文しなければならないその手際の難さを、どうお察し頂きませうかしら？　自分に全く無知識な問題にブツカツた時など、反文の苦しさに泣かされながら、假令淺くとも廣い方面を識つて置く事の必要を痛感して、不斷の勉强を續け〳〵、どうやらこの業に携はり得る人となつて、それぞれ速記の需用に應じて出かけて行くやうになるのですが、その速記料金――需用者側から受くべきと大體を申上げて擱筆致しませう。

普通の講話講演類は、一時間以內十圓、專門的に屬する講演はやはり一時間で十五圓、特に速記者二人を要するものや、反文を急ぐものになりますと、一時間速記して二十圓から三十圓と云ふ標準であります。

働いたお金の尊さ

○○保險會社外交員　片上あさ子

私が保險勸誘員の仕事をはじめましたのは、夫が亡くなつて今後六人の子供をどうして立派に育てゝ行かうかと考へました時に、夫の殘して行つた多少のお金や、印稅を儉約すればどうやら暮らせないことはありませんでしたが、大勢の子供のことと、長い年月を考へると唯財產を食べ減らして、安閑としてゐられないと思ひました。何か仕事をと思ふにつけても、小さい時から末子で可愛がられ、甘くばかり育つて來た私は、何といふ特別な職能も仕込まれてはゐず、夫が亡くなる一年程前、人にすゝめられて入つておいた保險のお金が思ひがけなく大變役に立ちましたので、そんな緣から外交員の仕事に働くことになりました。したがつて、私の收入が一家の生計の唯一の目當といふわけではなし、片上の知人の方々が御力添へ下さいますので月々定額をとるのにも左程苦しい思ひもせずにすみますので、社でも私のやうなのはまだ〳〵好い方で、實際こゝに働いてゐる人には、いはゆる腕利きで萬に近い契約をとり得る人も中にはありますが、半分以上は定額にも滿たず、この暑い日中をたゞ當もなく馳けづりまわつてゐる人が多いやうです。

定額は一ヶ月契約金四千圓で、月給は最初四十圓ですが、それに定額だけとれゝば步合がついて、かれこれ八十圓にはなります。若しも定額以上とれた場合それだけ步合が多くなるので、成績がよければ月給

も六十圓までは上ります。會社の方では一々成績表を掲げて奬勵してゐますから、成績の上らないのを見つともながつて皆一生懸命になりますが、知らない家へ行つておしやべりをして保險へ入らせやうとするには中々骨が折れます。

大體は先づ一家の主人が入るのが一番多く、生計の中心がなくなつた時の助けにといふらしく、軍人とか官吏とかいふ人が大多數を占めてゐます。保險の實際や必要について、多くの人々は割合に知悉してゐないので、私たちが勸めに行つても、その說明からしなくてはなりません。その他は實例など擧げて話すのが當り前で、また何といつても效果のある方法ですが、私は大低自分の場合をお話しすることにしてゐます。

家には十六の長男から、十三になる女の子、まだ幼いのまで六人の子供がゐますが、夫が亡くなつてから子供達の氣持の持ちやうまでが急に一變して、長男はすでに父親の代理の積りらしく、弟達を敎へたり、一生懸命にやらなければならないなどいふ言葉をしば／＼口にしますし、長女は子守女と一緒になつて、臺所の手傳ひもすれば、妹達の面倒も見て、この暑中休暇の間は、私達がしておきますから、お母さんは早く御仕事に行つていらつしやい、といふ風で、自然子守女までが親身に働いてくれますし、家中が共同的に緊張してゐますので、初めのうち、子供達を置いて働きに出ることを心配もし、可愛相にも考へましたが、さいはひに好い結果を齎らしたやうで、それは何より嬉しいことに思つてゐます。子供があり、家庭のある婦人が働きに出るのに、最も懸念するのは子供に對する影響や、家庭の空氣のルーズになることですが、それさへ具合よく行けば私は、私のやうな立場にある婦人が外で働くことは決していけないことだとは思ひません。最も保險外交員にしても、また私のやうに子供を置いて働くことにしても、誰にでもすゝめられることではなく、むしろ自分だから出來たのでもあり、やれもするのだとは思つてゐますが……外に出て働くやうになつてから、色々な人を訪問したり、他家の空氣を吸つたりすることで、非常に世間がひろくなつて、以前、夫に對して外へ出る者の氣持について思ひやりの足りなかつたことなど思ひやられることもありますが、それ丈に、今後子供達の成長を割合に廣い氣持で見守つてやれるかと思ひます。

夫が生きてゐます間、人の眠る時もおち／＼眠らず苦勞して書いた原稿ですが、百圓二百圓とお金が入つても、身にしみて有がたいとも思ひませんでしたが、自分に働くやうになつて、僅か八十圓のお金ですけれど、家のあの足しにもなる、この役にも立つと思ふと、大變有がたく貴いもののやうに思へるのも、おかしな話です。



ヒステリー

佐々木梅子

つとめてもつとめても
いくらでもつゞいてくる貧乏
なんべんでも繰返してぐちをこぼす
亭主ー親ー兄弟ー世間を
果ては幼きものたちまで
にくしみーのろひーほえたてる
そしてぐちい糸まきに不平の數數の色を
くづ糸でも結んでまく如くにまきつける
糸にのばしては巻きつける、
終に手がくたびれると
せめてくやしかつたら屑糸如
純金の糸にでもなつてみろと
外へ放りなげる。



女房の日曜日

一晩ねた間に
子供は健康をしつかりにぎつて
元氣よく起き上がつた朝の喜び
この喜ばしい朝を子供の父に
つげただけではまだ澤山あまつてる
喜びを澤山かかへて外に出る心をおさへ
部屋をめぐりめぐる
やつと心を落ちつけて
井戸端に出て見ると
たれの忘れたものか
名も知らぬ美しい花があつた
きつと私に美少年でもが
こつそりとさゝげたのではと
柄になくうぬぼれたい朝
ともかく、喜ばしい朝です。



大原アヤ子

濁り酒

——放浪記——

林芙美子

十月×日

焼栗の聲がなつかしい頃になつた。

廓を流して行く焼栗のにぶい聲を聞いてゐると、ほろほろと淋しくなつて暗い部屋の中に、私はしよんぼりじつと窓を見てゐた。

私は小さい時から、冬になりかけると、よく歯が痛んだ。まだ母親に甘へてゐる時は、畳に轉々泣き叫び、ピタピタの梅干を顔一杯塗つて貰つては、しやつくりをして泣いてゐた私だつた。だが、やうやく人生も半ば近くに達し、旅の空の、かうした侘しいカフエーの二階に、歯を病んで寝てゐると、ぢき故郷の野や山や海や、別れた人達の顔を思出す。

水つぽい瞳を向けてお話をするのゝ様は、歪んだ窓外の凛々としたお月様ばかり……。

「まだ痛む……。」

そつと上つて來たお君さんの大きいひさし髪が、月の光りで、黒黒と私の上におほひかぶさると、今朝から何も食べない私の鼻穴に、プンと海苔の香をたゞよはせて、お君さんは枕元にそつと壽司皿を置いた。そして默つて、私のみひらいた目を見てゐた。

優しい心づかひだ……わけもなく、涙がにじんで、薄い蒲團の下からそつと財布を出すと、君ちやんは、

「馬鹿ね！」

厚紙でも叩くやうなかるい痛さで、お君さんは、ボンと私の手を打つと、蒲團の裾をジタジタとおさへてそつと又、裏梯子を降りて行つた。

あゝなつかしい世界だ。

十月×日

風が吹く。

夜明近く水色の細い蛇が、スイスイと地を這つてゐる夢を見た。それにとき色の腰紐が結ばれてゐて、妙に起るとから、胸さわぎのするやうないゝ事が、素的に樂しい事があるやうな氣がする。

朝の掃除がすんで、じつと鏡を見てゐると、蒼くむくんだ顔は、生活に疲れ荒さんで、私はあゝと長い溜息をついて、壁の中にでもはいつてしまひたかつた。

今朝も泥のやうな味噌汁と、殘り飯かと思ふと、支那そばでも食べたいなあと思つた。

私は何も塗らない、ぼんやりとした顔を見てゐると、急に焦々として、脣に紅々と、べにを引いてみた。

あの人はどうしてゐるかしら……AもBもCも、切れ掛つた鎖をそつと摑まうとしたが、お前達はやつぱり風景の中の並樹だよ……神經衰弱になつたのか、何枚も皿を持つ事が恐ろしくなつた。

のれん越しにすがすがしい朝の鹽を見てゐると、女學生の群にけとばされて、さつと散つては山がずるずるとひくくなつて行く。

私が此家に來て二週間、もらひはかなりある。朋輩が二人。

お初ちやんと言ふ女は、名のやうに初々しくて、銀杏返しのよく似合ふほんとに可愛いこだつた。

「私は四谷で生れたのだけど、十二の時、よその叔父さんに連れられて、滿洲にさらはれて行つたのよ。私藝者屋におき賣られたから、その叔父さんの顔もおき忘れつちまつたけど……私そこの桃千代と云ふ娘と、よく磨いつるつるした廊下をすべりつこしたわ、まるで鏡みたいだつた。

内地から芝居が來ると、毛布をかぶつて、長靴をはいて見にいつたわ、土が凍つてしまふと、下駄で歩けるのよ、だけどお風呂から上ると、髮の毛がピンとして、をかしいわよ。

私六年ばかりゐたけど、滿洲の新聞社の人に連れて歸つてもらつたのよ。」

客の飲み食ひして行つた後の、テーブルにこぼれた酒で字を書きながら、可愛らしいお初ちやんは、重たい口で、こんな事を云つた。

も一人私より一日早くはいつたお君さんは脊の高い母性的な、氣立のいゝ女だつた。

廓の出口にある此店は、案外しつとり落ついてゐて、私は二人の女達ともぢき仲よくなれた。

こんな處に働いてゐる女達は、始めどんな意地惡るくコチコチに要心して、仲よくなつてくれなくつても、一度何かのはづみでか、眞心を見せると、他愛もなく、すぐまゐつてしまつて、十年の知己のやうに、まるで姉妹以上になつてしまふ。

客が途絶へると、私達はよくかたつむりのやうにまるくなつた。

十一月×日

どんよりとした空。

君ちやんとさしむかひで、ぢつとしてゐると、むかあしかいだ事のある、何か黄ろつぽい花の匂ひがする。

夕方、電車通りの風呂から歸つて來ると、いつも呑んだくれの大學生の水野さんが、初ちやんに酒をつがして呑んでゐた。

「あんたはとうと裸を見られたわよ。」

お初ちやんがニタニタ笑ひながら、髪窓に櫛を入れてゐる私の顔を鏡越しに見て、こう言つた。

「あんたが風呂に行くとすぐ水野さんが來て、あんたの事聞いたから、風呂つて云つたの……」

呑んだくれの大學生は、風のやうに細い手を振りながら、頭をトントン叩いてゐた。

「嘘だよ！」

「アラ！　今言つたじやないの……水野さんてば、電車通りへいそいで行つたから、どうしたのかと、思つてたら、歸つて來て、水野さん、女湯をあけたんですつて、そしたら番臺でこつちは女湯ですよツ…て言つたつてさ、そしたら、あゝ病院とまちがへましたつてぢつとしてたら、丁度あんたが、裸になつた處だつて、水野さんそれやあ大喜びなの……。」

「へん！　隨分助平な話ね。」

私はやけに頬紅をはくと、大學生は薄いコンニャクのやうな手を合はせて、

「怒つた？　かんにんしてれ！」

裸が見たけりやあ、お天陽様の下に眞裸で轉つて見せるよツ！とよつぽど、吐鳴つてやりたかつた。

一晩中氣分が重つくるしくつて、私はうで卵を七ッ八ッパッチンパッチンテーブルへぶつゝけてわつた。

十一月×日

秋刀魚を焼く匂ひは季節の呼び聲だ。

夕方になると、廓の中は今日も秋刀魚の臭ひ、お女郎は毎日秋刀魚じやあ、體中うろこが浮いてくるだらう……。

夜霧が白い白い、電信柱の細つこい姿が針のやうに影を引いて、のれんの外にたつて、ゴウゴウ走つて行く電車を見てゐると、なぜかうらやましくなつて鼻の中がジンと熱くなる。

蓄音器のこはれたゼンマイは昨日もかつぽれ今日もかつぽれだ。

生きる事が實際退屈になつた。

こんな處で働いてゐると、荒さんで荒さんで、私は萬引でもしたくなる。女馬賊にでもなりたくなる。

インバイにでもなりたくなる。

若い姉さんなぜ泣くの
薄情男が戀ひしいの……

誰も彼も、誰も彼れも、ワッハ！　ワッハ！　あゝ地球よパンパンと頁二つになれッ、私を嘲笑つてゐる顔が幾つもうようよしてる。

「キングオブキングを十杯飲んでごらん、拾圓のかけだ！」

どつかの呑氣坊主が、脈にキンキラ頭を光らせて、いれずみのやうな拾圓札を、ピラリッとテーブルに吸ひつかせた。

「何でもない事だ！」

私はあさましい姿を白々と電氣の下に消して、そのウイスキーが十杯けろりと呑み干した。

キンキラ坊主は呆然と私を見てゐたが、負けをしみくさい笑ひを浮べて、おうやうに消へてしまつた。

喜んだのはカフェーの主人ばかり、へえへえ、一杯一圓のキングオブを十杯もあの娘が呑んでくれたんですからね……ペッペッペッペッだ。ツバを吐いてやりたいね。

瞳が炎へる。

誰も彼も憎い奴ばかりだ。

あゝ私に貞操のない女でござんす。一ツ裸踊りでもしてお目にかけませうか、お上品なお方達、へえ、てんでに眉をひそめて、星よ月よ花よか！

私は野そだち、誰にも世話にならないで生きて行かうと思へば、オイオイ泣いてはゐられない。男から食はしてもらはうと思へば、私はその何十倍か働かねばならない。

眞實同志よと叫ぶ友達でさへ嘲笑ふ。

歌をきけば梅川よ
しばし情を捨てよかし
いづこも戀にたはむれて
それ忠兵衛の夢がたり

詩をうたつて、いゝ氣持で、私はかざり窓を開けて夜霧をいつぱい吸つた。あんな安つぽい安ウイスキー十杯で醉ふなんて……ああ　あの夜空を見上げて御覽、絢爛がかゝつたな、虹がかゝつた。

君ちやんが、大きい目をして、それでいゝのか、それで胸が痛まないのか、貴女の心をいためはせぬかと、私をグイグイ摑んでゐる。

やさしや年もうら若く
まだ初戀のまぢりなく
手に手をとりて行く人よ
なにを隠るるその姿

かつて好きだつた歌ほれぼれ涙におぼれて、私の體と心は遠い遠い地の果にずッ……とあとしざりしだした。

そろそろ時計のねじがゆるみ出すと、れいの月はおぼろに白魚の靜色屋のこまちやくれた子供が、

「ねえ旦那！　おぼしめしで……ねえ旦那おぼしめしで……。」

もうそんな影のうすい不具なんか出してしまひなさい！

何だかそんな可憐な子供達のさゝくれたお白粉の濃い顔を見てゐると、たまらない程、私も誰かにすがりつきたくなつた。

十一月×日

　奥で三度三度御飯を食べると、きげんが悪いし、と云つて客にお
ごらせる事は大きらひだ。
　二時がカンバンだつて云つても、遊廓がへりの客がたてこむと、夜明までも知らん顔をして主人はのれんを引つこめやうともしない。
　コンクリートのゆかが、妙にビンビンして動脈がみんな凍つてしまひそうに肌が粟立つてくる。
　酢つぱい酒の匂ひがムンムンして焦々する。
「豚になつてしまふわ……。」
　初ちやんは袖をビールでビタビタにしたのをしぼりながら、呆然とつゝ立つてゐた。
「ビール！」
　もう四時も過ぎて、ほんとになつかしく、遠くの方で鶏の鳴く聲がする。
　コケコツコオ！　ゴトゴト新宿驛の汽車の汽笛が鳴ると、一番最後に、私の番で、銀流しみたいな男がはいつて來た。
「ビールだ！」
　仕方なしに、私はビールを拔くと、コツプに並々とついだ。豚にトゲトゲと天井ばかりみてゐた男は、その一杯のビールをグイと呑み干すと、いかにも忿々しく、
「何だ！　ゐびすか、氣に喰はねえ。」
　捨ぜりふを殘すと、いかにもあつさりと、霧の濃い舗道へ出てしまつた。啞然とした私は、急にムカムカとすると、のこりのビールびんをさげて、その男の後を追つた。
　銀行の横を曲らうとしたその男の黒い影へ私は思ひ切りビールびんをハツシと投げつけた。
「ビールが呑みたきや、ほら呑ましてやるよツ。」
　けたゝましい音をたてゝ、ビールびんは、思ひ切りよく、こなごなにこはれて、しぶきが飛んだ。
「何を！」
「馬鹿ツ！」
「俺はテロリストだよ。」
「へえ、そんなテロリストがあるの……案外つまんないテロリストだね。」
　心配して走つて來たお君ちやんや、二三人の自動車の運轉手達が來ると、面白いテロリストはボアンと路地の中へ消えてしまつた。
　こんな商賣なんて止めやうかなア……。
　そいでも、北海道から來たお父さんの手紙には、御難つゞきで、今は歸る旅費もないから、送つてくれと云ふ長い手紙を讀んだ、寒さにはぢきへこたれるお父さん、どんなにしても四五十圓は送つてあげやう。
　も少し働いたら、私も北海道へ渡つて、お父さん達といつそ行商してまわつてみやうか……。
　のりかゝつた船だよ。
　ボツボツ湯氣のたつおでん屋の屋臺に首を突込んで、箸につみれを突きさした初ちやんが店の灯を消して一生懸命茶飯をたべてゐた
　私も昂奮した後のふるへを沈めながら、エプロンを若ちやんにはづしてもらふと、おでんを肴に、寂しなの濁り酒を樂しんだ。

―一九二八・一二―



篠田ちか子

野ぶり山ぶり

横瀬多喜

「農民」が、廢刊になつたとの事。失くなつて惜しいものゝ一つではなかつたかと思ふ。

いづれは東京の人でもあらう、あれが蕎麥の花ですと指さゝれて、饂飩の花はと、たづねた話を聞いてゐる。此話一つを以ても、如何に都會人が田舍のあらゆる物を識らずに過して居るかといふ事の半面はうかゞひ知れると思ふ。

私達にとつて、同じ都會の人の手にも、あゝした雜誌が試みられたといふ事は、どんなに嬉しいことか知れない。

「爺よ、あの松の樹な五圓とは高かろな。」

「高いことあるものかね。あれを庭師に手入れさせて、庭へ植込んで見さつせ。……高いの安いのつて、べら棒な話しでねいかね。五圓位、一晩夜なべにさらさらつて書けば、なんでもあんめいがな。」

「そんな風に言つたつて、しやうがない。」

「しやうないつたつて。そんならだいいち負けさしたつて、一圓か五十錢でしよ。それつぽうしの金、恥かしくつて負けてくろつて言へつかね。」

「ぢやあ――。五圓と決めようか?。」

「ぢやあだつて、いつたいお前さまは、いつでも了見のしちくどい方ですよ。」

爺はぼんぼん私をおこつてゐた。

庭の手入れもすつかり行屆いてゐる位だから、座敷の上にも何一つ散らかつてゐず、子持たずのことゝて、好きなお茶受けの貯へも利いて、長火鉢を間に睦ましく語り合つてるといつた隣家は、矢張

り私達同様兄さんの留守を守つてゐる人達である。

私達もこれでふたり切りだと、随分話しつゞけてきたらうと思ふ。だが然し、子供達がなかつたらせいせいするだらうとは、遂に一度も考へたことはない。

話しはちがふが、良人の知合に久しく寝た切りでゐる人が有る。長男で、弟があるからだらう、此の程、あとに殘される妻子の上を案じて、今いうちにと相當な金の分配方を、老父母に申込んだといふ。その話を他から聞かされた良人は、それは細君が病人にさう言はせたのではなからうかと言つてゐた。どんなものか、想像の限りではないが、容易に考へられる事柄ではある。

良人はまた言つた。死ぬ者も辛い殘される人も辛い、だが然しお前ばどう考へるかと。その質問に答へることはさて措いて、誰しもおなじ子供の上を考へると、思ひは盡きさうもない。殊に私は、はじめから、良人の病弱を考へてゐたから、子供なぞ然かも三人までも生れてくるとに、夢だも思はずにゐた。淸らかな娘心から、眞實、佛にでも仕へる氣持ちできたのであつた。今にして、こんなことを言へば人は笑ふであらうけれど、その當時は毛程の僞りなしに、さう信じ切つてゐたのであつたから、將來どころか、何よりも先づ現在の事實にあわてさせられる。

だが然し、かうして父と呼ばれ母と呼ばれなかつたからつて、私達の幸福は、今の倍になつてゐはしなかつた。朝夕わづらはされ苦勞させられる事など、それはなんでもない事だと、素直になだらかに今は人生をみつめてゐる。そして私達はたゞ、親子五人の身體と身體とを、寄せ合ふだけにしか過ぎない財産だ。兄の庇護の許に一切の何も彼もを安んじてゐる私達だ。知人のやうに主張する權利の何物も有たない。空手空拳、氣持からしてさつぱりとしたものだ。

正當な努力さへもてば、人は靜かに生きらるるものと思ふ。

糸子が父さんのくすり取りに行つて來てくれるといふ。そして、母さん一週間分のお小遣を今日は渡してくれる日ですよと言ふ。なるほどゝ私は小さな銀貨を二つ娘の手の平に載せてやつた。糸子はその一つを、紅い毛糸のきんちやくへ入れて、持つてくらしかつた。やがて、往復二十五町ばかり使して來てから、裏座敷で女中に話してゐるのを聞くと。

「なんだか、姉や變なんだよ。あたしね、五錢だけ遣つてきたんだが、あとないんだよ。お剩とつたやうなとらないやうな、どうしたんだかわからなくなつちやつた。」

その口ぶりは、一週間のお小遣が一日で半分に減つて仕舞つた事など、五錢十錢有らうが無からうがのすゞしい調子で、見れば朝顏の寫生になかばならず氣をとられてゐる。

「糸子。」

父さんに呼ばれて這入つて來た。

「用簞笥から大きな封筒とつてお呉れ。」

はいと受けこんだはよかつたが、押入れをあけながら傍の、三升も水のはひる大きな花瓶を倒して仕舞つてゐた。おかしな音がすると私が覗く時分は、疊三枚に渉つて花瓶の水は大方盡きてゐた。

「なんの事だよ」鋭い聲に初めてそれと氣付いたやうに、糸子は片

手を用箪笥に突つ込んだまゝ、うつそりと私を振り返へつた。泌泌世話が焼けてお小遣のことまで叱らうとしたら、傍から父さんがまあまあ憤るなよ憤るなよと、留男に出た。

紙さへ見れば無暗に繪を書く。七三オールバックの首へは、總模様の振袖を着せて、むな高に帶をしめさせる。斷髪のへは洋裝を描く。それもいゝが自分はどうかすると、お腰をうら返しにしめたり、湯上りをひつくりかへしに着込んで濟して食卓に座つてゐる。さんじやくといへば、限つてほどけかけてゐるか兩端が長短かになつてゐる。

父さんは憤るなと言ふけれど、女の子でありながらこんなうかつでよいものかと思ふ。息子のおつとりは亡くなつたおぢいさん似のやう、かまはぬところは父さん似のやう。

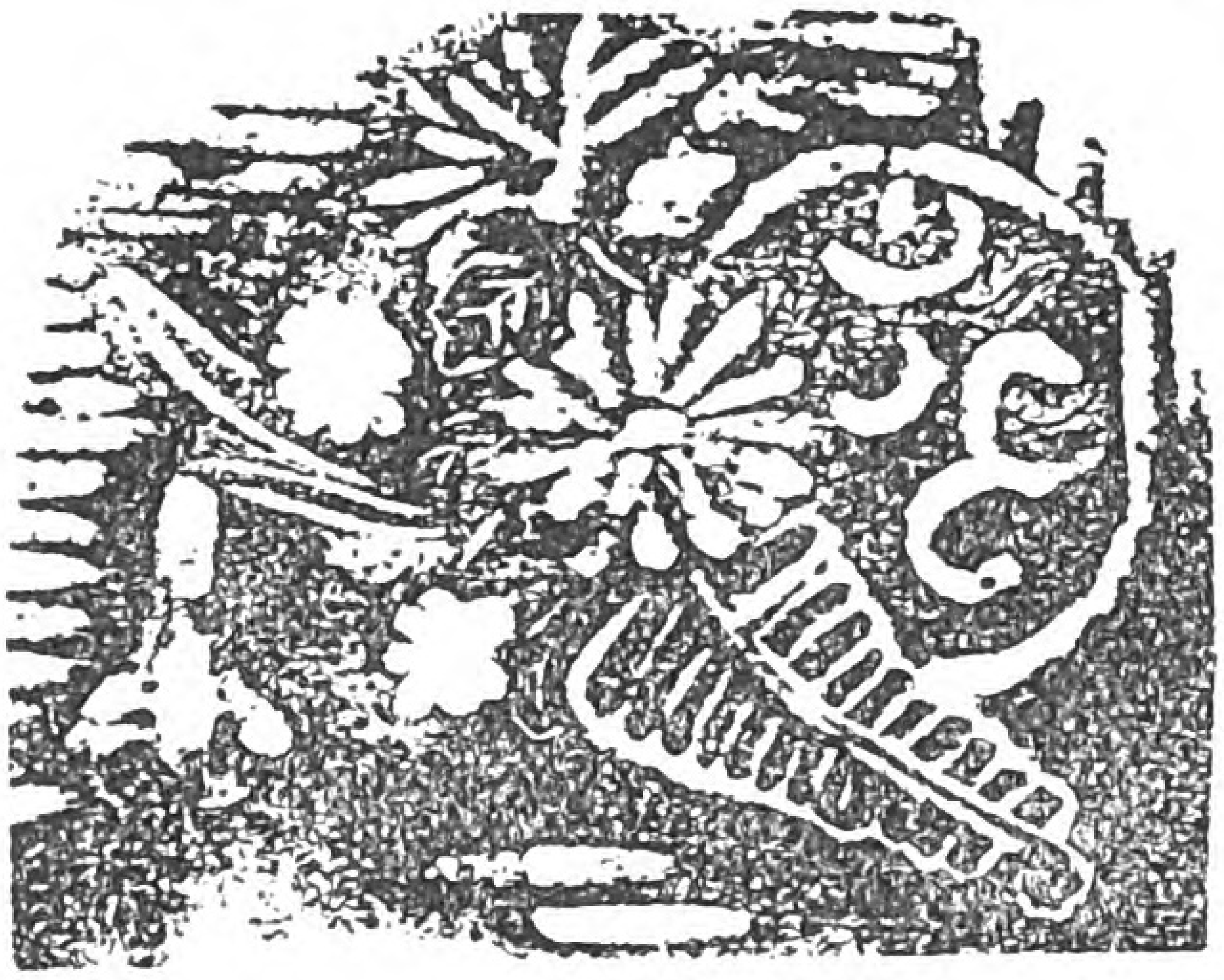
敷島はあんまりかるい、大和朝日はちよつと臭い、葉卷は不知、バットだけが私の友。

書齋とまでは夢にも及ばない。せめて机の一つ位は欲しいと思ふ。それさへどうやら六ケしいほどに暮して見ると、膝の上が書齋でもあり机でもあるとあきらめる。自分ながらいゝあきらめと考へてゐる。

本の話が出、「死線を越えて」の話しが出た。讀みつ切りの本にもなぜかポツンと一ケ所忘られぬ記憶を持つものだと話すと、まつたくですねとお客もいつてゐた。「死線を越えて」にしてもある。あの本では主人公が久々で故郷の家に歸つて行つたところに私の記憶は殘されてゐる。作者は、行詰つた家の狀態をはつきり見せる爲の對象としてお釜の底からふやけた御飯粒を抓んでゐる妹さんを、うら寂しくも見遣る氣持を描寫してゐる。その事を言ふと傍の夫は、お前達にとつて痛いところだらうからなと笑つてゐた。まあそんなことでせうよと私が濟すのに、お客は吹き出してゐた。さういへば母が亡くなつて以來何年となく、私も多事に暮してゐて勝手許の事は煮物位で、あとは女中任かせに過してゐるけれど家の婢はお釜の底の幾粒かなどに頓着しないやうだ。遂に一度も抓むのを見懸けぬ。これは決して仕込のいゝお行儀よしからではあるまい。

己が身にかゝることなら、どんな日常のさまつな事にも人は懸命になれるものだ。「死線を越えて」にしても、あれが婢であつたなら必ずあゝ描く場面は生れなかつたらうと、私は考へて見ることもある。

×　×　×　×　×　×



大原アヤ子

匂ひ

=嗜好帳の二三ペエヂ=

尾崎翠

これは匂ひで、林檎そのものではありません。匂ひは林檎が舌を縛るほど鼻を縛りません。だから私の舌の上の林檎より、鼻孔のあたりを散歩してゐる林檎の方が好きです、

ゲエテ閣下。

お靴の紐を結ばせていただきます。メフイストの健康のために。フアウスト博士の靈魂巡禮は、私の國日本の意味づけの好きな學者方に、生涯を擧げて研究しなければならない豐富な材料を提供しますが、しかし。地上より天上へ、おきまりの到達點で出發點です。過去の寶玉で未來の寶玉です。寶玉は函にしまつておいても變色しません。博士のためになら、私は途上でお逢ひした閣下に鄭重な會釋をして通りすぎませう。私に閣下のお靴の紐を結ばせるのは彼奴です、メフイスト。昨夜散歩してゐましたら、橋の袂で酸つぱい風に鼻を襲はれました。

「ほ、御散策で」誰にでも愛想よく、誰にでも無愛想な奴め。「まあせいぜい好い御散策をなさるんですな、わたくしの尻尾でも、捕まへるやうな。失禮」

彼奴はありもしない帽子の縁に手をかけて持ちもしない會釋をし肩を曲げて行つてしまひました。氣がつくと私は茫然と橋の袂に立つて、彼奴の足跡の香氣に嗅ぎ入つてゐました。いま半歩で川に落つこちるところでした。

チエホフ小父さん。

私は小父さんの髭がまだ影を背負はなかつた頃の微笑が好きです
額の縦皺の中にちやんと苦悶と理想を疊み込んでゐるトルストイ伯爵から

「何ごとだや、會釋もなく人生に哄笑をばら撒いて。おやによつて地上の人類が……」とお叱りを受けさうなあの微笑が。

粗製のビイル樽が熊の皮を着込んで、火鉢で心臓をふくらましてゐます。

愛情が部屋の壁と喪服と二重に身を包んで亡夫の寫眞に直接の誓ひを捧げてゐます。

何と似合ひのお二人でせう。そこで粗製のビイル樽と愛情の決闘です。そしてピストルの次が接吻です。そしてピストルと接吻は日本紙一枚の親しさです。長距離の好きな伯爵が額の皺をよけい深めさうな稲妻の變化です。何と素晴らしい微笑でせう。ピストルと接吻の稲妻のあひだに、粗製のビイル樽氏と愛情夫人の姿がこんなにはつきり見えるとは。小父さんは人間を稲妻のポケットの中にそつと入れてお置きになりました。報告好きな伯爵様のやうに、

「わしは此處に置いたぞ、この人間を」と言はないで、あなたは甚寐してゐる坊やの枕もとにビスケットを置いてやるお母さんです。

寢ぼけた坊やはビスケットを跨いで行つてしまひさうです。またはこのビスケットが動物園ビスケットで、犬や熊や白鳥の形をしてゐるので笑ひだしさうです。小父さんの微笑と角度の違つた笑ひを。

いつたいこの國の坊やたちは、伯爵様其他の催眠術にかけられて以來伯爵様の額の皺をそつくり自分の額にも掘りつけなければならないと考へてゐます。地球といふものは永久に額の皺だと考へてゐないとも限りません。しかし寢ぼけた坊やは寢ぼけた坊やです。小父さんの笑ひは小父さんの笑ひです。

ホオゼ！

絹ズロオス！レエスつき。

親愛なるシュテルンハイムさん。私の窓下の斜面のやうになだらかな芳香です、表現派の秩序衣を纏はないシュテルンハイムさん。

女の瓣にして女のホオゼや絹ズロオスの芳香に醉ふ。だから、（とにきび氏が申します）變態性の雅名が丁度なんだ。

しかし舞臺の上に蹴るホオゼ！しかも夫君の月給で月々をちんまりと暮してゐる可愛い細君のホオゼ。お汁粉とチヨコレートドの好きな奥さんに柳眉を顰められても、年中變態性の上着を着せる女の眉を探し廻つてゐるにきび氏に

「それ見ろ、いよいよあいつの第一人稱は『僕』なんだぜ」と會心の笑を洩らされても、私はあなたのホオゼに敬禮いたします。

何しろ私はどろどろなお粥の國に生れ合はしたものですから。そして（多分此處らが變態なのか）頭の隅つこにでも、せめて變形くらゐな詩を欲しいものですから。

シュニッツレル親爺さん。（何てアナトオルさんに濟まない呼び方

でせう
お鼻の上ではアナトオルさんの氣だるい手つきの玩具の取つかえつこ。
お部屋の一隅には妙な形の鳥籠、中味は綠の鸚鵡。
そしてお耳にはヰインのワルツ。
しかし、親爺さん、あなたそのものは。
「まあ、あ」
日本の女アナトオルが、アナトオルさんの都風な玩具やつれのした肩つきに見惚れて、私の胸に熱い吐息を一つぶち込みました。眼をうつとりとさせて。
「こんな、こんなパラダイスが」――おついでがありましたらアナトオルさんに傳へておいて下さい。
私の貧血症の心臓が彼女の吐息に打たれて痛あく（日本の女アナトオルはこんな不經濟な言葉を使ひますので、ちよつと眞似てみました）なつた時です、私があなた御自身をお部屋の中に見ましたのは。親爺さんは、アナトオルと鸚鵡とヰインのワルツの中に身動きされました。
どうしたことか、あなたはくしやみを一つ。お鼻の上の愛嬌なアナトオルさんが轉げ落ちてしまつたものです。女アナトオルにちよつと見せたうございました。しかしそのひまのない中にあなたの頰の縱皺（トルストイ伯のとすこし違つたのをあなたも持つていらつしやいますので）がだんだん深くなつて行つたと思つたら、あなたは急に表情の方向轉換でけだるい顏になり、椅子から立ち上つて、「ううん」と伸びをなさいました。私があなたの內かくしから落ちた得體の知れない包みを拾つたのはその時です。
幾重にも包んでありましたが、床に落ちた時小さい音はしました。
メス一挺。
針一本。
三分の一だけ中味の這入つた胡椒の罎。
中味はそれだけでした。私は包みをはがすのに永い間かかつてゐました。
「お商賣道具を、まあ」と私は呟きました。「何て不注意なお醫者様だらう。」
けれど、何處かで見たことのあるやうな中味なのです。私は考へました。さうだ、海のお向ふのバアナ、あのやかましやの爺さんが年中額にぶらさげてゐたんだつけ。ただ罎のあき場を塡める三分の二の胡椒粉がないだけです。
それにしても、何故この包みが意氣なアナトオルさんのお父さんの內かくしに。――私がきよとんとしてあなたの方を見た時、親爺さん、あなたはいつの間にかまた書卓に向つてペンを取つていらつしやいました。あなたの後向きの肩が、
「さあ、とんと覺えがないがな」と言つたのか、言にはなかつたのか私は妙な氣がして頭を一つ振りました。ふつとしたら、籠の鸚鵡が喋舌つたのかと思ひます。場處育ちだけに、どんな空氣にでも備へる鼻を持ち、だから洒落も、表現派も、音樂も、お隣の革命も、ちやんと心得てゐる鸚鵡ですから。それで御子息には濟まないと思ひながら私はあなたの呼び方を決めてしまひました。

穂芒

長谷川かな女

○

秋祭りの提灯さげし渡舟かな

蟲籠を殘暑の枝に吊りはなす

あらけなく殘暑の蜩の女達

風芒に路の幾條あらはれし

穗芒に月上りたるかゞやかし

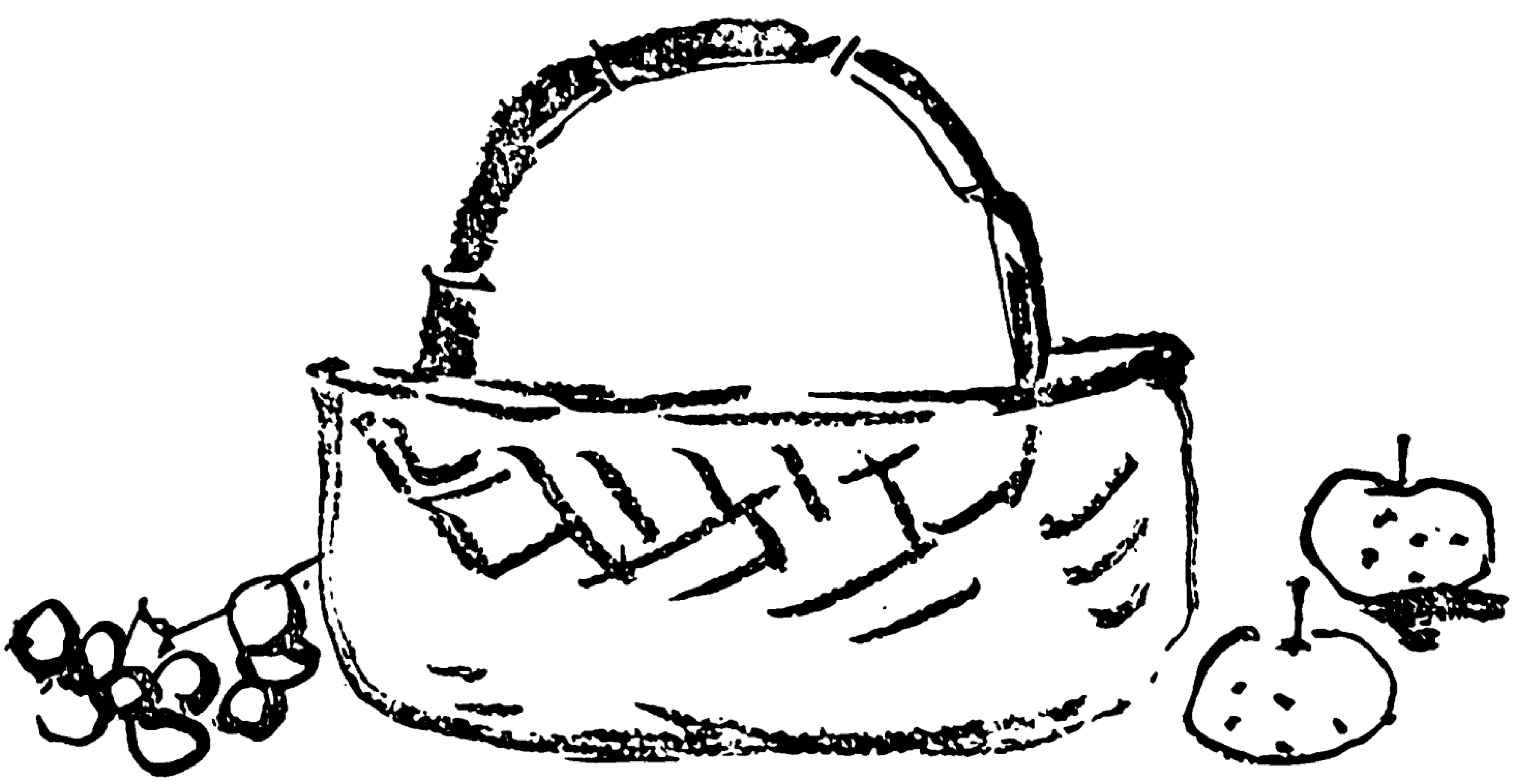
淺草に鬼灯うゑて住む久し

匂はしき葉脈なるよ若煙草

秋曉の御燈明みつめ人戀ひし

蜩や又ぬらしたる干簞笥

椋鳥に女ばかりや訪はれもす





俄仕立『巨』『超』のファン

『朝日新聞社主催國際水泳大會』

長谷川春子 文畫

日本人が出る國際競技といふものは何時でも惜しい所で、――でその惜しい所が中々飛び越えられぬ最後の線らしくて、其處の急所で決まつて負かされものと相場を決めて居た所、ツルタがオリンピツクで國旗を揚げ、異人に君が代を奏させたので新聞仕込に加ふるに女人藝術八月號の水泳番付で大體の强弱を覺え込みさてこゝに俄愛好家が一人增えた。

そこで感染の仕立早々のことゝて主催新聞社の宣傳に忽ち夢中になり、「巨人アルネボルグ」「超人ワイズミユラー」「至寶ツルタ」等等等、――秋の日燒は中々おちないのも承知で、夕陽さす多摩の河原のプールの席へ腰を並べた。

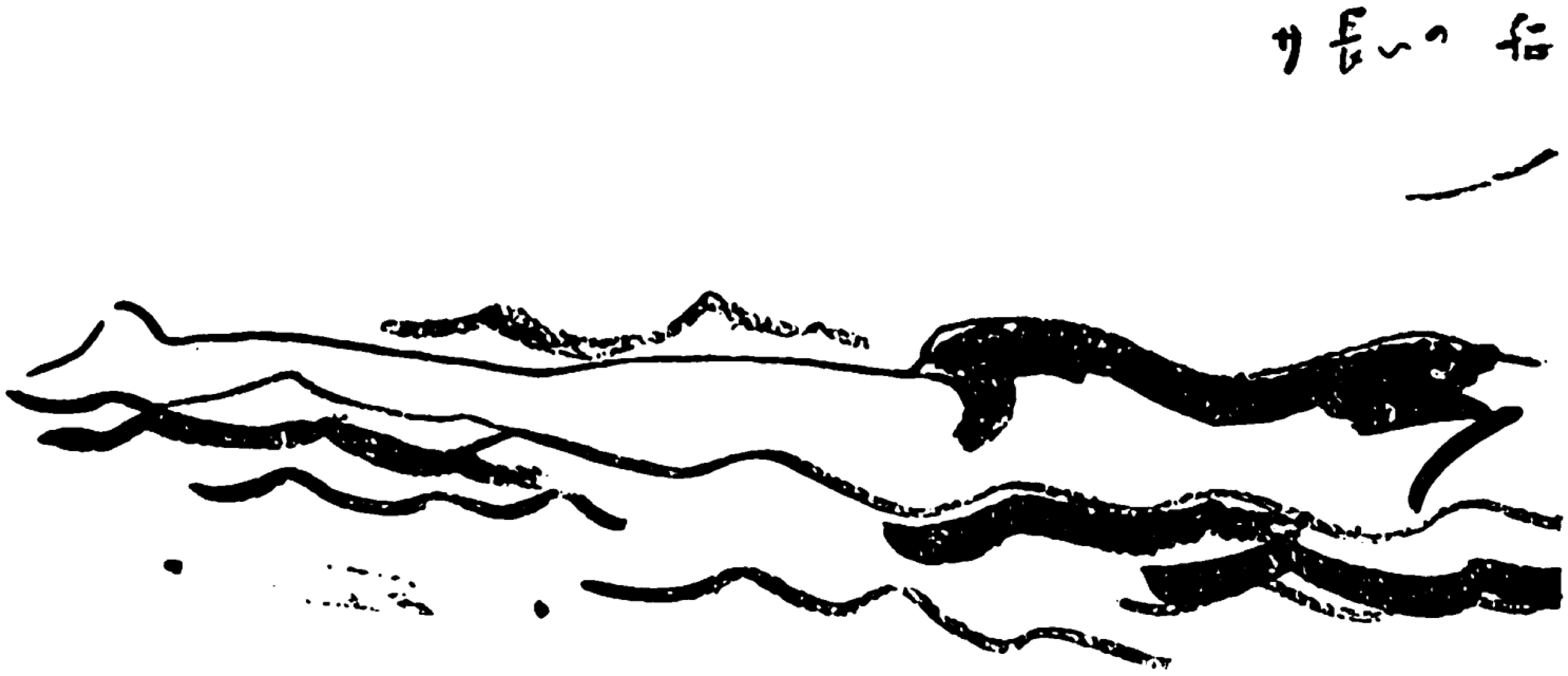
忽ち現る其所には黑く小粒に揃つた人間の中へ白く大きく黄金色の頭の巨物が色彩の强いとりどりの國旗を抱いて四つ五つある。

寫眞でお馴染の首等である。

なるほどワイズミユーラー!!!

菊五郎を觀る

菊五郎は此頃氣味の惡いほど心的に冴てゐる。演舞場中幕の「心猿秋の月」のあの猿は小品舞踊の上々で、他の隨從をゆるさない。（菊五郎の踊りに玉のごとき風趣が湧き出して來て、その氣品と風格が全く他の人の舞踊と違つてきたことは今更ではないが）猿の――しぐさとはいはない、猿といふものをもちだして來て踊らせてゐる。至妙の藝である。尤も敬服したのは踊の手にザラにある、片つぽの袖を胸につけて、袖の表を別の手で撫でおろすやうなことをする、その場合人間の眼はいつも下へおとすか反對に上にむけるかの表情をともなふのだが、そのシグサをいかにも猿でやつた。眼のおき方を、上へでもなく下へでもなく、空にキヨトンと見物の方を見てゐた。これは猿芝居などを見るとよくぶつかる猿の表情ではあるが、さて人間が扮する踊りとなると、ちやんと踊つてしまひたいものである。それに猿は手足長く瘦身なものであるを、菊五郎はあの體つきで、しかもあの繪馬の中に立つ神馬を曳いた畫面の姿ばかりでなく、踊りだしてからも藝のフクラミはあつても體のフクラミなどは忘れさせてゐる。後をむくと、背のあたりに稍菊五郎の背中を見たが、（それは見なれた、見る目に餘裕もつたも



なるほど高石——、なるほどラデマッヘル。
鶴田はまだ見えない——らしい。
いよ〳〵超だの巨だのと云ふ文字を實物で見るのである。
これはさてワイズミユーラーは水へ入るとまさしく巨人だ——陸へ上ればたゞの大變大男のアメリカ人だ。手足の立派さよ、長さよ短い胶體を持つ日本人には思ひも付かない寸法の所に手首や足首がある。ワイズミユーラーばかりではない、アルネボルグも、ラフアーも、ラデマッヘルもみんな。
が、然し其の中でもワイズミユーラーとアルネボルグは特に素敵に見える。この二人は糸袋から來る絶體の誇負と自信の爲めに態度は天馬行空のやうに自由奔放だ、そしてワイズミユーラーは、より誇負大きければ倨傲な風がある。
アルネボルクは可愛がられた優良種の家畜動物らしい犬かなぞのやうにいたづらとふざけに快活で甘やかされて居る。泳ぐ時もよき敵手が居ないから何ほかつそれを止めないけれ共、いよ〳〵本氣となると正に態度は壯觀である。阿修羅の如く、白手の綺麗な仕上げの酒呑童子のごとくに物凄い。
ワイズミユーラーにも矢張り泳ぐ時それと同じ表情が出る。昔の名人の描いた鬼を伏す鍾馗とかいやそれよりも禪の一喝の圖と同じき表情だ。不のばかりしか認めはしなかつたであらう）菊五郎の踊りを褒ると通をとほりこした人々には當り前の事になつてしまつて、いふ方が楽人のやうに思ふのかもしれないが好きものはよしといふ方がいい。近江のお餘の洒しは簡素に見えて、其實洗練つくされたものだ。たとへば茶室の庭に花をおかず、床の間の一花に充分の妙をしのばせ、又名家の筆の素描の妙味である。馬をつかつて踊れるのは、けだし此優ばかりであらう。馬もよくまたつとめてゐた。後見といひ、この馬といひ、門下の意氣のピッタリあつてゐるのもまた特色と見る。（コスズ）

謹告
讀者諸賢

次回「男性訪問」に、誰氏を誰女が訪ふべきか、必須なる談話條件と共に、愛讀者諸氏より御指示うけたく願ひあげます。別頁に添へた愛讀分に御記入の上なるべく月末までに御投稿下さい。

小サロン

別欄の「男性訪問」にまづ里見弴氏が目ざされたときいた直木みそこし（オット三十五氏）どうか優しい美しい人に來てもらひたいと祈つてゐる。さういふことにおくれをとるは卑怯と久米正雄氏、兜に各香をくゆらすた

思議にも西洋の構圖にはあまり見當らぬ表情を此の西洋人等はする。

ドイツ第一の强者だが、ラデマッヘル以下の人には其所迄のあるものは無い。日本人にも、スポーツで此の境地迄來るのは何日の日か知らん。——先づ未來の母たちよ、今とこれからの娘さん達よ、若し未だ貴女達が胸高く締める帶を望むなればこんな赤ちゃんは生まれません。スポーツは盛んなれ、優生學は尊重されよだ。——讀者よこういふ女人原始以來の藝術も又傑作を出して下さい。

ワイズミユーラーには又一方ひどく他の人にもややあるがより多く全く動物的な空氣を感じる——鯨か、長さはさうであるが感じは河馬に近い、水の中でぶう〳〵と息をふく時など正に動物だ。陸へ上るとゴリラをも背が偲ばせる。——でももつと前記の動物等より巨きくて美しいし、新しく名付ければワイズミユーラーといふ兩棲超動物だ。

隨分いゝ體だが日本學生高石をこの超動物に何時も配するのは悲壯だ。入江といふ人も中々いゝ、この二人にあの巨人達の體が賂りたい——。總べて日本の選手達の一生懸命で眞面目なことよ。然し體力を如何にせん！　さうでしなみオサ〳〵おこたらずとある。さて誰が誰を訪問するやら！



×

さゝき ふさ女史から、「打てば響くやうな快よい男」と、現代智的社會の色男標本に第一のポイントをしるしづけられた幸運兒、幸福男子を誰だと思ふエエ。オホン・ツガモネエ・まかり出たるは關東で仕上げて、いま關西操觚界にかくれもねえ、「おらが國さあ」の伊藤金次郎でござる。

×

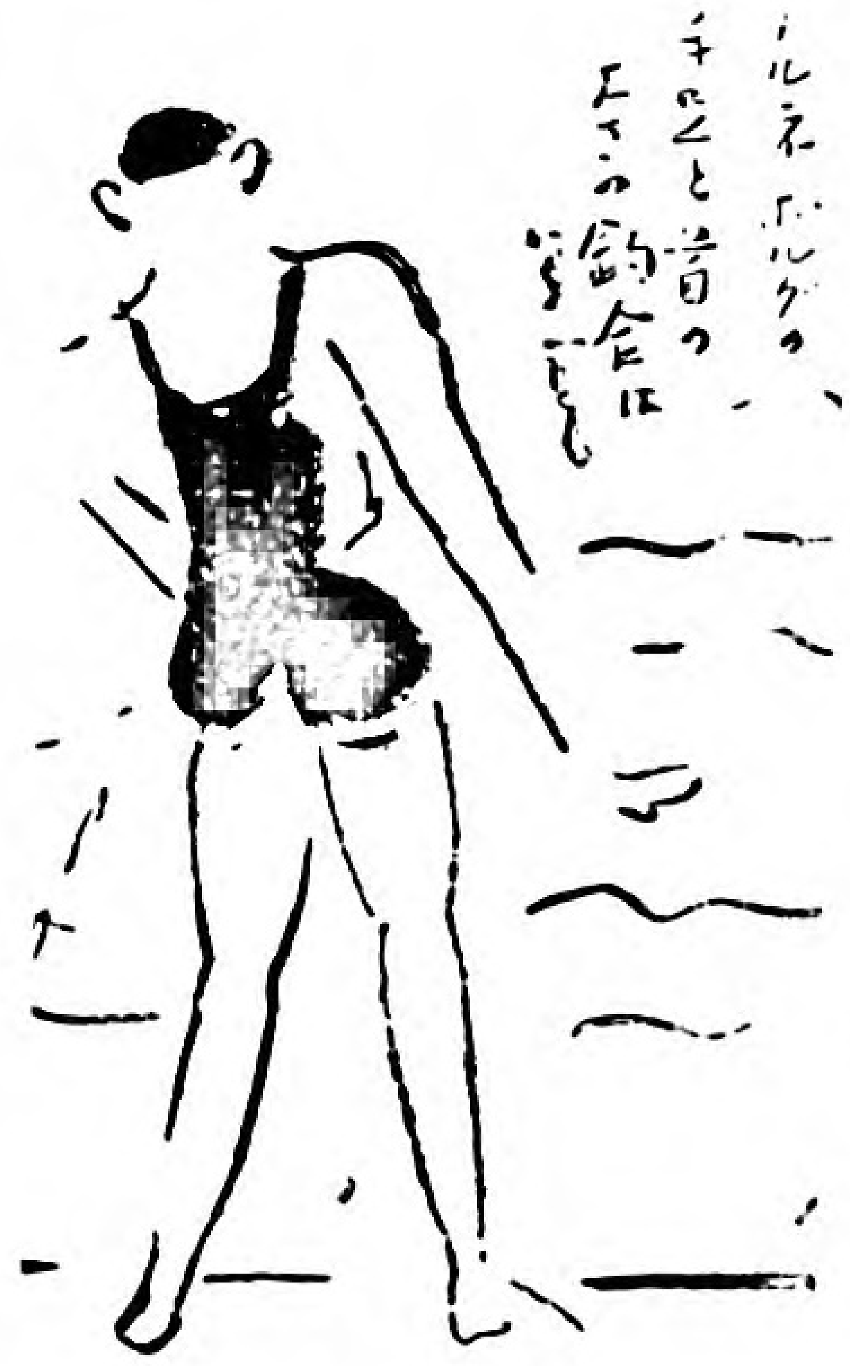
小田原「木兎の家」の女主人公であつた江口章子さん、緣なればこそ今、聚光院和尙の夫人となつて、詩吟と讀經とのさを彈に問ひ、「女人山居」一卷の歌集を公にす。その章子さん、薄暗い僧院で時雨を驚ろかす。「あたしには黑い猫がついてゐるのです。和尙さんは蛇です。」「小鳥がついてくると言はれて悅んだ小鳥ずきの時雨、猫も蛇も大きらひの上にどつちも小鳥を狙ふ代物なので クワバラバラ。そのあとで章子さんがフサギの虫になると「鰻が食べたいのぢやろ」と慰められるときいて、急に氣が强くなり、黑猫は蛇を食べないだらうかなんてからかふ——度すべからざる女であると和尙さまゆるしておやりなされと章子さんがいつたかどうか。

×

なくば、鐵砲玉のやうに小型飛行機のやうに眼にも飛まらぬ早技を發見して短距離に斷然强くなつたらどうかしらん。俄仕立のフアンだから奇想天外、天馬空なことを亂思する。

物思ひの折柄、突然空中からヘレンミニイ孃が様々のダイヴイングを美しく見せる。すると若き高階が若さと純新さで劣らぬ美しき形ちを空間に描く。この技は肢體の世にも美事に發達した女性の天才が出て高い碧空から瞬間の美を空中に描いて呉れたらまさに此卉のいみじき觀物であらう。

鶴田が出てきた、いゝアトモスフエルを持つ人だ。ハンブルな眼付きでそしてツルタ以外には日本人には一人もない强味と自信から來る落付が溢れてゐて頼もしい。敵手のラデマツヘルはしんの柔しさうなすこし何所か弱氣さうな良き青年だ。ツルタに二百メートルで又破れて、四百で勝つ前、四百のスタートの前に自分の盜督と只二人、淋しげに





ピッチをかけんアル

生田花世女史が夜中に癪をおこした時トマリあはせた江口章子さん、丁度生田家に戀愛合戰たけなはの頃だつたので、驚いて飛起き「猫か、猫か」と狼狽てる。花世女史「違う、違う」といふのも蟲の息、春月氏オキシヘラーを持つてオロ〳〵妻君の背を撫でこする。いとみに夫婦愛濃やかとなる。註――この猫、例の江口女史の黒猫にあらず、藥の方のなり。

×

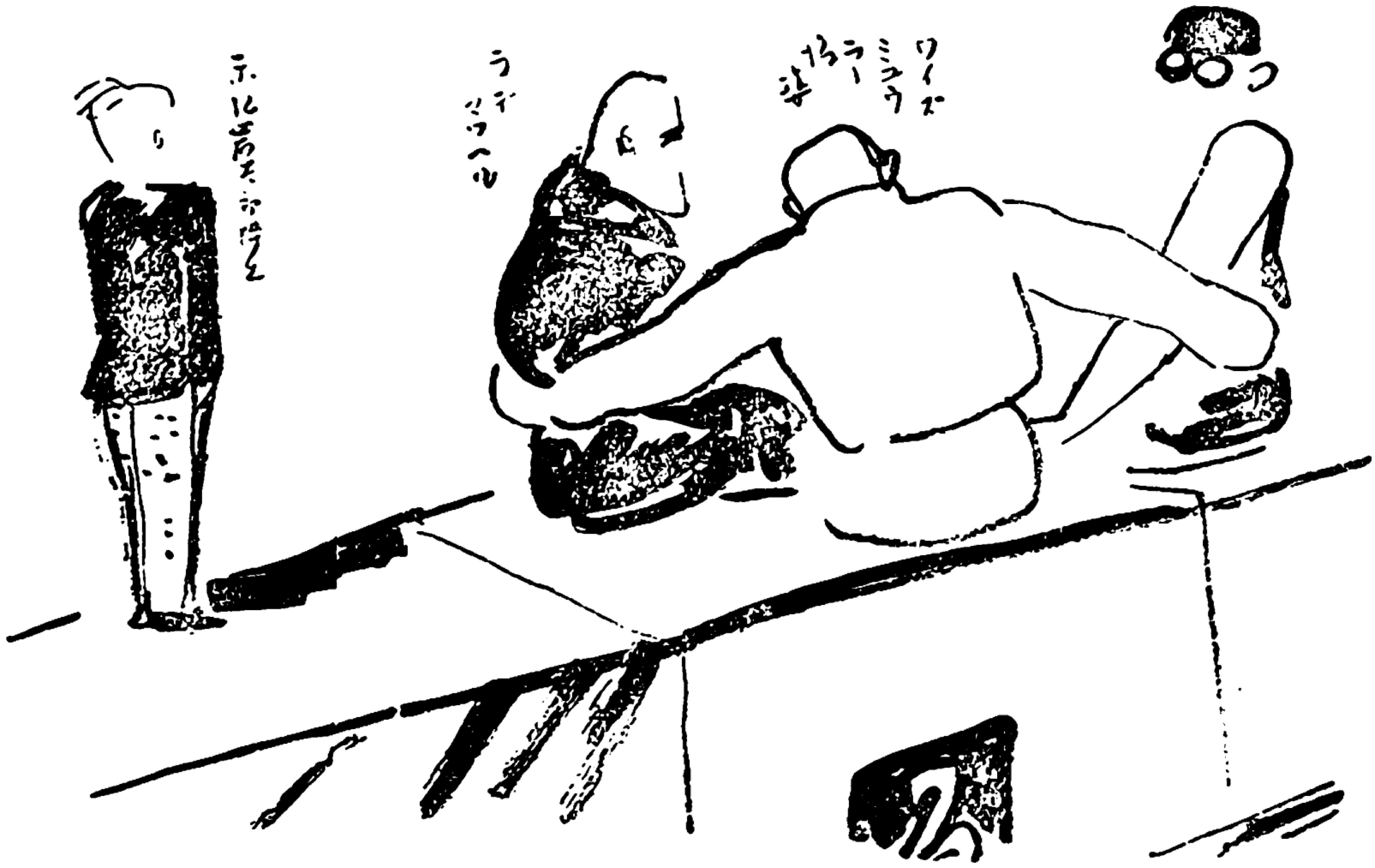
テツゾオルを三日飮んだ花世女史、元氣回春、終日ニコ〳〵、大いに若がへつて働きますとある。活力あまつて戀愛でもしたくなつたらお困りでせうといふと更に大ニコ〳〵、いいではありませんか大いにとある。さうなるとこんどは春月氏が「煩悶記」を書く番になる。

×

渡佛送別會に主賓吉屋女史一時間半の遅刻、幹事の連中吉屋女史の居處を求めても探しあたらず、三個の電話をかけつづけてゐたをり水極立つたる盛裝にて出席した三宅やす子女史の顔を見るやいなや、女人の第六感たちまちピンと感電、「吉屋さんまだでせうか?」と衆口一致、「もうすぐよ」ときくとハリウツド・メイ・牛山に早速電話をつないでもらつて「おめかしはもういゝかげんにさせ

また悲壯にすこし興奮して居たのは異境にある人らしい寂しさであつた。幸ひに四百に勝つて、ドイツの旗の登つて行くのを眺めた彼の表情はヨーロツパの小說であつた。アメリカ人の心臟はこの小說は含まなささうだ。日本と西洋のテイームのリレーが初まる。白塗りの大きな船と黑い小蒸氣が走りつこをして居るやうだ。小蒸氣は中々すばしこい、巨船は初め少し遲れて後半で取り返して最後で惜しい所で勝つて見せる八百長、御馳走ではないかな——水泳は漸く二度目のフアンだからスポーツマンシツプが譯らなくつて昔しの角力道のやうな事をちよつと頭に浮べたのならば誠に恥じ入ります。

（附記もうすこし面白いスケツチが大分取れたのでしたが、迂濶な畫人のこと丶て電車の混雜で失つてしまひ、歸來記憶によつて描きましたので甚だ不滿な畫です。）



て、はやくよこしてください」

×

武者小路實篤氏から「勇猛大膽」の小額をせしめた吉屋女史、初對面ながらテキパキともひとつ小附けのお土產をねだる。武者氏氣に入りの作「黃ばら一輪」のあぶら繪、双額に仕立て明日送別會の席上まで、眞杉靜枝さんの手によつて運ばせるところまで漕ぎつける。全く「勇猛大膽」でいらつしやると、お口入れ役の生田女史嗟嘆してゐた。

×

吉屋さんのフランスのおみやげはなんでせうと、東京驛で女學生たちがささやきあつてゐた。お婿さんを目附けてくるつて仰しやつてたつてと一人がいふと、い丶え、お人形よ。さう？　そのお人形なくんぢやないのとオールドミスがいた。

×

ある漫畫家が、ある朝女人藝術社を襲つた。そして時雨女史の寢呆け面を相して、あなたは御壽命が長いと祝つた。苦いものと、甘いものを一處に蒋めたやうな、泣きたいやうな嬉しいやうな面くらつた表情で、お禮をもふしてよいのか悔んでよいのかと言つた女史、あとでつくづく鏡を見てなるほど長命しさうな間の拔けた顏だ。尤も、癇癪をおこしてゐる時は短命に見えるけれどもだと。

表現派的テンポ

S　H

あたしの鼻は曲つてゐるさうだ、したがつて眼も見當が違つてゐるのかもしれない、片つぽが輕い亂視だとある。それから押してゆくと頭の中の雜作も歪んでゐるであらう。根性つ骨もたしかに少々カタワだ。その人間が見た物體の表現です、曲つたり歪んだり、丸かつたり角だつたり、長つぼそかつたりするかもしれない。

震災後神田驛の上から見て、落日がブヨ〳〵に見えた。赤い、血の色の袋にはいつたもの――兎に角飴を煮たやうな、鎔鑛爐の中の熱鐵が丸くなつて空を歩いてゐるやうな――自分の重味で片よつて下の方が重さう。妙な譬へだが、鷄のおなかにある、まだカラをかぶらない卵のやう――そんな生きた動きだつた。

それを話したら男が言ひきかせた。「そんなものゝ見方をすると氣が違うよ、よつぽど頭が變になつてる」と。だが、それが妙だ、また昨今、その感じを新たにしてる。ドス黑い雲にひつかゝつて、大きな陽が西に沈むとき、どうしてもブカ〳〵に思へる。あたしは指で押して見てキッパリさうだと言ひたくさへある。

ある大通りの陶器商の店の奥の方で、品物を渡されるのを待つてる間に、表の方を眺めてゐたらば、これはよつぽど街が氣狂ひだつた。

硝子の飾り棚が重なりあつてゐる間から、入口が下の方だけ巾二尺の高さ一尺も見える。そこを歩いてゆく女の裾、男の足、お爺さん、子供、勞働者、モダーンな細い脚――こんどは、硝子戸に幾重もブッかつて流れ込んでくる顔！　それから別の方面から來る胴つぱら！　お姫様が豚の尻つぽをさげて、馬が花簪をさして、マドロスパイプがお尻を振つあるくどころのをかしさではない。もし人世がもつと忙しくなつて、あんな風にコンガラかつてしまつたら、あたしの亭主は誰です？　どころではない、あたしは一體何處にゐて、どれがホントのあたしなんですと、考へてるうちに、考へてた魂がどこへかフッと飛んでしまつたといふ事になるだらう。

×

その話をきいた編輯氏が、いゝぢやありませんか、長生きをすると養老金がもらへますといつたら、あたしは漆ッかぶれをする人間で、おまけにお酒がきらひです。壹圓五十錢ぐらゐ頂くのにイビッタレをして待つちやいられないと――その時は短命の相をしてゐました癇癪をおこしたのでせう。でも八木さんからコスモスを澤山もらつて嬉しがつて、あたしの姪があがんぼのとき花を抱へて寫眞をうつすとみんな死んだから、あたしもこれを抱いて撮らうかしらと、そのくせニコ〳〵してゐた。

男性訪問の第一に立つ候補者は左の諸氏です。この中からどなたがどなたを訪問したらよいかお指示下さい。

伊福部敬子、生田花世、八木秋子、北川千代、長谷川春子、佐々木ふさ、望月百合子、小寺菊子、北村兼子

愛讀者券

對話條件	訪ふ方	訪はれる方

噫可愛いペリコよ――小寺菊子

……――ペリコのこと筆にするも今は涙の種にてあまりにかなしく怨めしきことよ―

ペリコよ、私の大切の〳〵ひとりつ子のペリコよ、お前は一體どこへ行つてしまつたのだらう？　お前は實に咄嗟のあひだに私たちの眼から見えなくなつてしまつた。あんまり突然で、瞬間的で、奇蹟のやうな素早さであつた。私は涙さへ出なかつた。怖ろしい旋風が來て、お前を一氣にのみつくして行つたやうだ。とても信ずることが出來なかつた。けれど、お前は今だに私のそばへ戻つて來てくれないのだ。

なんといふ物凄くもおそるべき出來ごとであつたことか？　あの時きり、あの刹那の時間と空間とをけじめとして、可愛らしいお前の姿がもう永久に私から去つてしまつたなんて、どうして私に信じられよう。

お前はどこかに生きてゐる、あの可愛い〳〵聲で、私が敎へ込んだ日本語で、オーハヨ、アリガトツ、ペコちやんよ、トウさん！と云つて、私たちをよんでゐるに違ひない！　さう思はれてならない。さう思はずにはゐられないのだよ。私のペコちやんはどこにゐるのだらう？　どうして早く歸つて來てくれないのだらう？　私は日に何度かひとりでかう呟く。呟くとそのあとから、眼瞼が熱くなつて、涙が滲んでくる。お前が止まつてゐない空籠の中に、お前の喰べかけの餌壺（粟と稗の實と唐もろこしと、あの日のパンの殘りとが入つてゐる）がその儘引かゝつてをり、あの日の飲みかけの水の殘りもそのまゝのこつてゐる……なんといふそれは可愛い記念だらう！　その空籠にトウさんが巴里から持つて歸つた美しい造花が飾られ、前に香がたかれ、秀さんのをば様から贈られた黑水引のかゝつたお菓子が供へられ、お前が好きだつた庭のボンボンダリヤや百日草が活けられてあるのだが、私はそこを通るとき、お前のその亡き姿を見ぬやうにしてよきるのだよ。お前の亡き遺骸がそこにあるのではなく、『お位牌』！　白紙に包まれた大小四十二枚の美

しい（トウさんの年と同じ厄年の數）羽根、お前が常に自慢して〱私たちに見せびらかしてゐた綠と群青とに輝いたあの豪奢な羽根が、お前の高慢ちきな小さな姿を、いやが上にも豪奢に裝飾してゐた、あの澤山の衣裳の中のほんの一部分の羽根が、羽根だけがのこつてゐるのだもの、私は面を掩ふやうにしてそこを通るのだよ。

それから庭を眺めて、空を仰いで、椎の葉かげに、楢の枝葉に、松の梢に、竹藪の中に、黄蜀葵のあたりに、ダリヤの邊に、萩の亂れに、お前を求める私の悲しい視線が次からつぎへとそゝがれてゆくのだよ。どうしてもお前がその邊にちよこ〱と歩いてゐるのだとしか、私には思はれないのだもの。

けれど、私の眼がぢきに潤んでくる。やがて潸然と淚が流れ出してしまふ……

毎日〱私は何度さうやつて庭を眺め空を仰ぐことか？　ペコちやんよ、お前はほんとにどこにどうしてゐるのだらうね。

今から思ふと、お前との九年間の生活が夢のやうだ。生きてゐるものは必ず死ぬ、ことは分つてゐるが、私はお前にだけは『死』を聯想したくなかつた。このペコが、この可愛いペコがもし止り木から落ちて、ころりと橫はつてゐたとしたら、オゝ、どうしよう？　私はそんなことを思ふと顫へるのだつた。世界の生物の凡てに『死』が來ても、お前ひとりには來ないやうにと、私はいつも心からそれを祈つてゐる。

それなのに、私は今お前を失つてしまつたのだよ。宇宙の、世界の、天空の、地上の、どこをどう探したつて、お前の懷かしい姿が見つからないのだもの、こんな怖ろしい奇蹟があるものだらうか？

お前が見えなくなつた日、九月十一日、暑い日だつた。初秋と云つても殘暑の光りが庭中一杯にあか〱と照りつけてゐた。前日海岸からちよつと歸つた私は、いつもと同じにお前と一しよにおひるのパンをたべた。この九年間私のひるの食卓に、只の一日だつてお前がゐないことはなかつた。（私がちよつとした旅行をしない限り、…震災の時だつてお前のパンだけは用意した）その日私はお前に狐色に燒けたトーストをあげながらお話をした。

『ゆふべ、ペコちやんが逃げた夢を見たよ、さあどこのお宮樣だつたらうね、壯嚴な感じのするお宮樣の境內だつたよ、私はペコをつ

れて遊びに行つてゐたの、そしたらペコはふと私の指から飛んで行つたの、私はびつくりして呼び返したのよ、これ〳〵どうしてカアさんから飛んでゆきましたか、さあもう飛ぶんぢやありません、と此度は確りとペコの指をつまんで歸らうとすると、又飛んだのよ、ハッと思ふまにペコは私の指に二三十本の羽根を殘して（その羽根に少しばかりの肉塊が附着してゐた）飛んぢやつたの、あゝペこちやんや、ペコちやんや！、私は夢中に聲をあげて叫び廻つた、その聲で眼がさめて、ほんとにほつとしましたよ、オヽオ大變〳〵、ペコちやん、逃げて行つたりしちやいやあよ。』

私は籠の目から指を突込み、お前のお手々をちよいとつまんでやつた。お前はバタのついてるとこだけパンをたべては落して、お代りを强請つてゐた、葡萄のおつゆもお匙に一杯のんだ、おいしさうだつたね。

それから一時間と經たなかつた。トウさんが非常に狼狽てた聲を上げて、バタ〳〵と玄關から飛び出したのは。

『もうゐない！　どこへ行つたらう？』

トウさんは眞靑になつて空を仰いでゐた。トウさんはお前を肩にのせて畫を描いてゐたのださうな、するとお前はトウさんが話しかけてくれないと云つて怒つて、首のとこをちよつと失禮したんだつてね、アッとトウさんが首を動かした拍子に、氣の小さいお前は飛び上つた、そしてカーテンにとまつた、風が南から來てカーテンを窓外へ送り出した、お前も一しよにスル〳〵とそのまゝ。そこは北側の門の内だつた。そこでトウさんは悲鳴に近い聲をあげて飛び出したのだつた。その間一分とかゝらなかつた。

私は自分の心臟がピタとまつたかと思つた。私の體はすぐ往來に出てゐた。聲を絞つてお前の名を呼びつゞけた。あの木を、この木を、隣りの庭を、お向ひの庭を見上げて、あつちへ走り、こつちへ駈けり、全くの悲鳴をあげてお前をよびつゞけた。

ペコちやんやペこちやんや！　私の悲しい呼び聲が表の通りから裏の通りへと、氣狂ひのやうによびつゞけて行つた。眼からも鼻からも咽喉からも涙が出ようとしてつかへてゐた。畫室の屋根の上にトウさんが立つて四方を見渡しながら、お前を呼び迎へてゐる放心したやうな姿が見えた。窓があいてるのにお前を籠から出してゐたトウさんの此大きな過失を、私に許されようか？　私は怨みと悲しみに充ちた瞳をトウさんに鋭くむけた。ペコを戻して下さい、私の大切のペコを歸して下さい！　早く呼んで來て下さい！　私の心は焦ら立つた。

ペコちやんや！　ペコちやんや！　兒をさらはれた母親のやうに、傷ましい聲を絞りあげて、私はあの横町、この横町と歩き廻つ

た。電柱のてつぺんにとまつてゐるのを見たと、ある子供は云つた。二時間ほど前にそれらしい小鳥が低く飛んで來て大騒ぎした、と近所の小鳥やで語つた。私は百の耳千の耳を持つた敏感さでそこへらから聞える小鳥の鳴聲を聴き分けようとした。お前の聲は聞えはしなかつた。私がこんなに呼んでるのに、ペコは聴き分けない筈がない……

私は悲哀と憂鬱とに充たされて家へ歸つて來た。もう夕方に近かつた。日がとつぷり暮れるまで私は庭に出て空を仰いでゐる。仰いで〳〵仰ぎ疲れた。夜になつてしと〳〵と細い雨が落ちあたりがひつそりしてしまつた。どこかの樹木の枝の隅つこの隅つこの方に小さく身を片よせて、一生懸命にしがみついてゐる迷兒になつたお前の姿が見えて、私はその晩眠れるどこではなかつた。夜が明けたらすぐにカアさんのお家を見つけて歸つて來ておくれ！　さう祈り合掌してぢつと瞑目してゐたよ。

ほの〴〵と明け初めてゆく朝露をふんで、靜かな曉の空を仰ぎながらお前を呼んでゆく私の聲は、昨日よりも力がなかつた。塒を放れる雀の群、垣根越しに聞えるセキセイや十姉妹の聲に胸を躍かせながら、行けどゆけど、お前を見出せなかつた。心も體も疲れ果てた。

八時ごろになつて、お前の豪奢な羽根が、私の夢に見たと同じ分量ほど、井戸端に綺麗に揃つたまゝ落ちてゐたのを發見したではないか？

『ではやつぱり猫だつたかな。』

もしや、と思つてゐたその疑ひがはつきり解けたやうで、私はハツと胸をつかれた。私はその羽根に温かい息をかけ涙にぬれた頰におしつけた。こんなところにも落ちてゐる……トウさんは隣りの庭から、地面にこすりつけられた黄色い羽根を四五本拾つて私にくれた。

あゝ、ではやつぱり猫かしら？

私はぴしやんこに打ちひしがれた思ひで、大きく息を引いた。昨日なかつたこれらの羽根が、どうして今朝になつてあつたことか？それが不思議でならないのだよ。私が前夜夢を見たのも大なる不可思議だしね。私たちはそちこちの株の下を探しはじめた、けれど、

それきり何も發見されはしなかつたよ。よくお菓子だの果物だのをお手々に持つてたべてゐた、あのおませな嘴も、長い〳〵立派な尻尾のお羽根も……なんにも見つからなかつた。

『あれは私のコドモだつたのです、九年間荒い風にもあてないやうにして大切に〳〵育てゝ來たコドモだつたのです。病氣で亡くなくなつたのなら諦めもつきます、猫に……猫にとらせるなんて、あなたはあんまり酷い……巴里から歸つてから、日本のものにいえ、第一に家の者みんなに冷淡で、興味のない顏ばかりしてゝ、氣のぬけた顏ばかりしてゝ、ペコをもちつとも可愛がつて下さらなかつた……その揚句が此始末なんです、あんまり慘酷すぎます……』

食卓の前に坐つたとき、私はもう堪へきれなくなつて泣き出してしまつた。

『うむ。』

トウさんは呻くやうに、當惑した返事を一つしたが、しばらくすると、

『三越へ行つて見ようか？　ゐるかも知れないから……』

と氣兼さうに小さく云つた。なんといふ面喰つた挨拶だらう！　かあつと私の頭腦に血がのぼり、胸が燃え上つたよ、ねえペコちやん！　三越になんで私の可愛いペコがゐようぞ、ねえ。男心のその冷たさ、憎さをどうして打碎いてやれば好いか、私はお前のトウさんを一生怨みぬく積りだよ。

私は激しい感動のためにふら〳〵して、一日中蒲團の上で泣きつゞけた。どうにもかうにも身の置き所がなかつた。今にもお前の歸つてくるといふ待ち佗びる心と、もう歸らぬ、猫がたべたのだもの、と思ふ絶望の傷ましい心とが、私の氣を狂はせずにはおかなかつた。私は夜になつてから刎ね起きて、東海道行の汽車に乘つてゐたよ。泣き腫らしてふさがつた眼瞼に、列車の鈍い光線が朦朧と映り込み上げる嗚咽の涙に全身が波のやうに打ちふるへるのだつた。

私は近年こんなにも取り亂し、こんなにも泣きつゞけたことがあらうか？

あゝ可愛いペコちやんよ！



蛇

三津木貞子

蛇が、私の、夢もなく熟睡してゐる胸の上をすッ……と越した。

私の全身は躍つて機械の様に跳ねかへつた。感官が、急を脳中樞に傳へるさきに、獨自の作用で反射運動を行つたのだ。第六官の作用だ。

ぴくッ、と足が縮む。上半身がねぢれる。がば、と起きる……瞬間で、同時だつた。ちやんと對照物に向つて身を起してゐる。無意識だつた。まことに神經の作用といふものは微妙なものである。

片肱ついた顏の下に、活躍するものゝ瞬間の靜けさがあつた。

蛇だ！

細紐をたくして投げ出した様な姿勢……全身がぴんと張つて、つまんだら針金の様に、姿のまゝぴんと空間に固まつたであらう。鱗の一枚一枚が敵を感じる爲めに逆立つかとばかり。

眼で見てから心が觀たのである。

驚愕も極度のものとなると極度の冷靜を伴ふ。

殆ど平靜に近い靜かさで、じつと顏の下の存在に眼を注いでゐた。二十秒……三十秒……三分間程して、そろ〳〵と首から這ひ出した。長くなつて、蒲團とすれすれになつた尾を前に曳き出した時、それがわづか一尺ばかりの小蛇であることに氣が附いた。が、小蛇だからと言つて私の受けた衝撃に變りのある筈がない。世界ぢゆうの辭書の中から、蛇といふ字だけ除いてしまひ度いと思ふ程嫌ひな動物だ。平靜を保つ様に見えたのは、一瞬間心臓が凝結して搏たなかつたのかも知れない。喘がないのは呼吸を詰めてゐたからだ。

小蛇は、スルスルと延びて頭を室の隅に据ゑてある書卓の下に入れた。全身の沒するのを見すまして私はそろりと寢床の上に立ち上つた。忍ぶ様に室を出ると廊下を渡り、茶の間を拔け、姉の書齋に入らうとして

『蛇！……蛇よ！』

と、初めて聲に出して叫んだ。心臓がひどく搏つて、赫と後腦が熱くなつた。

朝は晩く、午にならうとしてゐる。書生が驅け込んで、言はれた書卓を除いて見た。角の疊の敷目に尾が二寸程出てゐたが、見てゐる間に入つてしまつたとの事だつた。徹夜で仕事をしたので、寢る時、もう夜明けだと思つて窓を、上の方だけ透かして寢たのだつた。ぴつちりしめると蚊さへ入らぬ洋館なのだ。それにしても住んで十年間、庭にさへ姿を見たことのない生物が……思ひがけぬ事は矢張りあるものだ。風邪さへひいたことのない十五の男の一人子が、友達と遊びの中に怪我をして、たつた十三日患つて死んでしまつた。それを第一として、これまで生きて來る間に、魂の底まで震駭させられた第二番目の事件であつた。

墓で、私は薔薇の芽を喰べてゐる大きな毛蟲を見るや、しゆッとマッチを摺つてその下にかざした。枝の下に焔をかざしながら、はッとなつた。私の魂は顚へ出した。遲かつた。ぽろりと落ちて反り返り跳ね返つた。なぜいつもの様に發見けたら枝ごと折つて遠くへ捨てることをしなかつたのだらう？　子供の墓では、蚊さへ、拂ふだけで、叩きはしない私だつたのに。

彼奴のせいだ！

と私は思ふのだつた。

會に出席した。

會は終つた。通りに流れ出た人々は、各自に歸路を電車に縋り、自動車を呼びして散つて行つた。

五六人がまだ一團となつて歩いてゐた。私もその中の一人だつた。私はまだ何やら歸りきれない氣持だつた。出來るなら夜ぢゆうでも歩くか人と話すかしてゐないではゐられない氣持だつた。

『お歸りにならない？　テイ子さん、まだ早いわよ。』

ユキ子さんはいふ。夜は十一時を過ぎてゐた。私はしかし、默つて肯いた。

『子供がねえ、霜やけで手がぐちやぐちやになつても、手當をしてやるものがないんでせう。それを見るとねえ』

『あんたは、僕んところから去つてしまふんだよ。』先生は肱をこめかみにかつて足を斜めに長くのばした。

『だからわたし、先生に一緒に死んで下さいつて、願つてるのよ。』

ユキ子さんは兩手を長く疊に投げ出して、その上に面をふせた。さもやるせなげに。

先生を、殺されてたまるかい！

と私は心で叫んだ。それよりも、姿は如何にもやるせなげながら、ユキ子さんの調子には何處か曖昧なところが感じられた。にも關らず先生は

『それや死んでもいゝがね。』と眞劍な眼つきで應じられる。

先生の心情に涙を感じたと同時に、何處かに逃避の臭ひのする、ユキ子さんの聲から來るものに赫となつた。

先夫を捨てる時、決心して殘して來た筈のを

『子供がねえ……子供がねえ……』とばかり繰り返す今夜のユキ子さんだ。實をいふと、男から男に移り、先生の庇護を受けるまで、色々の噂の種子を播いた人に、この母性愛に生きる一面があるから

ばかりにこの人を責つて居る私なのだつたが、それを今夜は口實として多分に利用してゐる・・・と私には感じられたのだつた。

『それぢやあ、あなたは、愛情が足りないんだ！』

露骨には先生も言はず、まして身うちも等しい内輪の人達さへが三人ともつゝしみ深く口を噤んでゐる中を、私の聲が突つ走つたものだ。

興奮してゐるな。

と自分でも考へた。日頃尊敬してゐる先生に關したことには陰言にしても批評がましい事は言はない私なのだ。默々と、聽く一方の私でしかなかつたのに――、やつぱりどうかしてゐる。

彼奴のせいだ！

と思ふのだつた。

等。

等。

等。

いつにないことばかり爲つゞける私だつた。その度に悔み、考へさせられては、彼奴のせいだ！　と心で絶叫する。たまらない日の七、八日だつた。

蛇がさつぱり姿を見せないので、夢を見たのではないか、などと人から神經を侮辱されて憤慨した。書生が姿を見て居なかつたら自分でも或は幻覺かと惑つたかも知れない。何でもない日が過ぎていつた。七日目に破損した洋館の窓を直しに來た大工が、金槌で激しく窓框を叩いたら、震動に驚いて窓に跳り上つて小蛇が逃げたことを告げた。大工は三寸ばかりの小蛇だつたと言つた。羞恥の樣なものが私に來た。

床下へ拔けたに違ひないと人が言ひ、自分もそう思つたのだが、どうしてもそこへ寢る氣になれなかつた。寢たらまた這ひ上られたであらう。

新鮮にされた恐怖が――顫慄が、全身を長ものの觸れるかの樣に這ひまはつた。

二週間程後の或る夜、隣家の塀の上に鬼の面を冠つた長蟲の怪物――龍の樣なかたちをしたものが這ひつたふのを、近所の人が見附けて騷ぎだした。守宮（やもり）を半分逆呑みにした一尺ばかりの小蛇だ。紛ひもなく私を這つたあれだ。一旦塀の内側の檜の梢に隱れてしまつたのが再び電燈を浴びて現はれた時、お向うの書生さんが棒で突き落して殺してしまつた。頭が扁平だから、毒蛇の子だと書生さんが言つた。毒蛇ときいて愛撫したい不思議な情が私に來た。

『此奴めが、此奴めが、毛蟲を焚いたり、ユキ子さんを叱つたり、惡戯ばかりして、たうとう自分を殺してしまつたぢやないか。』

私は口の中で呟きながら、ぴたぴたと棒で小蛇を叩いてゐた。いたづらをした愛犬の頭を輕打する時の樣な、ひどく親しいそれは氣持だつた。

胸を這はれて以來侮辱されつゞけたからだぢゆうの神經が微笑で揺れた。



女浪人

北村兼子

モダンガール時代が凋落したら、次いで來るものは女浪人時代であらう。

男の粒が小さくなつて、その機嫌を取つて暮さうといふ氣になれない女性は浪人するより仕方がない。賣殘りものといつても老嬢といつても一種の浪人であつて家庭地獄へ墮ちるのが嫌やなら、どうしても職業に就く。職業にはぐれたら浪人となる。これが浪人道への行進であるが、婦人の職業は機械の延長と見なされてゐるから新しい機械が發明されると女浪人が束になつて街頭に投げ出される。自動式電話のために交換孃が大量的に浪人となつたが、彼女等の多くはそれ〴〵巣を求めて家庭へ落ちついた。少數は女給に身をかはしたものもあつた。しかし左樣に手輕に巣を造れないものに美術家や音樂家や婦人記者などの敗殘者がある。これは機械の延長でなかつただけに始末が惡い。不景氣のために音樂會もさびれる。美術品の買手もない。需用に關係なく美術學校も音樂學校も卒業生を供給する。大學でも新聞科を設けて頭の勞働者を出す。タイピストも看護婦も後から〳〵失業切符を買つて珠數つなぎになつてゐるから、猾く長蛇の列へ割り込んで順番をごまかさなくつては、あら！發車してしまつたわよ。

人ごとぢやない。私も失業してから一年と三ヶ月になる、浪人のみじめさと浪人のありがたさとを骨身にこたへて體得した。氣に向いたら稼ぐ、氣に向かなかつたら寐轉んでゐる、これが浪人のいゝところである。職業を持つてゐた時代には氣が前に向かうが氣が横を向かうが、筆を持つて日課だけは書かねばならなかつたから筆と氣とは別々の途を辷つてゐたものだ。それが浪人となつてから筆と氣とは同一の方角に向いてきたことは失業のありがたさ。ありがたいやうだが、その實はさにあらず。書かうと思つても大ていのことは書き古るされてゐるから、頭の惡い私なんかは新らしいものと思つて書いても、それが皆セコンド・ハンドと見られて隨筆の骨董なんかは買手がない。

妻となつたら浪人ではないとすれば女といふものは便利重寶なものだ。男だつたら一妻を持つてゐるから浪人ではない」とはいへない。浪人とは近代語で失業者と譯する。男は妻を持つてゐても失業

したら浪人である。女は妻となつて男にしがみ付いてゐる間は浪人ではないといふ定義が異議なく通過するものとせば、後家さんや娘さんは準浪人である。

ホノルヽの汎太平洋會議から歸つてきたところだから、まだ船暈氣分で原稿紙の梯子の罫が動いてゐるようだが、慣れこは妙なもので萬年筆で枠の中へ一字づヽ嵌め込んで行くと例の駄文が一行づヽ綴られて行く……ハワイには浪人がない。太陽の惠みは貧富貴賤一視同仁だとものヽ本で讀んだことはあるが、この頃はさうは行かない、ビルヂングが浪人長屋を日蔭にして光線の機會均等を遮ぎる。ハワイだけはビルヂングがなく電車の運轉手が果物を喰べながら職務を勤めて行ける程度の呑氣さだから氣候に變化がない如く、寄合世帶のどの人種も天惠に均霑し、欣々として、のらくとして幸福に暮らしてゐるが、しかも生活の程度も享樂の程度も高いのだから結構なものだ。船が横濱へ着くと、そこには大きな失業地獄の光景が展開してゐる。

徳川三百年史は浪人で飾られた。舊劇も浪花節も講談も浪人の逸話である。戰爭ごとに浪人の大量生産をやつて後藤又兵衛や岩見重太郎などが飛ばされて出る。この浪人は人を殺すことが專門藝であつて、その外のことはできない、商業もできない、百姓にもなれない、原稿も書けない、選擧の演説もできない、活辯にもなれない、艶歌師にもなれない、仕方がないから古寺に宿つたり山林を歩いたりして、つひでに虎を殺したり狒々を退治したりして自分の藝の役に立つ時を待つ。藝の役に立つ時は戰爭であり、戰爭はやがて討死である。

講談や浪花節で浪人の強い話を聞くが、その浪人の實生活に觸れたお話を聞いたことはない。浪人はどうして喰べて行つたもので、どうして收支を計つてゐたものかを知ることができない。職業政治家や院外團や又は女優などいふ連中のように收支を明らかにしない。明かにしない以上は暗い半面がなくてはならぬ。武士の常である「切り取り強盜」といふ奥の手を出したものかも知れない。切取り強盜が浪人に許されるものなら新聞記者の失業者にも脅喝を公認しても差支へはないようなものである。

浪人が乞食をしたことを聞かぬ。それでも餓死もしなかつた――、正直なものは寺小屋をやつたり坊主になつたものもあつたが――、新聞記者のあぶれものは原稿稼ぎをやるが、この節の記者は「脚で書く」のだから末派どころは机に向いてゐる時間より走つてゐる時間の方が多く、浪人になつて背景を失つたら、よほどの學殖がない限り生活に行きつまる。とりわけ婦人記者ときては虚榮夫人、フラッパース娘の手先きとなつて走つてゐたものだから女文士として一本立ちとなることは思ひも寄らぬから少々のところは我慢して職業にあり付かうとする。その職業にあり付かうとするといふのは、つまり、要するに人妻業を稼ぐことである。

人妻業といへば何でもないようだが女給以上の賣笑事業であつて、女給なら「この男でいけなければ、あの男で行く」と融通自在だが、人妻では税金がいらない代り――大阪では近く女給税が取られる――、月に一回しかチップを呉れない。チップとは家事費のことである。良人則ちお客の機嫌を損ずるが最後、年老つてから失業する、浪人となる。

これは採算に合はない商賣だと思つてゐたが、さうぢやないらしい。汎太平洋婦人會議で、パーカー女史の論じたことを聞いて御覽

なさい。
「近ごろ法廷へ提出される離婚訴訟は大てい妻が原告になつてゐる。訴訟の理由とするところをよく考へて見ると多くは婦人の氣隨氣儘が基礎となつてゐる。しかるに判決は被告である夫の敗訴となつて手切金や扶助料を支拂はさせられてゐる。これは不條理なことであるから改めねばならぬ。子のない婦人に手切れ金を支拂ふ必要がない、却つて失業してゐる男なら、妻から手切れ金を支拂へといふ判決があつて然るべきものと思ふ。』
どうです、こんなことがアメリカ首席代表から述べられて、一言なかるべからずの各國代表は一言もなかつた。日本代表たちは「妙だ」といふ顔つきで何にもいはなかつた。
日本では離婚と同時に妻は失業するのである。何となれば彼女の生活資料は「結婚」といふもの以外に何もないからである。換言すれば生活の本據が「結婚」である。民法ではどうの戸籍ではどうのといふような論據を捜さなくとも實生活がさうなつてゐるのである。妻だけでない。娘さんの浪人もある。これから澤山にできる。花のような美しい浪人さんもあつてほしい。
何でもいゝ。モガの次には女浪人時代だ。私たちの仲間がふえるのである。お互に賑やかに暮しませう。(九月二十五日)



ある日

一木公子

冷やかな朝である、絹のドレスでは肌さむい、上着をひつかけて庭に出る。鉢植のまさ木の葉に一ぱい白い虫の卵がついで居る。筆の先ではらひ落して居ると、苦力がやつて來て指でゴシ〳〵こする。その位の勇氣があるなら、この間からついて居たの故、サッサとはらへば良いのに、虫の卵でも、枯れ枝でも、腐つた花でも、自發的には、手を出さない骨おしみなのか、命令を待つのか、どうも彼れ等の心理が分らない。
コスモス、鷄頭、そのほかの草花が、のびられるだけのびて、道も無いまではびこつたのは氣持が良い。おしろいの花が、まだ充分花は咲きながら、澤山の種を持つて居るのも、多産でありながら、水々した、元氣な、女の人を想像してほゝえまれる。
ほうづきは赤くなつた。日本には澤山あるにはきまつて居るけれ

ど、大切にして、美いちやんに送ろうと思ふ。去年たつた一つのほうづきが、心なしの苦力のために、泥だらけにされたとて、泣いたのだもの。だが、この種を來年の春蒔いても、花の咲くころを、見ることが出來るだろうかしら。年々の動亂、また逃げ出すことがありやあしないかしら。種を異國の土に蒔いて、花を咲かせることを、三たび繰りかへしてゐるが、われわれが、たづさわる對支の事業は、芽ばえのみで、花も咲かなければ實もならない。芽ばえのまゝで腐つて仕舞ふのじやあないかと、種を見ながら、憂鬱になる。

芭蕉の葉が、廣がるだけ廣がつた。ほんとうに、のびのびした氣持にながめられるが、部屋にはいつて新聞を讀むとアカシヤの枝がおひかぶさつて欝陶しい。譯の分らないものに、物をいひつける位面倒臭いことはないが、仕方が無いから差圖すると、梯子を持つて來て、鉈刀で剪り落とす。なか／＼勇敢にやる。ふだんは高いところへ手も延ばさないのに、これも支那人の、心理かも知れない。

枝をはらつたお蔭で、秋の日がやわらかにさし入る。なつめの實がうれて、ばら／＼落ちる。啄木鳥が來てコツ／＼樹をたゝく。靜かな眞晝だ。ゴルフ場へ迎へにいつた運轉手が、隣家の運轉手に頼まれ地酒を買ひこんで、自働車にかくして持つて來るのを城門で見つかつた。酒は取り上げられるし、主人には、面子不好看としかられてゐた。

しかし、こんなことは何處の國でも彼らの仲間には、ありがちのこと、それより、品物を取り上げた上に税金を取る、役人こそ、不都合だと、私はいきまく。

「支那は遅れて居るよ」

「日本だつて、五六十年前までは同じですよ、江戸市中にも木戸があつたり、國境に關所があつたり」

「なんだつて、支那は野ばんだよ」

と主人は例の優越感で片づける

「不平等で、苦しんだ昔もある日本だのに、ゑらさうにばかりしないで、少しは同情してやつたらいゝ」

また、こんなことで、秋の日の靜寂をやぶる。

知足不知足之室

二三の知人と、ある有名な日本人の骨董店にゆく。店の埴輪、明の青磁、何々の佛像、何々の玉、何々の皿、私にはまだそれを玩味する趣味も資格も無い。たゞ、はあ、はあ、と聞いて居るだけのもの、二萬圓の翡翠、十カラツトの金剛石、聞いたわが耳をうたがふのみだ。一つの指輪を手に取つて見た。瞬間、この間なにかの雜誌で「世に貧乏を知らない人」といふ言葉が、頭の底にのこつて居たのがふつと出て來たので、手を引き込ませた。これを買ふだけのお金があれば幾人かの人才を造ることが出來るんだなあとつく／＼考へた。ふと、入口に揭つて居る扁額に目をやると、

『知足不知足之室』としてある。

まあ、なんといふ皮肉な言葉だらう。

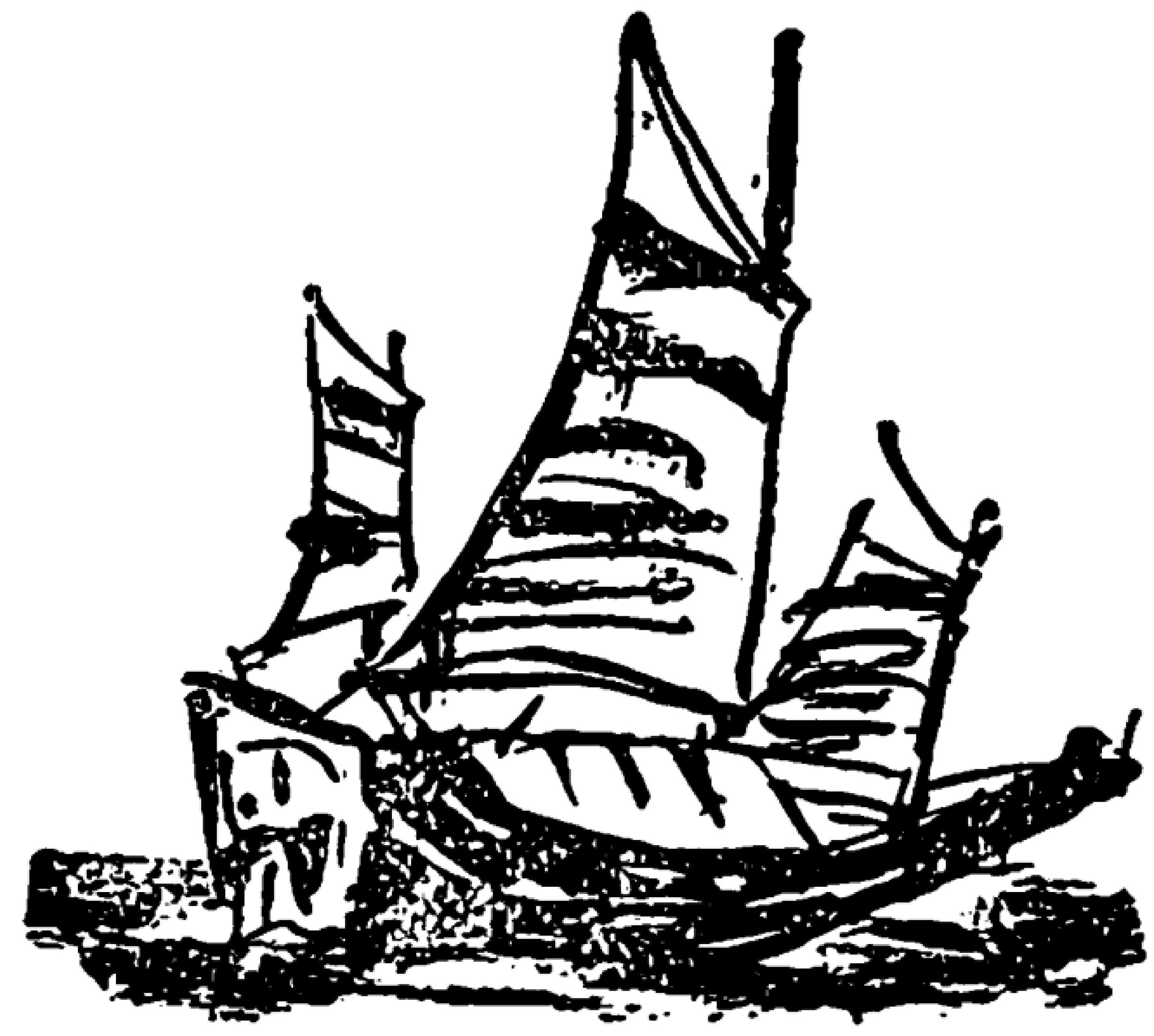
店の主人は言つた。

「どうでも良いと言ふことでせう」

お買ひになつても、ならなくつても、といふ意味合ひに言つた。

筆者は、どういふ意味で書いたのか——小さい時よく祖母から、足るを知れよと、言はれたことを、覺えて居る。

この場合どうしても私の氣持は、この言葉が教訓めいて讀まれた、



長流記（その四）

山田邦子

郊外のミスRの家から、驚いたやうにして出て來た大谷氏を

「一寸外に出てみませんか」

といふ何氣ない言葉と、白雹をふくんだ雲のやうな氣はひを負ふた佐千子の言葉に、ニコ〳〵笑ひながらも、したゝかに動揺を感じてゐる大谷氏は素直に佐千子の言葉に從つて外に出た。痩せた西洋婦人は門にまで出て來て心配さうに二人を見送つてゐる。

二人は漩谷から冬の玉川の廣い河原に出た。河原は白けて廣く遠く見渡す事が出來た、冬の水が冷く白く流れ走つてゐるのみで人の影も見えない、その河原の一ところに二人は腰をおろした。少しの間は互に言ふ言葉も分らないといふ沈默が續いたが佐千子がまづ押し出されたやうに口を切つた。

「あなたは結婚なさつたさうですね」

「エ、……水島秋子と結婚しました」

大谷氏の調子にはいどむやうな處があつた。水島秋子といふ名は佐千子の全く知らぬ名であつた。

「貴女は僕のかうした結婚を承知したではありませんか、僕は貴女を待つてゐたのに……」

大谷氏はもうどうしても此女に負けてはならないといふ強い〳〵調子があつたが、其強さもともすればホロ〳〵と崩れて仕舞相な自分の心を我とはげます樣な自己への挑戰である事がよくわかつた。

「それは勿論私は今だつて結婚するつもりはありません、誰れとも……でも外の方と結婚するといふのに一言位私に言つて下さつてもよかつたんです、私はそれが心外です」

佐千子はもう充分大谷氏の心を摑んでしまつた心安さがあつて思ひ切つて手きびしい調子を出してゐた。二人の話が右に折れ左に曲つてゐるうちに大谷氏はふと言葉を止めて

「では貴女は僕を今でも思つてゐてくれるの？」

と眞險な調子で佐千子の瞳の底をのぞきこんだ、其時佐千子の瞳から理由のわからぬ涙が止めどもなく流れ流れて頬を濡すのであつた‥‥初蔡の丘で大谷氏を振り切つた時からみれば佐千子の心も實世間といふものにふれて人の誠の有難さ尊さといふものが身にしみるやうになつてゐた。それだけ戰ひ疲れて來た佐千子の心持が瞬間的にも大谷氏の僞のない情熱にかきゆすられたのであつた。

大谷氏は突然思ひつめたやうに佐千子の手をしつかりと握つて

「行かう！　二人で滿洲の方へ‥‥」

涙がハラ〳〵と河原の砂にこぼれた。佐千子は物に襲はれたやうに胸を轟かせながら

「あなたはまあ‥‥結婚した人ではありませんか」

「結婚式はあげたけれど秋さんとはまだ床を偕にしてゐない‥‥」

さう言つて大谷氏は又はげしく泣いた。‥‥此床を偕にしてゐないは、新約聖書の馬太傳一章にある。

それはイエスキリストの生れ給へる事左の如しその母マリアはヨセフと聘定を爲せるのみにて未だ偕にならざりしとき聖靈に感じて孕み、」云々‥‥又「家子の生るゝまで牀を同にせざりき」云々のそれであつた。

大谷氏は一刹那前後を忘れて彼の女と共に滿洲の奧にでも地獄の底にでも落ちて行かうと無分別になつた心も、刹那を越えれば人間として如何になんでも其道はとりかねる理性が目ざめて來て、自分の結婚が戀愛結婚でも何んでもなく嚴格な學校の校長が仲人で式をあげて三日目に用事が出來て出て來た自分であつた事を思ひかへしたのであつた。二人は激しい涙に身も世も忘れたやうに暫くは泣いた。そして涙の中からもう此上はお互の運命を尊重して二人は兄妹とも思つて末長く力になり合をふといふやうな、實行出來さうもない約束をして互に心の興奮を落付た。遠く河下の方を騎兵隊の一行が馬を河に乘り入れて水煙をたてながら向側に上つて河原を横ぎつてゐた。足元の母子草が風にこはばつた莖ばかりをゆすつてゐた。

その日の午後佐千子はいつもの通り新聞社に出勤した。埃つぽい編輯室は相變らず雜然として、第一版の〆切時間に近い頃なので人人は冗談を言ひながらもいそがしさうに筆を走らせ給仕を呼びたてて原稿を渡したり、校正係は四角い煙突のやうな穴から下の工場の職工と互に惡口を言ひ合ひながら赤い線を縦横無盡に引いたゲラ刷り原稿をろくろのやうな綱で下におろしては又引上げてゐた。

佐千子は編輯室の一番奧の右側の隅の窓の方へ向けてある自分の

机に行つて腰をおろさうとした時、どうしたはづみか自分の後ろに横向きに机をおいてある社會部のBといふ記者の二つ並べておいた椅子を少しずらしてしまつた。此社會記者は當時淋病にかゝつて四角な手さげカバンに脫脂綿と藥を入れて通勤して來るのでみなにからかはれてゐたが其頃病氣が重つて發　してゐたので仕事も出來ない有様であつたが、家に居ると借金とりが來るといふので社に出て來て椅子を二つ並べておいて時々其椅子の上に横になるのであつたが、何か腹を立てゝゐた處と見えて佐千子の椅子が少し其椅子にさはつて並べた椅子の位置が狂つたばかりでひどく大きな舌うちをして荒々しく椅子の位置をなほした。

佐千子の眼の底にはまだ涙の乾かぬ悲しさが殘つてゐた。自分はさら／＼大谷氏をいま一度自分の方に引もどしたい未練が殘つてゐるのではない、唯自分に無斷で一歩先んじられたのが無暗に腹が立つて今朝の如き行動に出たのだつたが、大谷氏の誠ある戀愛の深い心を知つて滿足すると共に別れて再び自分一人の生活に歸つた自分の姿が限りなくあはれに寂しく物悲しく、押せば倒れるやうな心持で居た折からなので佐千子の頰にはもう涙が流れて來た、佐千子はあはてゝ電話室のなかにとび込むとそこでしばらく顏に袖をあてゝ忍び泣きをした。

「長田さん、長田さん」

社會部長のいつもの冷かな聲が用ありげに電話室まで聞ゑて來た。佐千子ははつとして大いそぎに涙を拭くと、まだコンパクトなどはないころで四角な懷中鏡に顏をうつしてみると目のあたりが赤いので困りはてたがでも仕方ないのでうつむいて部長の椅子のそばに立つた……部長は誰れかの原稿をいそがしさうに讀んでゐたが用事を言ふ爲に顏をあげるとそこに佐千子の目のあたりを赤くした顏を見て吃驚したやうに鐵ぶちの眼鏡の奥の小さい目をみはつた。

「どうした!!」

其聲は日頃皮肉屋で通つてゐる部長の聲とも思へぬなさけある聲であつた。佐千子の涙の乾いてこはばつてゆく顏に笑ひが不器用に通りすぎた。

「どうした？　エ」

二度三度部長は追窮して來たけれど、佐千子には答へる答もなかつた……それから半月ばかりすると例の淋病の社會記者は佐千子にむかつて

「長田さん貴女のやうに身だしなみのよい婦人を僕は見た事がない、貴女の足袋はいつでもきれいにしてありますね」

とさも感心したやうに大聲で言ひ出した、佐千子はあまりの突然なしかも意外な讃辭に全く狼狽して此間あんなに當りちらした人が何の理由で……と笑へもしなかつたが、此記者が社會部長の腰巾着と評されてゐる事に思ひ當つてやがて佐千子は心で笑つた。

「淋病記者め、部長に叱られたな。」

佐千子は眞面目に結婚といふ事を考へはじめた。…がいよ〳〵自分がその氣になつても自分の一生を托さうといふ人はさう早速にあるものでない事をやつと氣がついた。

或る知人が彼の女を招んで彼の女と同社の社會部の記者で、美貌を以て鳴らしてゐるCといふ者に彼の女への緣談を賴まれたと言つた。此緣談は佐千子は何の苦もなく斷つてしまつた。大谷氏に美貌のない事が佐千子を結婚に進ませなかつた一つの理由ではあつたが、C記者の美貌は又反對に佐千子を結婚に進ませない理由であつた。…白の絹編の襟卷などして髮を光らせ金ぶちの眼鏡をかけた面長の顏は輝くばかり美しく役者のやうな感があつた。がさうした美しさは佐千子の心をひかなかつた。役者などならいざ知らず男のくせに身づくろひにあくせくとして自分の美を認められたいやうな男には男らしい賴もしさがなかつた。佐千子はさうした美を男から求めては居なかつた。

頭の禿げかゝつた××大臣の秘書官があつた。妻に死なれて子供が一人あつた。佐千子に特別な好意を示してゐる事は佐千子は感付いてゐた。或る時夕食に誘はれて行つた京都料理の靜かな家で結婚の申込を受けた。これも佐千子は難なく斷つた。若く希望に燃えてゐる身には、戰ひ疲れてもまだ頭の禿げかけた夫に仕え子供のある家に自分を納めやうとは思はない…どんなにお金があつても、學位があつても…其時代の若い女性の心は多く之であつたと言へる。

佐千子と同國の先輩作家であるT先生から佐千子に一寸賴みたい事があるから遊びながら來るやうにといふハガキが屆いたので其定められた日に佐千子は社の歸りをT先生の家にまはつた。

T先生の處には來客があつて笑聲が聞えてゐた。かまはないから二階へと言ふので急なはしごだんを昇つてゆくと先生は座敷のなかから聲をかけた。

「長田さん、さあこちらへ」

見るとそこには中肥りのした顏だての立派な青年紳士が何か先生と笑ひながら話してゐた。すゝめられた座ぶとんを敷いて席がきまると先生はあらためて、

「これが有名なH君ですよ」

さう言つて先生は佐千子に青年紳士を紹介した。其刹那佐千子は自分の身なりや髮の結ひやうなどが口惜い程氣にかゝつた。

當時日本の詩壇を風靡して天下に名を轟かしてゐる青年詩人H氏の前に偶然とは言へ出るにはあまりに不用意の自分の風采ではなかつたか…。

佐千子は一かどの詩人になりたい志をもつて親の家を無斷で出て來た時着のみ着のまゝで、唯邪宗門とか廢園とか、花守、二十八宿といふやうな愛讀の詩集を五六冊ふろしき包みにして、歯みがきと楊子の外には櫛一枚持たないで飄然と未知の東京へ出て來た程世間

知らずの空想多い女性であつた。婦人記者の職を得てからも薄給な佐千子はお召とか縮緬とかの着物を買ふ餘裕は勿論なかつたし、一つには其頃の佐千子は天ばかり見つめて歩いてゐたやうなもので本さへ讀んでゐれば自分が流行におくれて居やうと冬の着物を裏をはいで夏に着やうとそんな事はさして自分をなやまして來ない現實ばなれのした心持であつた――それは今から十五年程前の時代の事で其頃文學をやらうなどいふ若い女性のなかにはかうした女性がまゝあつたのである――。それで佐千子もさうした事では人々も呆れる程平氣で羽織を着物に直したり寒くなつてもショールをかけなかつたりしてゐた者であつたが、此時ばかりは、此青年詩人に逢つた時ばかりは佐千子はハッと自分の身を返り見て、自分の持つてゐるどの着物もが自分の姿を思ひのまゝに美しくする事は難かし相に思へてしばし心が寂しくなつた。その上に一日外を歩き廻つた出勤がへりの髪は亂れてハラ〳〵と顏にかゝつてゐるのも氣にかゝつた。

「君、どう？」

詩人はほがらかな笑顏をして何かスケッチのやうなものを書いてT先生に示した。

「フム、似てゐるね」さう言つてT先生は佐千子の方をヂロリ見た。

「今度は君をかく」

詩人は更に何か書いて先生に示した。先生はそれを見て

「君、これはひどいよ、これが僕かい、まるでとりかぶとの花みたいだ」さう言つて二人は大聲で笑つた。

佐千子が詩人の描いた漫畫風のものを見た時そこに瞳に特色のある自分の顏が描かれてあり顏にハラ〳〵と前髪がかゝつてゐる處がちやんと描いてあるのでひそかに赤くなつた。其時そこで其詩人に逢つたきり佐千子は結婚後まで其詩人に逢ふ機會は全くなかつたのであつた。結婚後幾年もたつてから佐千子は思ひがけぬ人から思ひがけぬ事を聞いた。佐千子とH君とが結婚するはづであつたがどうしたのか止めになつたといふが其理由を聞せろといふのであつた。佐千子はたつた一度逢つた事のあるきりであつた詩人H氏を心に思ひ浮べて夢にもそんな事は知らないと答へて不思議がつた。

「火のない處に煙はたゝぬと言ふけれど噂といふものは火のない處からも煙をあげるのね」かう言つて彼の女は笑つたのであつた。

其後文士や畫家で毎月集る會があつて、そこで佐千子は何年ぶりかで其詩人に出會つた事があつた、偶然二人の席は並んでゐた、會が酣になつて各自まわりの人と勝手な話に花の咲く頃になつて、どこか世なれて來た佐千子は薄い笑を頰のあたりに見せながら

「Hさん私は曾てほんとに不思議な事を聞きましたの、貴君と私と結婚するはづであつたなんて‥‥」

佐千子はH氏がさぞ驚きの表情をして笑ふ事と思つてゐると

「それはほんとうですよ、‥‥でも貴女は厭だと言つたさうじやないの？」

詩人は立派な顔に鷹揚な笑を浮べてお酒の爲に少し顏を赤くして言つてゐた。佐千子は其時全く思ひがけない驚きに心をうたれて其事が自分をからかふ爲に言はれた事かとも思つてみた。

「からかうものですか、二人は見合をしたじやないのT君の家で………」

そこで佐千子は全く過去の下ずみになつてゐた其時の思出がはつきりと心の表面に浮び上つて來た…あれは見合だつたのか、T先生もお人がわるい、天下の詩人と見合をさせるといふのに一寸用事があるなんて私を丸きりふだん着のまゝで…それにしても私が厭だと言つたといふのはどうした譯だろう。…そこで佐千子は解らなくなつてしまつた。それは佐千子は自分の性格を思つて氣むづかしい藝術家と結婚して夫のお守をして暮すやうな事は自分には出來さうもない、むしろ自分はお守をされる方の性格だから…と考へ人にも言つてゐたけれど、あの時詩人H氏に結婚の申込を受けたとすれば自分は喜んでそれを承知したゞろうと思つた。然し佐千子は其事を追窮して考へる今の身でもない事を思つた。

「でも貴君は氣むづかしいでせう、私ではとてもおさまりませんでしたよ」

僕は氣むづかしくはありませんよ細君を愛しますよ」

そこで二人は笑ひ合つた。

「一つ握手をしませう」

二人は明るい心で明るい灯の下で人々に隱す慮もない心持で輕く握手をして乾盃した。

また外に、さる名高い家の令息が佐千子に思ひをかけて、あの人を貰つてくれなければ、と三日三夜さ拗ねたけれど周圍が六つかしい名家で止めになつたといふ事を佐千子が結婚してから後ホッとしたやうな世間がおもひがけないじぶんに佐千子の耳へ噂事を風の如く吹きまはして來たりした。

かうして佐千子の緣談は知れて來るもの又知れて來ない程度で其まゝ去つてしまふもの、かずくは渦をなしてだんく佐千子を取り卷いて來た…。社の二階の編輯室にのぼる階段の左側に、いつも山のやうな新聞紙の屑に埋められて、後鉢卷の双肌ぬぎで多くの配達を指揮してゐる配達部長の青年が、時々編輯室に上つて來て

「僕あ來年は明大を受ける…」

と明大々々を繰返す意味も佐千子には解せられるものであつた。筑前琵琶を少しばかり彈く區役所の書記である下宿の小母さんの家に來る青年は、貧弱な身體に長いマントを着てやつて來てはお茶の間でしきりにベランくと琵琶を彈いて小母さんに聞せたが、此ベランくにも意味のある事を佐千子は知つて心で苦笑してゐた。

下宿の小母さんはいつも無邪氣で深切で時々はしみぐと

「長田さん、あなたは今八重櫻の盛といふ處ですよ、盛のすぎないうちに結婚なさいましよ」…と親身の調子で言つた。

『女人藝術』關西訪問

望月百合子



倍田ちか子

知識と藝術の處女地大阪に女人藝術の根を張るべくその宣傳に行くことになつた。一行は時雨女史さゝきふさ子女史、長谷川春子女史に私の四人。

東京をたつ時はしぐれてゐた。元氣な仕事の爲の旅ながら、心の底までもしみ透るわびしい秋雨にともすれば故もない哀愁がわく。めざめがちの汽車の夜の長さ、ただ吐息ばかり。

やうやく夜が明けて、ベッドが片つけられた時、空はからりと晴れて、青い空に太陽がやさしい光をいつぱいに投げかけてゐる。明け放した窓から流れ込む風の清々しい感觸まあよかつたと誰もの目が微笑む。

大阪に着くと　高橋鈴子さんが驛に待つてゐて下さつた。一行はまづ堂ビルホテルに落つく。お正午までぐつすりの豫定だつたのが、電話をかけるやら、電報を打つやらで、時雨女史もさゝきふさ子女史も、ねむたさうなお顔なんか秋風に吹きやつておしまひになつた。ふさ子女史の素敵な電話係りぶり。迚も簡潔で要領を得て而もユーモアたつぷりなので、何んでも電話と言へばふさ子女史をわずらはす。春子孃は電報係りやら、手紙係りに、迚もお元氣で活躍なさる。

八階の窓からは大阪中が一目に見わたせる。中ノ島公園をめぐる大川の美しいこと、その川の兩側に立ち並ぶ大小のビルデイングの素晴らしいこと、いかにも大都會らしい風貌だ。煤煙の都もさすがに秋、紺碧の地に胡粉をさつと刷きかけたやうな空が見える。そしてそこから、今日初めて倍率制が實施されるため、その宣傳ビラらしいものが、粉雪のやうに、チラ〳〵銀色に光り乍ら、ひつきりなしに舞ひ下りてくる。

午後、勢揃ひして、後援して頂く筈の大阪毎日新聞社に行く。一行に大阪の名物婦人北村兼子女史が、ピンク色の洋裝も輕やかに加はる。大毎の婦人室で、サンデー毎日の渡邊均氏のお世話で、ビラ撒きの許可を得る警察への屆出などをしてゐる間に、私達の仕事を助けて下さる爲に、自用の自動車までかして下された住吉の吉田光子孃白木屋婦人小供洋服部の小西ゆふ子女史や、増田喜久子夫人が深紅のコスモスのやうに美はしい敏子富美子の二令孃を伴つて來て下さる。それに北野氏社中の星加雪乃孃も加つて、一行がビラを抱えて街頭に出たのは夕方に近いころ。まづ阪急、阪神の二停車場前から撒き始める。街上の好奇心がさつと集る。けれど、藝術に興味を持つてゐさうな人や、男女學生を撰らうとすれば、仲々に乏しい。時雨女史は、大阪の若い方達に理解と同情とを持つて欲しいと思つてゐられるのに。先方からわざ〳〵近よつて手を出してくれるやうな人達は皆、藝術なんかにはちつとも關心を持ちさうもない貧しげなおぢいさんばかり、やゝぢれつたくなる。

『こゝで撒いちやいかんッ！』と下つぱの驛員が横柄に手を振り乍ら鳥でも追ふやうな格恰をする。

『だつて驛の構内でなけやいいでせう』、と言ふと、『驛の構內は電車通りまでだ』と天下の公道までも我もの顏にそりかへる。災ひな



左より高橋鈴子、松見菊枝、増田政子、江口章子、北村兼子、星加雪乃、長谷川春子、望月百合子、ささき・ふさ、の諸女史——大阪堂ビルホテルにて

るかな赤鬼、青鬼、こんな時にこそと、日頃の卑屈の欝憤を晴らすために、權限以上の權威を振りまわす。淺ましくも哀れである。かまわず勇敢にビラを撒く。通りすがる自動車や、電車の中からも手を出す人がある。その人の顔に少しでもアンテレクチュアルな光が仄見える時、私達は迚も元氣づく。そこから三越の前に行く。こゝではさすがにビラを貰つて頂きたいやうな若い美しい婦人達が多い。けれど此處でもまた、店の前では困ると、玄關番の青鬼子が言ふ。客とみればたとへ素見客にでも、萬引子にでも平身低頭する彼等が、いま一文の得もとれない吾等と見て、横柄な口を利く。

やがて天滿驛に向ふべく、その附近で一人ビラを撒いてゐられる時雨女史を探しに、自動車で三越の周圍をまわる。丁度三越の横で女史を見付けたので、一寸自動車を止めると、忽ち鍮馗さんのやうなお巡りさんが飛んで來た。

『おいこらつ！何んでこんなとこへ車を止めたつ！』といふ調子で運轉手を叱り飛ばし始めた。その語調、その顔、その權幕、まるで不倶戴天の敵にでもめぐり合つたやうだ。私達は全く呆然としてその鍮馗さんの血走つた切れの長い、世にも憎々しい目をみつめた。

『下りろッ！下りろッ！』と引づり下ろさんばかりの權幕だが、のれんに腕押し然と運轉手は只默つて頭を下げてゐるばかりだ。こんな時、强盜よりも、殺人鬼よりも憎々しいこの小鬼奴の横つつらをぴしやり！と私達なら思ふ處だけれど、やつぱり大阪人の運轉手さんは利口だ。そのおかげで

『以後、氣をつけいッ！』といふ怒號で、お巡りさんは意氣揚々と引上げて行つて、私達も無事に目的地に走ることができた。だがこのお巡りさんの顔は、現實の世界でみることの出來る、どの惡人の顔よりも恐らしく私達の印象に殘つた。もつと優しく親切に注意した方が、却つて效果があつただらうに。そして世間はお巡りさんと

言へば、人民保護の親切な顔を思ひ浮べるのに、これはまた何んとした錯誤であらうか？

天滿驛では、丁度ラッシュアワのことゝて、迚も澤山な人。忽ち抱えてゐたビラが無くなつてしまふ。やはり一番氣持ちのいいのは若い男女の學生さんたち。中にはわざとすまして、せつかく差出すビラに輕蔑と要心の一瞥をくれて、通りすぎてしまふ女學生もあつたけれど、その人の心が思ひやられて哀れまれた。

日がくれて、大毎に引上げた時一萬枚餘りのビラを撒いてしまつたのであつた。

それから引つゞいてサンデー毎日の座談會。伊藤金次郎さんを向ふにまはわして、時雨女史と春子さんが迚も勇敢に遠征ぶりを發揮する。例へば、強い野分にも耐えがたい風情の時雨女史のしつかりした新らしい女性觀のお話、春子さんの機智縱橫な質問の矢など。この夜の記事はサンデー毎日に讓る。出席者はサンデー毎日の伊藤金次郎氏、渡邊均氏、大竹憲太郎氏、これに北村兼子氏、高橋きみ子氏、江口章子夫人、時雨女史、さゝきふさ子女史長谷川春子氏に私。

ともかく、只おやさしいとのみ思はれてゐた時雨女史から、婦人運動の先驅者を以て自任する人々よりも進んだ理解と圓みとに滿ちた女性觀を承つたことは、餘りにも嬉しいことの限りであつた。

座談會が果てゝから、心齋橋から道頓堀筋を散歩する。丁度、芝居のハネ時で、街はいつぱいの人。櫓のある劇場の建物が、珍らしくもなつかしい。カフエーからはひつきりなしに浮々とするジャズが流れ出してくる。街の上に張りわされた旗と、そのざわめきに、どこか支那の街を歩いてゐるやうな氣分になる

かくて大阪の第一日は果てた。

第二日目は早朝からめざめた。夜半過ぎても、電車、自動車の轟きはひつきりなしに複雜なジャズを奏でる。まるで雷鳴のやうで眠むることも出來ない。やうやくその音が少し靜まつたと思ふ間もなく、また夜明まへから大都會のジャズの奏樂は始つた。めがさめても頭の中はぼんやりして只ヅキヅキ痛むばかり。

春子さんは今日の午後の、お茶の會にお招びする人々に手紙を書いて、それを御自身で配達して廻るために朝早くから自動車で出かけられる。時雨女史の處には朝から、新聞や雜誌方面の訪問客がつめかけてゐる。お寢坊で聞えた女史がこの日ばかりは一行の誰よりも早くからきちんと身じまひをしてゐられたにはびつくりさせられた。

お正午にはホテルの食堂で大阪演劇聯盟の樋口氏と北村さんとをお招びし、午後二時からはやはりホテルの廣間で『女人藝術』の茶話會を開らいた。この日、江口章子さんの夫君が　僧形で出席されたのは一異彩であつた。そしてこの坊樣は私達一行のしやん〱した洋服姿を見て一驚したが、段々にお轉婆でないことが分つて安心した、と苦々しい坊樣らしい豐かな双頬をくづしていかにも愉快げに笑はれた。時雨女史は、「常識を持ちすぎる程持つての上のきび〱しさ、快活さなのです。決して考へなしの跳ねかへりではないんです」と、女史のはつきりした女性觀を話される。

テエブルの周圍には、各新聞社の方達や、雜誌社の方達や、昨日ビラ撒きに應援して下さつた方達が集る。只こゝに增田夫人とその美はしい二令孃と、小西ゆふ子女史が急な御用事の爲に（大朝の恩田和子女史は社用で　畫家の生田花朝女史は帝展締切りで、吉岡千種女史は其の夜東京へ向はれるのでそれに高安やす子夫人も出京されてゐたので）御出席にならなかつたことをかへす〲も殘念に思ふ。

時雨女史と春子さんの打解けたお接待で、初對面の人々とは思はれない程くつろいだテイパアテイ

が開かれた。この時、些の疲勞の色さへ見せず、縱横に快辯を振ふ時雨女史を感嘆したのは啻に江口章子夫人のみではない。私達一行が皆心から嬉しくも心强く感じた處であつた。

新聞社の方達の寫眞を撮して夕ぐれに散會した。

それからすぐビラ撒きに自動車を走らせた。今日は昨夜の散歩からの思ひつきで、心齋橋から千日前、道頓堀方面に撒く豫定。けれど心齋橋筋は警察で許したくないとかで、難波驛を中心に撒くことになつた。

今日は大阪の中心地のことゝて街上の人人も昨日とは大變異つてゐた、唯一人も免さずビラを貰つて頂きたいやうな人達ばかり。けれど、傍まで來て、わざ〳〵身を避けて、ビラに妙な一瞥を與へて過ぎるやうな若い女が幾人かあつたこと、美しい藝妓はんが一人なし、微笑しながら貰つて行つたこと、そして中には會釋しながら貰つて行くつゝましやかな婦人があつたこと、ビラを撒き乍ら何人といふ人に一々接してみて、いろ〳〵なことを感じさせられたり、考へさせられたりした。

道頓堀では知つてゐる幾人かに會つた。時雨女史の愛讀者の幾人かは名刺を出して、なつかしげに時雨女史に挨拶した。そして劇場からは入り代り立ち代り、時雨女史を見に飛び出して來た。『こゝにお金を送ればよろしうおまつか?』なとゝ、ビラに刷込んである女人藝術のアドレスを指して問ひかける若い芝居茶屋の女中さんもあつた。

こゝは本當は警察で許したくなかつた場所だつたので、角々にゐるお巡りさんの嚴しい目にふれないやうにしなければならない。お互にお巡りさんよ、交番よ、と聲告し合ひ乍ら、町の角から角までの間を流し乍ら撒いた。ある町角の交番の前に來たとき、それと氣がついはゐたのだけれど、群衆がが方々にから手を出すのでつひビラを渡してゐると、案の定『こゝでそんなものを撒いちやいかん!』と怒鳴られた『でも島の内署の許可を得てゐます』と言ふと、『こゝは島の内署の管轄ぢやないつ』と大した權幕、時雨女史が『まあこれを御覽下さい』とそのお巡りさんに一枚のビラをつき出すと、お巡りさんも煙たそうな顏をしてもぢもぢしてしまつた。その隙に私達は完全に隣りの難波署の管轄地内に入り込んでしまつた。

『最後の一枚は女の人に!』と思ひ通り、最後の一枚を若い女の人に渡して、大喜びで難波驛に引きかへした。こゝで勢揃ひして、ビラ撒きに應援して下さつた江口さん、星加さん、高橋さん、北村さんへのお禮の挨拶に代へて、心齋橋北詰のつる源といふ粋な料理屋に行く。打水した飛び石のすがすがしさ、東京をたつてから始めて踏む感覺で、ひどく嬉しかつた。玄關を上ると、そこの狹い小ぎれいな日本間に籐製の卓子と倚子が備えられてゐるのには、思ひがけない處で、思ひがけないものを見るやうでびつくりした　座敷に通ると、春子さんが、大阪で一番おいしいものを食べさせてくれと注文を出した。そしてお酒をきくと丸髷の美しい女中さんが『さくら』があるといふ。そんなのぢやなくてもつといいのをと言ふと、『そんならウイスキーを持つてまゐりませうか』と言はれて、さすがの春子さんも『あらそんなのぢや』とまゐつてしまふ、みんな笑ひ出してしまつた。ウイスキイとは興ざめた言葉だけれど、母國觀光團然とした私達一行を見て、女中さんがさう言つたのもまことに當然だ。お料理は迚もおいしかつた。

そこが濟んでホテルに歸ると、一休みする暇もなく荷物をまとめて天王寺驛に向つた。そして奈良に着いた時は夜半近くで、二十日餘りの月が澄んだ空にかゝつてゐた。車に搖られ乍らホテルに向ふ途上、寢倉に歸りそこねた鹿が、月光を浴びて芝生に休んでゐるのを見る。げにも夢幻な古都の姿である。

東京を出てから初めて、雷鳴のやうな音響から解放された。ホテルの內も外も森と靜もりかへつてゐる。たゞ蟲の聲がかすかに聞えるばかり。失つた自分を取り戾したやうな喜びがわく。

かくて智的藝術的處女地たる大阪へ根を下ろさうとする女人藝術の宣傳の二日間は、三萬枚のビラと共に完全に果された。

翌朝、目がさめた時、降るか降らないかのやうな秋雨に、庭の小石は洗はれ、松はしたたるやうな綠葉の先から水晶の玉を散らしてゐた。興福寺の五重の塔も、若草山も、うすぎぬを被いだやうに模糊として夢の世界のやうだ。雨の小やみを見て、間近な博物館に行く。玄關わきの松の木の下で、牡鹿が二頭、角つき合つて爭つてゐた。今は牡鹿が一番氣が荒い時期とか。

『ほんとうに角つき合ひをするんだわね』と時雨女史が感心して見てゐられる。博物館から東大寺に行くと、鏡池のほとりに、初紅葉がういういしい姿を水に映してゐる。

鐘樓に登つて、大佛餅を食べて鐘をついた。そしていい氣持ちになつた。こゝには澤山の鹿が群れてゐて、頻りにおじぎをしては大佛餅やお煎餅をねだる。一つそつと抱いて行つて家の庭に飼つておきたいやうだ。お正午になつたのでホテルに歸る。

ふさ子女史と春子さんは殘つた用事の爲に再び大阪に、時雨女史と江口夫人と私とは京都に向ふことになつた。



條田ちか子

吉屋信子氏を送る一夕

八木秋子

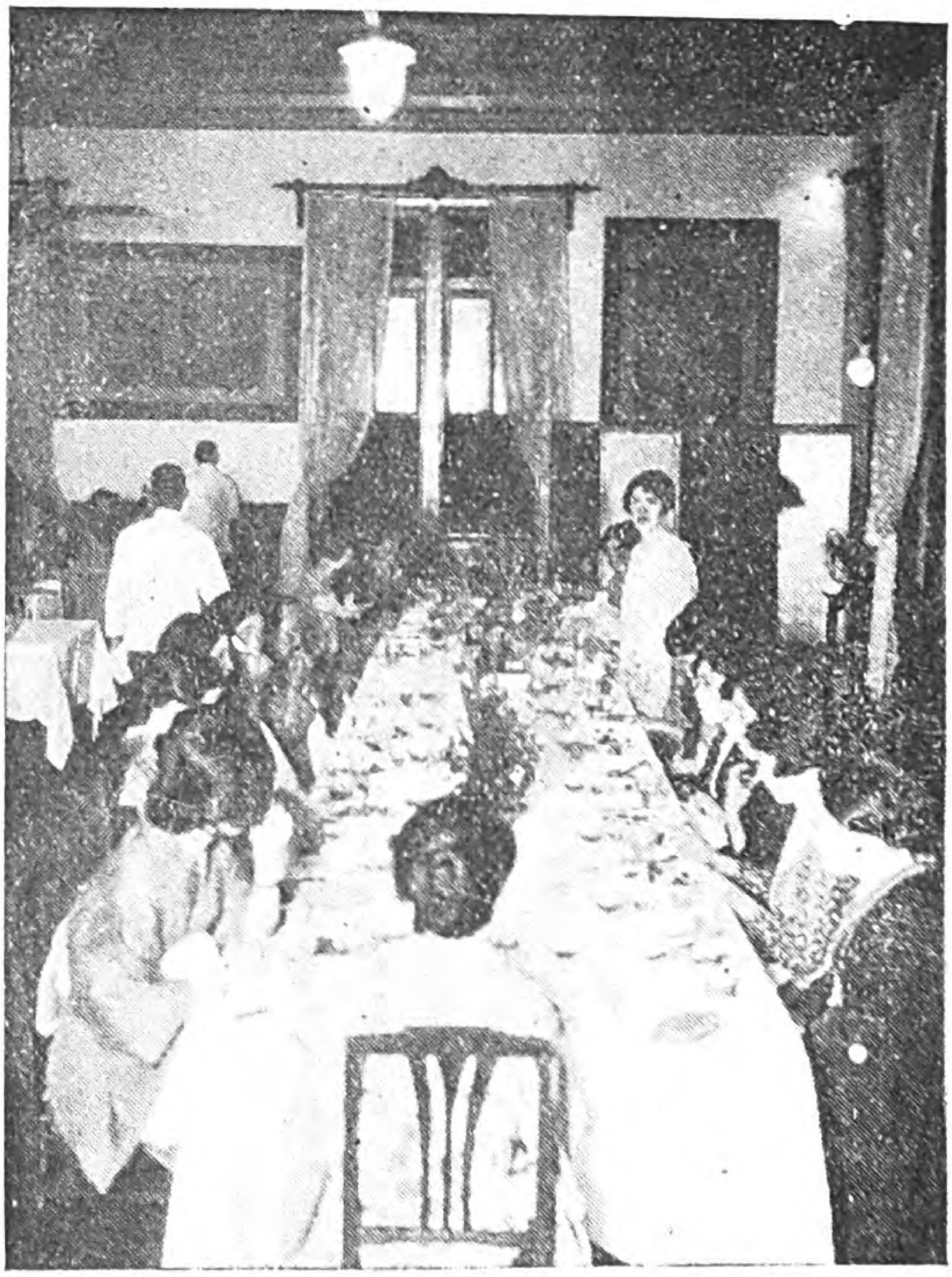
吉屋信子女史の渡佛を送る會――このつどひは女人藝術社の主催で去る九月廿日の夕、初秋の風渡る上野精養軒のホールで催された。送らるゝ吉屋女史はこの夕の主賓として珍らしくも始めての美容院行きに少し定刻を遅れて來られたが、桃色のドレスに厚化粧といふ姿で集ひ待ちわびた人々の眼を見張らせたのも、女史らしい親みで微笑を皆の顏に溢れさせた。集まる人八十人に近く、みな女史にとつて親しい面ぶればかり。文壇の誰それから音樂家、教育家を網羅して賑かな談笑のうちに開かれ、餘興として尾上菊子さんの舞ひの手振り美しい踊り『屋敷娘』あり、終つて次のやうな德富猪一郎氏の『送別の辭』があつた。ついで與謝野晶子氏は立つて吉屋女史を送る自作の歌を朗詠され、最後に聲樂家ダン道子氏は夫君の伴奏で獨唱されたがこれ等のすべては吉屋氏のために心からの贈り物であつた事は美しい限りであつた。

食堂は賑かに開かれ、長谷川時雨、生田花世兩女史の挨拶に始まりテーブルスピーチは次から次へと三宅やす子女史、沖野岩三郎氏、新居格氏、佐々木ふさ女史から小島政二郎氏、畑ちがひの教育家三輪田元道、沼田笠峯氏まで出で、吉屋女史の謝辭あり最後を今井邦子女史が結んで親しみの宴をとぢたのは十時も近い頃であつた。

その夜の顏ぶれは、文壇の德田老はじめ、三上、中村(武)山本(有)小島、新居、池谷、岡田、近藤、沖野、諸氏、片岡氏夫妻、女流側からは與謝野、三宅、佐々木、宇野、北川、眞杉、今井、水島、諸女史外、樂壇、詩壇、畫壇、教育

家各方向から、凡そ七十人餘の華やかさであつた。最後に、當夜餘興に御出演下れた諸氏及御來會の皆々様に、誌上厚く御禮申上げます。

徳富先生の辭



私が最初吉屋さんにお會ひしたのは何かの會の席上でありました。が、この最初の會見は妙なことから私に深い印象を刻みつける機緣となりまして、此來私はずつと吉屋さんとは親しい交際をつゞけ愛讀者ともなつてゐるのであります。

では、何うして最初の印象がと申しますと、私はその時吉屋さんをお呼びするのにお苗字を思ひちがへて「古屋さん」と一度ならずお呼びしたものです。すると吉屋さんは極めて明快に直截に「私は古屋ではありません、吉屋です」とはつきり訂正されました。その瞬間私はハツと思つた。そして自分ながら情けなくなつたのです。私も顧れば新聞界に身を投じて四十餘年、世界に日々起りつゝある問題に就ては一應の智識も持ち理解しつゝあるものと思つてゐましたのに、而も自分の國の女流作家、婦人界にその人ありと知られる吉屋女史のお名前を間違へてお呼びするとは、はてさて時代におくれたるもの哉とも思ひ、また一面新時代の女性に對していかにも禮を失した譯であると感じて、我ながら愛想がつき情けなく思つた。そしてこれが妙に深い印象となつて吉屋さんとは親しい交際がつゞく機緣となつたやうな次第なのであります。

今回吉屋さんは單身フランスへいかれるといふ事を聞き、私はまづ感心してしまつた一人であります。何故ならば女流作家として單身赴かれるのは私の知るところでは吉屋さんが最初の人ではありますまいか。先きには與謝野さんなどもありますがおひとりではなかつたやうに思ひます。それぱかりではない、私をして最も感心せしめたものは、吉屋さんが全くの文章のみを以て今日の名をなされ、今回も別に經濟的に人に賴らずに行かれるといふ點であります。私は自身洋行の苦い經驗を持つてをりますので――といふのは、ずつと若い頃ですがその際私は洋行費の八分を人に借り、二分を自分の金といふ鹽梅で參りまして、辛くも歸つて參りましたもの―、さあ、後始末が大變です。債鬼には責められる金はなしで漸く年附償却といふ事にして貰ひましたが、返してしまふ迄のその苦しみといふものは……何の爲で洋行などしたか

と恐ろしくなる有様でした。といふ譯で私は吉屋さんが全くの自力で洋行なさる事に就ては一層の感に堪えないものであります。

　私は旅立たれんとする吉屋さんに註文したい三つの事がある。一つはよく日本といふものを見て來て頂き度いといふこと。――フランスに行く人にこの註文は可笑しく聞えませうが、實際日本を離れゝばもう一時間と經たぬうちから不思議に今まで自分たちの住んでゐた世界がよくわかつて來るものであり、新らしい土地の生活になずめば愈ゝ解つて來るのはその國に非ずして却つて日本なのです。時代の日本、時代に生きる若き女性、さうしたものをよく觀察して來て下さい。

　第二はフランスに於ける精神文化の方面を觀て來て戴き度い、物質文明の弊害は殊に歐米に甚しく、今日ではその反動でもありませうが種々なる人の間に新らしい精神主義の運動――スピリチュアリズム――が旺になりつゝあると聞きます。フランスを知るにはあの巴里の華麗な市街や女の裝ひの美しさや、花のやうな美術家や、さうしたものだけでは足りません、フランスを造り上げてゐるものは百姓達の生活の底を流れる、敬虔なカソリックの信仰であります。で、吉屋さんも藝術ばかりでなく、さうした精神的な、宗教の方面などをも觀て來られる事をお勸めします。

　第三はあまり勉强などなさらずに、のんびり遊んでお歸りなさいといふこと。――多く古今の書を讀むといふ事は學者にこそ必要でありますが創作家にとつては何の役にも立つものではありません。却つて創作力を弱め萎縮させてしまふ毒藥とも謂へるのであります。創作家にとつては自分の作に對する自信が一番力になるもので、先人の書を多く讀めば讀むほど到底自分など追つつけるものでないと悲觀せざるを得なくなるのです。ですから書物はザツと大概に見ておいて、相變らず俺は俺の世界だといふ自負のもとにお山の大將のつもりで頑張つてこそその人の本統のよいものが生れるのですから、吉屋さんも勉强するなどといふ氣を起さずに最初は語學で苦しみ、慣れたら方々見て珍らしさや面白さの拔けないうちに大抵に切り上げて歸つておいでなさい。所詮外國などゝいふものは珍らさ以上に長くとゞまる必要のない所ですから。

　一體に吉屋さんは女性として面白い特質を持つてをられる。それは人を喰つてゐるやうでもありまた卒直とも大膽ともいはれ自由とも新鮮とも申されませう。どうかその持味を失はないやうに今のままの吉屋さんで、ざつと讀みざつと見て珍らしさの覺めないうちに切上げて歸つて來られる事を、私は希望いたすものであります。

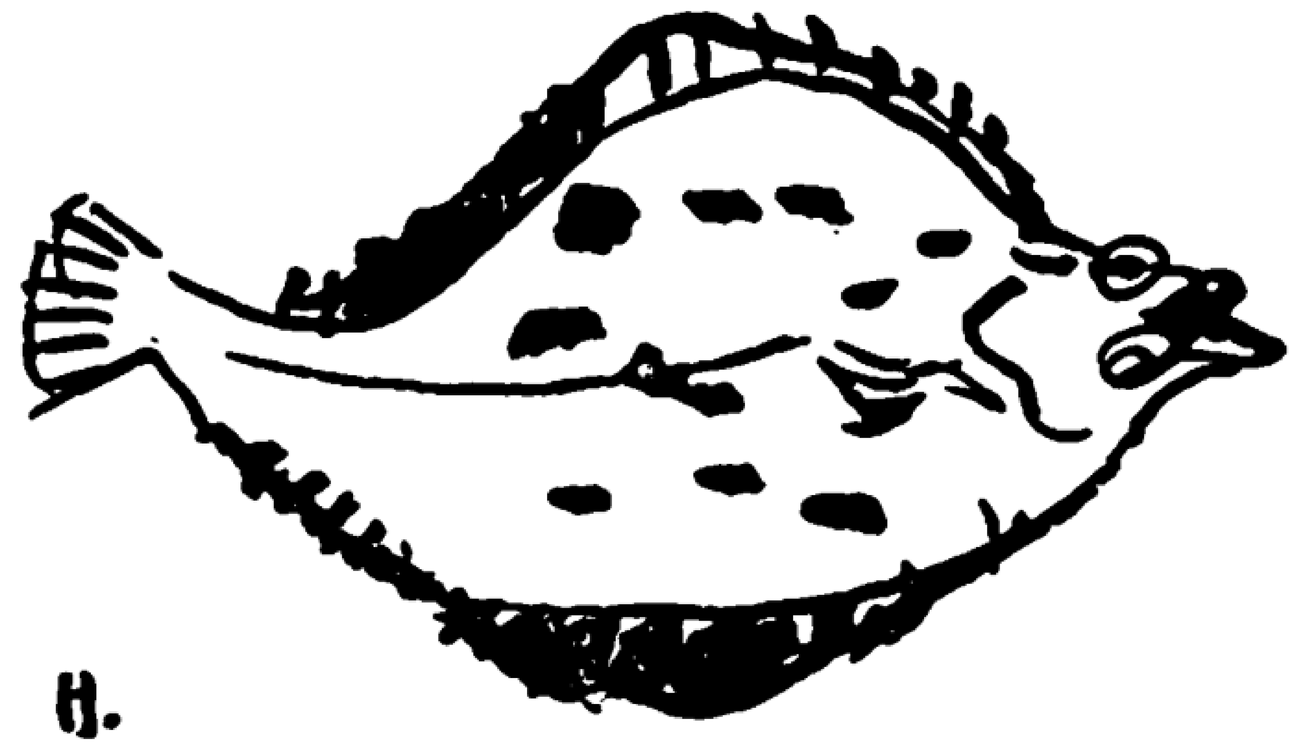
新刊紹介

『石器時代』井田秀明著

駸人社發行

小說です。作者は自ら『太古の日本人の生活を具體的に分る方法――學者の學說で確定されない以前の日本人の一土民の活歷史を創造して見ました』といひます。七年の日子を費された此の長編の第一部は作者自ら小說と謂へども考古學的興味を持つて讀む可きものであらう。

　こういふ種類の本は元來、一般に科學的な智識、興味にまだ乏しく有り勝ちな婦人讀書界には有益な譯で、たとへばフアブルの昆虫記の如き名著であつた場合にはその效果は素敵である。第二部が出る時には作者はどうぞその勢ひで書かれたい。(ル・ブランタン)



悲喜劇の獨自（感想その五）

――三角關係の一端より――

生田花世

――三月十九日午後六時三十分――

『よしさん、あなたね、はじめてうちへ來てくれた時、どうおもつて？　私はあなたに何もいへないで來てたのですもの…』

と私はそばへよしが來た時にたづねて見た。うすいけれどもまるい柔かいその眉をぢつと見ながら…。

『ここの奧さん、ヘンだとおもひなさつたでせう…』

『いいえ…』

とよしは云つて人の好い笑顔で

『あの…奧さんはお産でおやすみになつて、それでお手が足りなくて、私をおやとひ下すつたとおもひました…』

とホホと笑ふ。

『まあ、そう…』

とあまりにも事の意外に驚いて、私もふきだして了つた。よしは髮をかき上げながら。

『私、すこうし足りない人間でございますから…でも、お産ではなくつても何か御心配ごとのやうだと存じ上げてゐます。でも毎日毎日、お机にむいて御勉強していらつしやいますのでびつくりいたしてゐます。普通、御心配ごとがありますとなかなか御勉強どころではございませんのに…』

『勉強？』

『はい、そんなに御勉強なすつては、お身體に障るとお案じ申上げてをります。夜中でもお書きになつていらつしやいますから』

『さうねえ、夜なかも朝も夕方も書いてたから、こんなに出來ましたわ』

と私は自分の机の上のかさだかな紙稿を手で持上げて見た。苦痛のために噴火したその溶岩の滓に似てゐるこれの稿は重たかつた。

『…ほんとに勉強はおたのしみでございます。私など、ほんとに何も出來なくてつまらないと存じます。今はもう女のお方でも勉強勉強とおつしやいまして、勉強のないものはバカでございます。』

思はず私はぢつとよしの顏を見まもつた。その輪廓のととのつた圓滿な人相を。心臓がわるいとかで、唇の色もあをざめて見え、顏色もすぐれず、眼にもつやがない。『生命』の輝きの乏しいその顏から、何かから他人の心にせまる平和な寂しさが漂つてくる。

『よしさんも隨分苦勞したでせう』
『はい、…でも、私のやうなものの苦勞はごくつまりません苦勞で…』
『さうぢやないの…何でうまくゆかなかつたの…いろいろ』
『はい、十九の時一度かたづきまして、二年めに出まして、三年ほど父の家に居りましてからもう一度かたづいて、又三ヶ月で別れまして、姉の家に厄介になつて居りましたが……やはりすみませんので、かうして働きに出てをります』
『御亭主がなくなつたりしたの』
『いいえ、…いつでも私の身體がわるうございますので…』
『身體の弱いものはどうしても損ねえ』
『はい』
とよしはうなづく。

×

よしも私も力が弱い。だから、こんなにも青白く心細く生きてゐる。然し此間まで見も知らなかつたこの婦人に私はこんなに世話になる。こんなにもよしの親切にたすけられて生きてゐる。よしは身體が弱いために、いい結婚生活が與へられなかつたし、私は私で、いろいろな、今度のやうな艱みをする。女性苦、同行のおもひは胸に波立つ。『私一人が不幸だ』なんていはうものならば僭越のいたりであらう。

×

『御夕飯いかゞいたしませう』
とよしがきく。
『さうね、ほしくないのよ…』
『でも何かめしあがりませんでは…』
『さあね』
さうはいつても果物の外たべたいものもないので蜜柑をたのむ。しかし今日は淺草で晝食をとつてるので何がなし、氣がしつかりして來てゐる。突然の愕きや、深い懊惱がどんなに肉體にわるいかが今度位分つたことはない。

あのミスロビンの手紙を見、Sの告白をきいた夜のショックののち何かから自分が肉體的に異常になつたと氣がついてから今日まで『御飯』といふものが咽喉をとほらないやうになつてゐたし、『おかゆ』をとおもつても、あのにほひがいやだつたし、ほかにほしいとおもへるものもなかつたので、果物とか、葡萄酒とか、卵とかで、すまして來たのだつた。さうだ。女中のよしが來て以來、私はよしのたいた御飯をまだたべてゐない。その食事が今日はたゞ一度にしても氣持よくお腹におさまつてゐるのだと考へるさへも嬉しい。然しもう大丈夫二人の手紙も見たし、むかふよりもたしかに自分の方に行動の狼狽がないことも分つたので、何かしらいい氣持がされてならない。これからはもつとしつかりして、心しづかに讀書を——私の幸福な讀書を——するやうになるともう私も崖の上の人だ。さかしまに心は墜落したが、もはや崖をはひ上つて私は人里にみちびく青い小徑を見るのだ……私のための明るい道を。

×

自分で自分を保つ。そして安心立命する。これにまさることはないやうな氣がする。かういふ心持を詩でうたつてみれば

心は杭のやうに
はげしい流れの
岸に立つてゐる
いろいろのものが
流れて來
すべてのものが
流れ去つてゆくけれども
心は杭のやうに
ぢつと立つ。
何事もないかのやうに

ぢつと岸に立つ
杭にならへよ

×

だが、かうは心にいひきかせてもぢつとしてゐられないのが『心』である。杭になれよといつたところで、理由もなくいつまでも杭になるなら愚かな沙汰である。いよいよ此處が自分を生かす場所でないならば、かの移住の民が古い昔にしたやうに、草と水とのあるところを求めて、更に新しい生活のために旅立たなければならぬではないか。

×

何といつても私は今、郷里へ歸りたくてならないのだ。『歸るわが家がないぢやなし……』と俚謠のやうなものがつひくちずさまれる。石一つでも故郷の石を見たい氣がする。人一人でも故郷の人に逢ひたい氣がする。しかしかういふ故郷への思慕をいつか私がのべたときに、私は、弟から亡くなつた弟から、メエルヘン的だ、牧歌的だといつて、やはりいやなのは故郷ですといふ驚いたことを聞かされたことを思ひ出す。しかしその弟さへも『死』の前の日記の——その絶筆の文字は、故郷への思慕のその外のものではなかつたことを考へると、私たちの郷愁は實に根深いものといへる。あの郷里の山の畑、野の畑で鍬をもち、水そゝぎ、草をむしり、いろいろと勞働する。それはどんなに新しい生氣を私の心身にみちびきいれることだらう。一圖にその事が考へられる。も少しすれば歸つてゆけるのだもの、疎ましい火宅の苦しみもこゝ暫くの間だと思へる。

×

——午後十二時十分——

いまはしも獨りになれぬ山ざくら嵐に散るもこゝだ見けるを……ひとすぢに生きし心の末裂けてつくろひがたしなほも裂けゆく……よする浪またひく浪のあらいそに舟の二つはとほざかりけり……みちたりてわれの心のありしときさばかり君はむなしかりしか……君がもつ色の花にはよりがたしかへり來べくば棄てたまへかし……人もゆるしわれもゆるしてほどほどによき別れせん心よろしも……そむきゆきし人の心のうつろひのいかゞあらんと靜かには居る……何ごとも一つの胸におさめてん語らばわれも君もわびしも。

×

かうして歌をよむ。寢ざめの枕を寄せて書く。いつの間にか歌などつくる。このあやしい心持よ。しかし歌をよんでゐるとふしぎにも心がなごむ。自分の心の中のおに神をしづめるといふわけではある。「およそ生きとし生けるものいづれか歌をよまざりける」そしてその歌は傳説によると、小野小町の雨乞の歌をはじめ、西行のみちのくの童子との問答をはじめ、いろいろの功得があるさうな。そんな功得は知らないけれど、自分自身の心の鬼神はたしかにこれで平げられる。功得は十分といつてよい。

×

咲きをへて椿の花のかげもなき青葉の枝に心ただよふ……ほどほどの事し終へなばいでゆきて一人しゆかん春の山路を……たゞひとりかへりゆく日はふるさともみどりすがしき夏となるべき……しづかなる春の夜ふけに祈るかなくるへる人もしづまりて寐よ……今宵またわれにねむりのなりがたしねむらであらんねられぬものを……母上は知らであるべしかくばかりめでたまふ兒のねられぬ夜半を。……明日はまた明日の心となりぬべしなりゆくまゝにあらめ心は……鬼のごとき心をもちて世にあらばいと疎ましき我身ぞと思ふ。

×

三月二十日午前八時

Sにあてゝ昨日一日中のことこまぐ\と書きはじめる。つい、そんな心がわいて來た：…。しかし書き終へてから裂いてすてゝ了ふ。あの人の心が歸りきつてゐないものをと思ふ。こんな未練なことはいけないとおもふ。おろかな女よ！　書けば、感情がこもる。私としては、この際感情は出したくないのだ。あの二人のゐるまんなかへ、私の感情をほうりこむなんていやなことだとおもふ。あの二人の仲へ投げこまれるものは私の心ではないやうに。二人は二人で幻滅を味ふところまでゆけばいいのだ。でなければもつと强固に結合するまで。私は私一人……。私は、私一人で自分の感情を處置するのがよいとおもふ。もう『なりゆき』のまゝ、どちらへでもなつてよいと思ふ。自然なのが一番いい。

　三角關係は人間三人が三つの鋭角をかたちづくるところに深刻な興味もあらう。この十五年――いや十八年といつてもよい、この長い間の東京の生活で、私はいろ〳〵、陰慘な男女三角關係を人からもきいたし、周圍にも見て來た。そのなかでも、特に陰鬱だつたのは、伊藤銀月といふ文士の身邊に起つたその三角關係であつた。この人のは、妻なる婦人を棄てて、その妹を愛したのだつた。妹が、姉の夫の妻になつて子供を產んだのだ。下町あたりには、折々あるとしてもさうした事が、神經質に、敏感にものごとを考へる文士の生活の中に起つた時の悲慘はお話にならないものだ。棄てられた婦人は長い〳〵間を悶悶としてくらし、遂には尼になるべく、その敎職をすてゝ（小學校の女敎師をして彼女は橫濱で自活のみちをたてたのだつた）京都の寺へ入つたといふことをつひ此間――といつても去年の秋だが、新聞のはしで、一寸書いてあつたのを、私は、切り拔いてもつてゐる。姉妹が一人の男を仲にして爭鬪する。愛慾の悲慘な一つの見本のやうなものである。親しかつた女友達に夫を取られて了ふなんて事は餘りにも餘りにも有りふれたことである。

×

　三角形を紙の上に私は畫く。そしてその一角を私は消す。その一角を取りそこに二ところから集つてくる線をも消した。そこで彼と彼女、その二人が二端にゐて、やがて一點に會するといいとおもふ。

　とにかく私から考へると、二人の戀愛はその破壞的なところに興味がある。今は、彼女がそのトリックで引き出すだけ彼を引き出しひきつけてゐる。しかし、彼が、彼女の『重荷』となりはじめれば、彼女がどうするか、さういふところに興味がある。ぢつと見るのも面白からうではないか。

×

――三月二十日午後一時――

　彼女へのかへしの手紙を書く。考へつゝ書いて出した。『お手紙を拜見いたしました。其後どうなすつていらつしやるかとおもひました。東京でのせつかくのお望みの中絶、御歸國はつらいものでございませう。しかし又よいこともあるかと考へます。私も出來るだけのことはしたいと考へます。いろ〳〵と世の中もむつかしうございます。やはり一步一步あるくより外はないやうです。どうかして若い心を失はないでゆきたいものとおもひます。私に出來ることがあつたらあなたのために何でもします。十八の春からのあなたといふ方は、私の心には桃か櫻の花のやうないい思出です。どうか身體を大切にして下さい。』

　出來るだけボンヤリと書いたところに私の苦心がある。實にかういふ手紙はむつかしいものだ。しかしいつの間にかこんな心持にま

で私は移つて來てゐるのだ。

×

――三月二十一日午後八時――

弟が來たので、思ひ切つて心をプッリと切る手紙を書いてもらふ。Sにあてて。めつたに筆をもたない弟なので、何枚も何枚も書きつぶしをしてやつと書いてくれた。文面は、私の言ふとほりに。姉は病氣ですつかり寢込んで了つたから、これまで、毎日おくつてゐた轉送の手紙雜誌類は、今後まとめて 僕よりおおくりすることにしますから、左樣御承知下さい。といふ風に。而して、その書いてくれたのを私はよみかへして終りの方にある『おかへりを待ちます』といふのを消してくれと言つた。

『よびかへしたりしない方がいいのよ。ただ、心のつながりをプッリと斷ち切りさへすればいいのよ。これは、私の心を明るくさせたいためなのだから……あの人は、歸りたい時にかへるだらう……ああいふ性質の人には今になつては何にも言はない方がいいもの……歸りたい時に歸つて來るのでなくちや、その結果はどんなに惡いだらう……』

『さうだな』

弟は又もや大骨折りで書きなをし、歸りにポストに入れるとて懷中して言つた。

『お大事に……でもよつぽど元氣になつたから僕は安心した……』

『ああ……いくらかね』

×

これで一段落ついたのではじめてホッとする。相互開放の心やすさ。

×

悲劇を喜劇にすること、不幸を幸福にすること、それはみな自分一人の心のもち方であらうものを。

×

ゴミのやうな、微力なる私ではあるけれども、運命よ、私を働かしてくれ！ 私は熱望してよびかける！ 私は『仕事』をしたいのだ。これまで私は、いつの時かは、臺所より出て街頭に歩く日の事を夢見てゐた。そして今こそその時が來たのだ！ まづ手はじめにどんな仕事をしてよいのか、運命よ、それを私に語れ。そして私を引張り出して行け！ この家の中から。

×

（自分の心のために）

いつのことか
眞夏私はそれを見たのだ
坂の上に
白くて灼け立つ雲の峯を。

ぢつとりと汗にぬれて
見上げた
坂の上
力は燃えてゐた眞白に

坂に上らう
力で命きらめきで
強く生きて
眞白いパッションで。

――（完結）――



母の醒め

開地敏子

とても書かなくちや
ジッとして居られない私のこゝろ
すつかり死ぬ覺悟をして
四册の生々しい血の跡の滲む
　日記帳を破り捨てたときのあの氣持!!
カルモチン百錠を帶の間に潛めて
三通の遺書を認めた
　あのときの氣持!!
そして
　女の生命の黒髪を
　　ブツリと切つた………
　　　あの陰慘な氣持!!

それを夢の様に忍び乍ら
生きてゐる私である。
私はハッキリと
　ある男の言葉を今思ひ出す。
俺は『人生を草紙にして仕舞つた』と
　云つたあのコスモポリタン。
十九歳の春に從兄に嫁いで
　始めて憂世の苦勞を知り初めても
慈母の情に
私の心は純白だつた。

呪ひを知らなかつた。
寂しさを知らなかつた。
苦しさを知らなかつた。
その私が
二十歳の秋にたつた一人の慈母を失つてから
の寂しがり様は?!
戀を漁つた
漁つて見ても
結局心の奥底の寂しみは
人生を知れば知るほど….

深刻の度を加へてゆくばかり。

二人の子供を産んで見ても
子供で慰められる私の心ではない
　只責任に苦しむ　それぱかり

何故こんなに寂しい私の人生なのか。

その寂しさを誤魔化して
　ゆけば……ゆくほど……私は、

人の……
心の冷たさ、意地悪さを数へられて
何度死を覺悟しただらう

死を覺悟する度毎に、
私の犯した所謂世間的な
『色ザンゲ』が

クルクルクルと渦巻いて
私を虚無の廣ッ原に追拂ふ、
果しもない虚無の廣つぱに

『ゆけどゆけど石地藏一つなき枯野かな』

私はトボトボと亦歩きつゞける。

何處かで
『お前も人生を草紙にしてゐる』と
云ふ聲が聞える。

いくら精根をつくして
かいても　かいても

まつ黒な手習草紙の字が見えないのが
私の人生なのだ。

でも
まつ黒な上へ上へと
死ぬまで習字をつゞけなければならぬ私に

いつ眞白い半紙が
清書の爲に惠まれるのであらうか

數々の事件の
年も忘れた　日も忘れた

更生の私の清書は、

やつぱり子供を立派に育てあげる
そのことであつたのか。

×

お芝居！
みんな嘘なんだ。

併し
みんなほんとの事だとも云へる

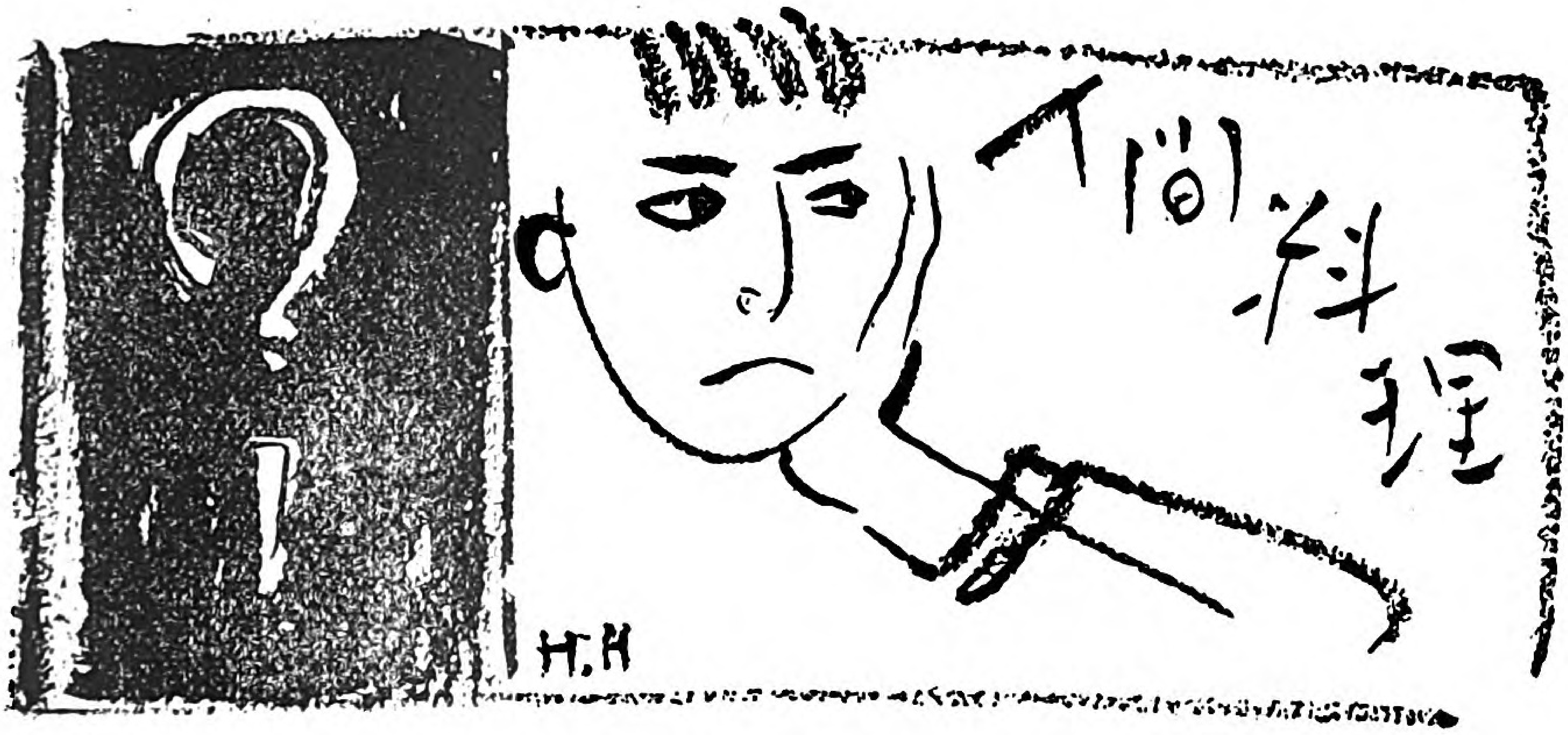
泣く
嗤ふ
怒る

どうせ人生は
芝居の舞臺

役者であるなら
千兩役者にと思つて居たが

千兩役者になりそこねた私
私の人間性の弱さが

いま私を苦しめ拔いて居る
果していつ死ぬのであらう？



シナリオ習作 ——（無斷撮影を禁ず）

人間料理 1

しの・たけじ

夏の海の、いま靜かな夜です。

巨船は甘き熟睡を乘せて、月光のわだなかを、薄霧を破つて、黒き潮に白き花を咲かせつつ進んできます。くだける潮の花は、刹那に咲いて、刹那に消る——しかもその水晶のくだけは、月光にぶつかつて、ダイヤモンドよりもいみじい輝きを散り撒いて失せます。

誰も見るものはありません。船員は見なれてゐます。といふより、勞役につかれ職務におはれ停んで見る餘裕をもたないのです。ことに明日は、明れば懷かしい故郷の横濱！　彼等は陸のことで一ぱいです。船客も朝の檢疫が早からうといふので起てゐるものはありません。もうやがて房州の沖です。

◆

「富士だ、富士が見えた。」

それはＢデッキ廿三號の室で、トッピョウシもない大聲で、しかも嬉しさあまつ

た叫び
「オイ、富士だ、おきないか、オイ。」
時に、丁度その表甲板を進りかかつた若い船員は、何か室内で叫ぶのをきいて、圓い窓の硝子が風入れにすこし透してある透間から覗いて、ニコ〱笑つて通り過ぎた。
「ハハア、寐ぼけたな奴さん。」
クスクスとしたので、お臍が笑つて風をひいたのか、御丁寧に二ツつゞけて大きな嚔をした。
「萬歳!」
とう〱、Bデッキ二十三號のお客さん、少年H君は飛起きた、といふよりベットに跳上つた。
「萬歳!」
「騒々しいな、君。」
向側のベットの垂れをあげて、顔を突出して怒つた。
「寐られやせんぢやないか、幾度、萬歳〱つて騒ぐんだ。」
「全くだ。」
上の棚も同意だ。
「晝間騒ぐだけで澤山だ。靜かにしろ。」
だが小言をいはれた當人は、もうグッスリ。寐言をいつて、グル〱と四邊を見廻すと、室内はまだ闇りで、幽かに月の光りが、自分の寐床の上の窓からさしこんでゐるだけなので、怖い小父さんたちの叱責もきかないうち、またまんまる〱ぶつ倒れてしまつて、頭から毛布をかぶつてゐる。
「どうも甚い目に逢つちやつた。やつと眠れたかと思ふとやりだすのだから。」
「全くですよ、奴さん、明日は日本だといふので興奮してゐるのですね。はじめてだつていふから無理はないが……」
「しかし、困りますよ。長々海の上で退屈はしましたが、寐覺きといふ事は出來ないもので、これで明日着いたとなると、ばかに忙しくなるんですからな、肝心の今夜眠られなくつちや弱ります。」
「御同様です。嬉しくつて眠られないなんて年齢は、何時のことかもう忘れてしまつてますからな。」
「あははは。」
「何時でせう、もう直に着きますな。」
「燈火を點けてあげませうか?」
「いや、それには及びません。煙草でも一服して、も一寐入りとしますかな。」
上の棚の客がマッチを擦ると、糸瓜のやうな長い顔が、棚から下へ突出されてゐた。下段の客も起直つた。
「どれ、あたしも一杯やらなくつては。」
彼は枕許にころがしておく、ウヰスキーの平瓶をとつた。

――ウウン、ウーン――上の棚の客が呻吟つた。下段の客はびつくりしてまた顔を出した。

「どうかしましたか?」

「や、恐縮です。うなるつもりもなかつたのですが――」

「では、おやすみではなかつたのですか。それは失禮しました。うかいなされてお出なのかと思つて。」

「イヤ、あなたこそお安眠のところを、お騷がせしてすみません。」

――ウウン、ウーン――

「チョッ、困るなあ、またか! もし、おやすみですか? 眠られませんか?」

「あ、どうも――恐縮です。すこし考へごとがあつて、氣が滅入るものですから、つい聲を出したりして――相濟みません。」

「それはいけませんな、どうです、憂さはらしに一杯あがつては。そして、よくおやすみになつて、小僧さんがまた騷ぎださないうちに、あたくしにも一睡させてください。」

「重々すみません。御迷惑のほどはお察しします。だが、まあ、同船のよしみ、まして一ッ室にも幾日か居たものですから、御同情くださつて、その……」

「ええも、それは、御同情をしますが――」

下段の客の四角の顔が、いよ〱眞つ四角に角ばつた。

「どうも、物事、思はしくいかないで、行つた時より猶惡かつたなんて、そんな土産をもつて歸るのは、陽氣でありませんからな。」

糸瓜の顔はぶるさがるばかりに、下にむけられた。

「や、そんな悲觀説はとりませんな、深夜の誘惑ですよ、あの、鈍い月光がいはせるセンチメンタルですよ。まあおやすみなさい、明日の陽を見ると、「ものごとみな新なり」です。待つてらつしやる方もあるでせう。新たな勇氣をおふるひなさい。なんてたつて、故國ほど好いところはありません。――さあもう一眠入りとしようか。」

對手になつては面倒と、カーテンを曳いてしまつた。

「ヘン、成功者は、御元氣のいいこつてす。」

糸瓜も棚の奥にかくれた。

と、桃の中から飛出した息子よろしく、爆發したやうに飛上つたのが、例の少年で、

「萬歳! 富士山!」

「喧しい!」

これは思ひがけなく、青い長い、上の棚の客です。

「あきれたものだ、この騷々しさも知らずに、大いびきを寐てゐるアンケツもある。」

少年は起上つて、無中で、手早く服をつけ、扉の外へ鐵砲だまのやうに飛出していつた。

「狼狽ものめ、海の中へでも飛込むな。」

彼はグルリと寐がへりをした。

◆

船長の室に飛込んでいつた少年。

事務長の寐床にもぐりこんで驚かした少年。

當直の機關士の室から追ひかへされた少年——それは、なぜまだ夜の國にゐるのか、早く富士山が見えるやうに、もつと速く機械を廻せとダダをこねて——

「こら、邪魔をすると海の中へたたき込んでしまうぞ。」

と機關夫に怒鳴られて、

「ねえ君、あいつは氣違ひだね。」

と寐ずの番の食堂ボーイにごまを摺つて、

「腹が空いたよ。」

とこつそりねだつてゐる。

「やあ、空があかるくなつて來たぞ！」

月が薄れたので、却て薄暗くなつた甲板に、海の霧はうす白く漂ひ流れ立ちこめてゐた。

早起きの船客は、もう、ちらほら室から出て來た。

晨天に星がかそかにまたたいてゐる。

「お早う、」

「お早う。」

各國語で朝の挨拶が云ひかはされる。

朝暾。

「富士だ！」

少年が第一番に目附けたのだ。

「富士！」

「富士山！」

衆口集まり、目もまた集まる。

「あれだ、あれだ。」

「おゝ、あれだ、あれだ。」

眞紅の衣を裾に、金色、白金色——それは彼女の秀麗な姿の輪郭を、描きいだす線にふさはしい輝きだつた。

富士は瑠璃紺に、碧みをふくむ衣を旂し、白妙の素絹に面をつゝんでゐる。その麗容匂ひこぼれて、空の果まで薄紫に櫻色の紅を解きながしてゐる。

その時、海は、濃き〳〵藍であつた。

「ベリ、ビューチフル。」

感嘆して、婦人が叫んだ。

頭の上の、その婦人を見あげて、少年はニッコリした。そしてもつとも誇らしげに、

「萬歲！」

と帽子を振つた。

「萬歳。」

と、その婦人も和した。

「日本少年Ｈ（ジャパニース・ボーイ・エチ）！」

◆

「さあ、大變、一體誰が迎ひに來てゐるのだらう。」

少年は氣になりだした。航海中に馴染んだ人達は、みんな、この元氣のいい少年に、忙しい中で一々挨拶してゆく。

「あちい！」

と思ふと、大きな手が頭の上へ乘つかつてゐて、その手の持主アメリカ爺さんは、よそみをしながら、事務長とせはしなく話てゐるので、少年の鼻の頭のさきへ、マニラの太いやつの火がきてゐる。

「もちつとで、睫毛の火事だ。」

「おい、小僧、小僧。」

忙しい中でも、若い船員は、少年をからかつた。

「誰も迎ひに來てやしないぢやないか、一番後に殘されて泣くな。」

「あんまり早くつから騷いで、みんなを困らせたばちだ。」

少年は脣をトンガラせた。したが、全く困つたことに、だれが出迎人なのか見當がつきかねてゐる。

「オーい、その中に、僕の出迎ひゐるか」

少年は怒鳴つた。船員たちは面白がつて笑つた。優しい船長まで、彼の傍に立つて笑つてゐる。

事務長が、忙しさうに彼を物色してきた。船長のそばに少年を見出すと、これも意味ありげに笑つた。

事務長の手には、日の丸の國旗がある。彼はいま、それを、少年の頭の上に立てた。

「いやだよう、なによするんだ。」

「これでいいんだ、これでいいんだ。」

事務長は一人承知で押立てた。なぜこんなことをするのを、船長は咎めないのだらう、子供だからつて乘客なのに、馬鹿にしてゐると彼は思つた。

だが船長はニコ〳〵してゐる。それよりも癪なのは、降りる客が、みんなニコ〳〵して彼の顔を眺めてゆくことだ。

出迎ひの中から、とても大聲で呼んでゐるものがある。

「Ｈといふ少年はをりますか？」

「此處です。」

事務長にかはつて、國旗を彼の頭の上に立てゐる船員がどなりかへした。

「やあ、ゐた、ゐた。」

さう言ひながら近づいて來たのは――？、少年は、衆圍にきまり

がわるくなつて、グルリと後をむいてしまつた。

「約束通り日の丸だ。」

近寄つて來たものは言つた。

「こりや目に立つて、間違がはんで、よい思ひつきぢやつたわい。」

アメリカの乞食だと、少年はこの出迎人が淺間しくなつた。汚れた服を平氣で着て、髮の毛はのびたままの、薄汚れた老爺だつた。

「皆さん。有難うございました。お世話をかけたことでござんせうわい。御覧なさい、アメリカ生れの見得ぼう小僧が、わしが汚ないので氣まりわるがつてゐる。」

洋客たちは、何がなし二人の様子で面白がつて笑つた、見得ぼう小僧とよばれたH少年に同情して、出迎人に輕い嘲笑が與へられた。だが、船長はこの出迎人の、むさくるしい老爺に對して、ゐんぎんをきはめて、ことに禮譲正しかつた。

「さあ行きますかな。」

老爺は日の丸の國旗を船長の手から受取つた。少年に手をさし出すと、少年は知らないふりをして、サツサとさきにたつた。

「御機嫌よう、お氣をおつけ下さい。」

と船長は特別に、その出迎人に言つた。

横濱棧橋の種々なる人の波、現代人の見本がウヨウヨ漂ひ流れてゆく。何者も少年の目には珍らしい。

俥屋が來た。自働車が進めた。おぢいさんが自働車の方へゆくと、少年は叫んだ。

「りきしや、りきしや。」

それはあながち、老爺と二人一所の自働車を厭つたためではない。少年には、日本見物がへりの紳士令嬢から、人力車のことをいつもきいてゐたから、乘りあきてゐる自働車などよりはるかに魅力があつた。

りきしやは面白がる少年を乘せてはづむ。ハイヨ、ハイと景氣よく駈ける。そんなことにことに興味のある少年だ。車の上からも、奇聲を發しる。後をむく、横をむく。後の方から老爺の俥は、おぢいさんがひいて、コトコトと、遠く離れてついてくる。日の丸の旗はこの老旗手の手に捲いて捺がれてゐる。

船の中で馴れてゐたアメリカ令嬢が、これはまた、犬を二疋、足の前において、鸚鵡を手にして俥に乘つてきた。

「サヨナラ！」

とおぼえたての發音が、鸚鵡のやうな聲だ。鸚鵡もまけずにキイキイいふ。

日本國の玄關の街中であるけれど、旅客は無遠慮だ。中には傍若無人に指さしして、批評を下してゆくものもある。

「さあ來たよ。」

老爺の家は、思ひがけなく子供には氣に入つたらしかつた。少年は、はじめて滿足さうに四邊を見廻した。

「ここ、あなたの家ですか？」

「さうだよ。」

「中々立派ですね、僕は、もつと汚ないかと悲觀してたのです。」

「さうかな。」

「いい犬がゐましたね、僕大變、助かつた。」

老爺ははじめてニヤリとした。

「さうか？　犬が居て助かつたか。」

「あれは、すぐ僕の友達になりますよ。」

「なるほど、此處の家には、他にお前の友達になれるものはないな。」

「さうでせう、あなたつきりでせう。」

「いゝや、も一人ゐる。」

「男ですか。」

「女だ。」

「をんな？」

少年は變な顔をした。

「子供ですか？」

「いゝや。」

「では――」

少年は言ひにくさうに、

「あなたの奥さん？」

「さうでもない。」

少年は質問が面白くなつて來た。

「どんな人です、若いの？　年より？　きれいな人？　汚ない人？」

「おまりさん――」

おぢいさんは奥へむかつて呼んだ。少年はぴつくらして、

「家のね、パパやママが言つてましたよ、おまりさんてサアベルをさげてて怖いのだつて。」

「それは巡査さんのことだ。家のおまりさんは善良な方だよ。」

靜かにおまりさんが出て來た。被布(ひふ)を着て、切髪の後室である。

「おや？　日本人も斷髪ね？」

少年は飛んでいつて握手した。おまりさんが、いかにも人の好い柔和(にうわ)な相なので、すぐなついてしまつた。彼は母親の懐から離れて來たあまやかされた一人子の鄕愁を感じ、おまりさんに――彼女が若くなく、美人でないので遠慮がなく――抱きついて、切髪をグルグルと、父親の頭をいつも掻きむしるやうに、親しみをもつてゴシヤゴシヤにしてしまつた。

おまりさんの頭が鳥の巣(おうむ)のやうになつたが彼女は氣にもしない。

「おかへりなさいまし。」
彼女は丁寧に禮式にかなつたおじぎをした。
「よい子をお連れ下さつて、有難うぞんじます。」
「は、あなたのお世話がふえました。」
「どういたしまして、あなたこそおたいていではございません。いよ〳〵「人間料理」におかかりでございませう。」
「左様、ボツ〳〵取りかかります。」
「御苦勞様でございます。」

少年はその會話をきいて變な顔をした。
そして、此處の家は。アメリカから、いまこの少年が、長い旅をして初めて來たといふのに、特別のもてなしをする樣子もなければ違つたものがはひつて來た空氣の動搖もなかつた。
少年は傍から老爺を眺めて、石炭カスの大きな固りのやうな人だと思つた。おまりさんを眺めて、柔らかいパンの固まりのやうだと思つた。お腹がすけばパンには噛りついた。ママのかはりにはなると、H少年シヤレは知らないが眞實にさう思つた。

「犬をよんでやりませう。」
いよ〳〵ワン公が、友達になるわけだ。獰猛(どうもう)な秋田犬が、呼ばれると駈けて來た。
「友達になつてやるのだぞ、仲よくしろよ。」
とおぢいさんはいつた。これでは犬の方が歩合がいい。そこで犬さん、兩足を開いて、なつこい眼をした、
「よく來たね。」
といつた表情だ。
「よく來たね」といはれたのは、日本着以來これがはじめてである。口でいはれなくても、眼でしめされただけでも嬉しい。だが、ちよいと馴れにくい犬だ、ジヨンやハローとちがつて、毛なみが粗い眼色もきつい。
「おぢいさん、喰ひつきはしませんか?」
「大丈夫だ。」
だが、少年の胸には、ちらと聞いた「人間料理」といふことばがつかへてゐる。
「俺は、もしかすると、喰はれてしまうのではないか——」
ああ、ママ! パパ!
彼ははじめて、遠くカリホルニアに住む父母が戀しかつた。

（つゞく）

文藝管鑑（一）

生田花世

毎月内外の女流各氏の全般的なる文藝上の努力を力の及ぶかぎりごく概略にでも傳へようと考へてゐる私のこの『文藝管鑑』の稿も、『女人藝術』逐號の發展で、あまり紙數がいただけなくなつた。しかしこれは幸なことである。私は、出來るだけ簡約な詞で所期の幾分を語りたいものとおもふ。さて、よほど前から私は、山川菊榮女史勞作のベーベルの『婦人論』（婦人の過去、現在、未來）といふのについて語りたいとおもつてゐたところ、いまだ下卷を讀了してないし、丁度二卷の小説を是非よみたいと買ひ求めて今月、私の机上のものとしたので、ベーベルの『婦人論』の印象は他日のこととして、この二册について大略のべて見たいとおもふ。この興味深き小説の甲は、平林たい子女史の『施療室にて』乙は、柳原燁子女史の『荊棘の實』である。

『施療室にて』の著者、平林たい子女史は、この『女人藝術』創刊號に、本書所載の『生活』を寄稿されてゐるので、讀者にとつても親しみのある方である。今、この人の處女出版なる『施療室にて』について、私の考へさせられたことは、この書におさめられてゐる十篇の小説の藝術的良心の手がたさである。一字一字といはうが、一つの感じごとにといはうか、どこを開けてよんで見ても文藝家としての正直さがこの生活行動からしみじみと泌み出してゐる。特に巻頭なる『施療室にて』は出生作であつただけに、潜熱のこもつてゐる力づよい作品である。空に浮いたものの觀方、云ひ現し方がない。憲兵隊から歸つて來た姙娠脚氣なる女が、コンクリの床にぶつたほれるあたりの描寫、その心情の動きの叙述など巧緻である。人間らしく取扱はれない慘苦、女として一番たへがたい母性愛そのものさへも蹂躙されて、いはゞ彼等に（矜秋の鉎法に從へば）兒を殺されて、その憤激は、青黑い胸のかたまりとなり、ブスブスといぶる反抗のもつて行きばは、そこより外にないとおもつて××を考へる。彼女は、敵を見て立つてゐる！　だが、彼女には、反抗と敵討の實際的能力がないそこに又もや次の壓迫は彼女を囚へやうとする。かうしたプロレタリアートのスローガンの藝術的表現は（女性の方面からの）この一篇によつてかなり代表的にされてゐるところにこの作の動かしがたい地位がある。其他、女工を描き、又、植民地での、又は、その他での被壓迫階級のウゴキの取れぬ實際苦を描寫して在來一部の砂をかむ如きものとは雲泥の相違なる、藝術的滋味がゆたかにたゝへられてゐる。讀後、非藝術的不快感ののこらないのが、この書の何よりの美點である。なほ作者、この人の將來にとつていへば、又、文藝戰線一派の女鬪士なるこの人にのみついていはば、この人の本來の鬪爭は、こんなところにとどまるべきではなからう。――についての實際的行動に於いての、日本のローザ、ルクセンブルグ的心熱の實際化がいかに火花を吹かせるか、刮目して待たるゝわけである　この婦人の正直、この婦人の情熱は、何となく、その事を私に豫感させる。

『私は去年の十一月『若草』誌上平林たい子女史が、何か、私の名をも引いて、コマゴマしたものを書いて云々といはれたのについて（我田引水の勇を讃ふ）といふ一文をよせて、（この平林たい子といふ人は、小説でも雜文でも數篇私は讀んで來てゐるが、なかなか、眞面目で、その主義のために大眞になつてゐる點めざましいところがある）とのべ、その將來への祝福をもつて御挨拶をしておきました。自稱かもしれないが、私も正直人（特に書くものの上で）をもつて任じてゐる。だから正直にものを書いゐる人と、さうでない人とは實にピンと分るのです。私が平林氏を最初から注目したのは、氏が、マルキストであるからといふよりも、より多く、この正直で行動的情熱婦人であるためだつた。だから私は、この人の未來おそるべしとおもつて、ある時、その心持をのべたものです。この人生に於いて、もつとも貴いのは、正直の鏡である。文藝家、勿論、主義者とてもさうである。不正直にして、何の社會的憤激ぞやです。かうなると、やはり人間の問題です。作家平林たい子女史を愛するとともに人間としての平林たい子女史を敬愛したいとおもひます。

施療室にて（一圓）市外杉並町高圓寺文藝戰線社

　平林たい子女史の『施療室にて』から柳原燁子女史の『荊棘の實』にうつると、一つの面白い發見が私の胸に來た。甲は、絕對被壓迫階級の成果であり、階級鬪爭意識がその要處々々に、待つてましたとばかり、私たちを待ちうけてゐる。乙はこれも同じく被壓迫階級を描き、强權、金權若くば男權のために歪め、へしまげられてゆく弱者、不自然な女性の生活を描いてゐる。しかし多分に、詠嘆抒情味がこもつてゐて、階級的鬪爭意識なんぞ意識的には働いてゐない。たゞこの中の女性は、泣いてゐるにすぎない。しかも、結局は涙さへもその日〳〵のかてにもならず、ハヂケ出すやうな脫出が企てられたのだ。この意表外の行動は、戀愛によつて勇敢に、してのけられてゐる。しかも、この泣くより外なき女性の新運命は、その行動は、强權、金權を惡もみとめない無產階級の宮川といふ男性との戀愛から生じたことなのである。この男性にして、はじめて、この泣くより外なきかよわい、めざめない女性をその虛僞、奴隷の空虛なる牢獄よりひつぱり出し得たのだとおもふ。『施療室にて』の效果と、この『荊棘の實』の效果とは、ひどくちがふけれども、これ同じく、プロレタリヤ的述作である。（たとへ作者が階級意識スローガンをかかげなくてもである）から私の考へるのはあやまりであらうか。しかも、文藝、そのものは、常に、しかあるべきものである。强權、金權に媚びてゐる文藝品の非藝術品たることは蓋しいふ必要もない位である。眞の藝術品の潛熱は、恒に常に荊棘の道眞生活獲得のみちびきなのだ。

荊棘の實（二圓三十錢）新潮社

石川須磨子

　青天白日旗の翻りました北京は何もかも南に吸はれゆくやうに思はれます。名も北平となり永い間聞きなれたメロデーとチャームのある古い北京の名と共に、王府大街、京師大學といつたやうな都に因んだ呼稱を惜し氣なく捨てられるのでした。かうして合歡花の散るころから痛ましくも北平は暗いし愁さに見舞はれるのでした。

　南に運び去られた物が多い中にも、交通機關の隨一たる汽車にはどんなに迷惑させられますことか。北京天津間の往復が日に一回とは何と情ないことでございませう。それさへ今日でて明日知れずといふ有樣、勿論時間などは一二間の遲延は平氣なもので、到底文明人の想像もつかないことでございます。

　寒さをひかへて石炭がないなどと申してをります。無いのでなくて交通機關を奪はれた結果、運搬不可能といふことだらうと存じます。支那といふ國に生きて行かなければならない人に同情されます。



雷

高安やす子

庭中の花むらさやぎ風强し海こえてここに雷近づきぬ

樟の茂りをぐらき下かげをとべる蝶ありて雨おち來る

はたゝ神いよよ近づく裏通道走りつつ子らの上ぐる聲

快き雨を見て居りこの日頃胸にたまりし思忘れて

今年生の桐の廣葉にあたる雨はげしきことに心なぐさむ

言はましきこといはれざるもどかしさにおもひくやしむ雷まちながら

風景

秋の空深き眞晝に原中の煉瓦工場の煙上れり

原中の草はたけたり日あたりに電柱白くつづく道見ゆ

雲のかげ一つおちたりこの原に秋づきし物のひびきは親し

第一巻第五号、百十一頁から百二十二頁は、高群逸枝著「村に生くる人々」が掲載されておりましたが、同氏の著作権継承者の了解が得られませんでしたので、本復刻版では割愛致しました。

（龍溪書舍）



高安やす子

雨に降られた紙芝居

白石清子

「大丈夫？　まだ足がフラ〱してるぢやないの？」

おあきの不安相な聲が背後から呼び止めた。ふり返ると事もなく笑ひ返して

「確かなもんさ、祖父さんの膽は別誂へなんだから、少し歩き馴れると何でもなくなるんだ。」

「さう？　眞正直にうけて少しおあきの顔に安心の色が表れかけたのをしほに彼はサッサと露路を出た、出る氣だつたが四五日ではあつたが碌にものを食べず寢つゞけた軀はさう〱自由にはならなかつた。危ふくヒヨロつくのを懸命にこたえると顔を眞赤に上氣させて精いつぱいふんばつて可成嵩だかな箱を脊負ひ片脇に脚立めいた、箱の臺にするものをかゝえ込んで表通りへ出かけて行つた。

今日も朝からいゝお日和だつた。もう一頃程馬鹿暑いこともなく、荷物に押されて背中に汗が滲み出しても、ふと立留るとスーッと脇の下を吹いて通る風が冷々と感じられて町を歩いても以前より餘程樂な筈だつた。けれど何しろやつと今日床から這ひ出したばかりで空手で歩いてもさう早くは步け相にもない程なので、彼はとても何時もの町角まで一息にいつて其處で臺を擴げるのは不可能だと諦めると、それより二つも手前の所で大息をつき〱立ち止まつた。暫くぢつと立つてゐてみたが一人の子供も傍へ寄つて來なかつた。誰も氣が付かないで彼らや彼女らの遊びに夢中になつてゐるのだ。仕方なしに彼は拆木を手にとると箱を臺の上にソッと据ゑてをいてカチ、〱と鳴してその邊りを二度三度歩きまはつた。

「オヤ、小父さん、此處でやるの？」

頓狂な聲をあげて一人の男の子が駈けて來た。手に木綿の大きな風呂敷包をぶら下げてゐるのからみて御使ひの歸りらしく思はれた。

「もう彼方じややらないんかい？　小父さん」

子供は元氣よく話しかけて來た。その鼻の頭に汗が小さく粒だつてゐるのを見ながら彼はすつかり嬉しくなつて思はず子供の方へ會釋すると、いかにも尤もらしく答へるのだつた。

「今此處で一つやらうと思ふんだ。新しい御得意をふやさないとやりきれないからね」

何がやりきれないのか一向判らないなりに子供は肯くと

「じや何時もんとこでもするんだね？」

「あゝするとも、だから大勢集めて待つてゝおくれ」

「あゝ」

彼と子供の取引が餘り大きな聲で元氣よく行はれたので、遊び呆けてゐた近所の子供たちがふとこちらに氣付いてバラ〳〵と寄つて來た。

「紙しばゐやだよ、飴うるんだね小父さん？」

「貝に入つたの、ある？」

五六人集つた子供がガヤ〳〵と、彼のまはりで一時に喋舌りかけた。

「ホラよ、赤と靑と白と、三通りあるよ」

彼は子供らの氣を迎へて早速箱の下部についた抽出しから見本の飴をとり出すと掌にのせて皆の前に差出した。

「それから、此奴は水飴だよ、きれいな貝だらう。中にたんと入つてるぜ」

「おくれ」「あたいにも」

「二錢だね、小父さん」

「僕五錢だから御つりお呉れよ」

てんでに騒ぐ子供たちに誘ひ出されて二人三人と何處からともなしにふえて來た子供達がそれ〴〵に二錢、一錢と出して彼の商品を買ひとつた。

暫く子供たちをそこにまたせといて拆木をならしてゐたが、もう誰も來さうにないとみて、彼の紙芝居を始めるために箱を臺の上にちやんと置きなをした。それは長方形の木箱で子供たちの方へ向いた側、箱の底にあたる部分にガラスを張り、その反對側に古ぼけた淺黄の帛をズーと幕代りに垂れ下がらせそこから首をつゝこんで、彼の考案した紙人形を躍らせ、いゝ加減なせりふを喋舌つて、合間には箱の兩方の內側にとりつけてある小さい鐘を鳴らしたり、豆太鼓をドーンと打つけてみたりして拍子をとつた。

「けふはね、ノンキな父さんの芝居だよ、いゝか、三幕もあるんだから今日一度じやお終ひにならないよ」

いひながらガラスごしにみると、子供たちはすつかりそれで興をおこして一心になつて此方をみつめてゐるのだつた。

四寸足らずの扁平な顏の形ばかりの紙人形が彼のしなびた兩手に扱はれてヒヨコリ〳〵と動き出した。

「こゝはお金持の家の門の前だよ」一息區切つて勿體らしく彼は話し始める。

「誰だ、そこにゐるのは？」

絣の着物に黑い羽織を着た人形を右の手でトコ〳〵と歩かせると、今度は左の手で頰かぶりの人形を歩ませて

「やかましい、靜かにしろ」

そこで彼の片手は人形を舞臺の小さな穴に突き刺しといてカーンと鐘を鳴らす。

やりながら彼はビッシリと氣持わるく汗になつた胸もとを手のさきでソッとさすつてみて何がなしドキリとした。又熱が出なけりやいゝが――と不安が矢の樣に頭の中を掠めすぎた。だがぢつと眞面目な顏を並べてこつちを眺めてゐる小さな見物人たちの手前、その儘やめることなどは到底出來ないことなので强ひて元氣を振り起すと彼の今日の芝居の第一幕である處の「ノンキな父さん手柄の卷」を彼の氣性で刻命にやつてのけた。

「おしまひ、小父さん？」

「明日又來る？」

殘りをしさうにそんなことを繰返しながら散らばつてゆく子供たちを見送つて彼はボンヤリと立つてゐた。

「無理だつた、やつぱりもう一日やすんだ方がよかつたんだ」さう思はないわけにはゆかなかつたけれど、一端出かけて來てしまつた以上、少し位苦しくともこれつ切りで意氣地なく家へ歸ることなんぞは强情な彼には忍べないことだし、それに萎えた片脚をひきずりひきずり家の中でコト〳〵と働いてゐるであらう孫のおあさのそゝけた髮に、たまには細いリボンの一かけ位飾らせてやりたい氣も長い以前からの彼の希望であつたしするので、四五日食あたりで寢込んだ間の食ひこみも是非取り返したし、かた〴〵少し無理を通して働いてみたら却つて多少ともサッパリするかも知れないと思ひ決めると、紙人形を一つ〳〵叮嚀に新聞紙に包み抽出しに納めて、もと通りの荷物を背負つて歩き出した。

區劃整理がまだ充分に終り切らぬこの邊りの道路は方々に掘り返された石や木片の堆積が歩みをふさぎ、まるで火事場のやうにくづされた家々の敷地にとび〳〵に新しい建物がポッリ〳〵と建ちかけてゐた。そこを通りぬけて少し廣い通りへ出ると彼方此方にまだ空地はのこつてゐたが、それでも道がにこの邊になると小綺麗に通りもかたづき、新築の商店もそれ〴〵の陳列をこらして生ま〳〵しい感じが漂つてゐた。行きつけた四つ角のところへやつと近づいた彼は其處に、恰度いつも自分の荷を置くことに決めてゐる電信柱のと

ころに一かたまりの子供にかこまれた男の姿を見出だしてビクリとして立ちすくんだ。まぎれもなくそれは同業者だつた。といふより彼の其時の憤りにみちた心持には、僅かの自分の休んでゐる間にまんまと自分の御得意を奪つてしまつた摸倣者であり盗人であつた。

「エ、とけふは第三幕からだね、ドンちやんの月世界探險だよ」

その男は一向に彼の事に氣付かず自分の商賣に身を打ちこんで、頻りに人形をあやつつてゐた。默つて、コソ〳〵とその傍を通りすぎながら彼はチラリと横目をくれた。

ダブ〳〵の股引にハネをいつぱいにあげてひどく片方に磨りへらしてしまつた中齒の下駄を穿いた脚がその股引の上からさへハッキリと判るほど內側に彎曲し、人形を操るために中腰になつて幕をかぶつてゐる背中にペッタリと單衣が吸ひつくほど汗に濡れてゐた。自分の姿をそつくり其儘に目の前に映し出された樣な氣持に思はず目をそらすと慌てゝそこを通りぬけた彼は、決してそんなに醜く曲つてはゐない彼自身の股引の足を重くズル〳〵とひきずり〳〵別の新しい自分の賣場を物色して町を步いて行つた。商賣敵を憎む氣なんか全く何處かに消え去つて、彼の心持はたゞ自分の眞直ぐに伸びる足をひどく有難いものに感じ、その爲めに俄かに晴々となるのを覺えた。

漸く探し出したとある橫町で今度は前よりずつと景氣よくさかんに鐘をたゝいたり拍子をうつたりして紙芝居をして見せると面白がつて手をたゝく御贔屓の子供達と一緒になつて、自分も興に入りながらいゝ氣持に商賣をした。先刻びくつとした汗の氣味のわるさもあの同業者のそれをみてから急に安心してしまつたのでもう殆んど氣にならなかつた。

「二錢買つた人は前へ出るんだぜ、いゝか一錢の子はその後で我慢しな」

見覺えてゐる子供たちの顏を區別して舞臺の前にちやんと並ばせるほど彼の元氣は恢復して來た。

あつち、こつちと商賣をつゞけながら午ちかい町を步きまはつてゐる中に、だん〳〵空が曇つて來たのに彼はちつとも氣付かなかつた。

いつもなら、晝飯の前後は子供も餘り買食ひもしない時だからとおりすがりの露路口や好い顯榕にある小さな御社の境內などでユックリと一休みしておあきが覺束ない手で拵へて與れる握り飯を頰ばるのだつたが、今日はだん〳〵にとり返し得た元氣にひどく勵まされて午甲斐もなく興にのると、ついでだ、もう一處位やつてやれない事もあるまいと思案して荷を下ろしたのは曲り角の交番に近いある無職家の格子をはめた窓の下だつた。

其處でカチ〳〵と柝をうちながらふと氣付くと彼は少し困つた顏をした。咎められる筋はないにしろ餘り交番に近い所に場所を撰んだ失敗を氣付かぬわけには行かなかつた。といつて今更所をかへる

のも却つて目立つてまづいと思つたのでチラリ〳〵と巡査の方を盜み見しながら子供の寄るのを待つてゐた。

集つて來た子供たちがガヤ〳〵騒ぎながら手に握つて來た銅貨を我がちに突き出すのを制して一人〳〵に商品と引換えてやる中に彼は又腹の底からの不安につき動かされて來始めた。どうも工合がわるい、ぬける様な手足の氣だるさが、重くしびれるやうな氣さへする頭の鹽梅が、我慢せずにサッサと歸ることの利口さを暗示してゐると思はれ出した。

ノンキな父さんと盜人と隣の大將とを躍らせ乍ら、彼はともすると言葉につまり、一分も二分も默つて空しく人形だけを手さきに操つてゐた。ざわつき出した子供の様子に氣を持ち直すと、今までよりずつとはしよつていゝ加減に切りあげてしまふと、少し不平さうに邊りを立ち去り兼ねてゐる子供達にはかまはず急いで荷をかたづけ始めた。

「明日はもつと長くしとくれよ。今日は餘り早く終つちやつて詰んなかつたんだもの」

年かさな一人が鼻聲で呟く様に云ふのを聞くと流がに間のわるさうな笑顔をみせて

「あゝ、今度はずつと長くて面白いとこをやるよ。だからもつと大勢よんで來てくれるといゝな」

箱を背負ひながら彼は先きへ進みかねた。急に荷が重く〳〵背中を壓しつけ、小脇にかゝえた臺が危ふく腕を離れさうになつた。諦めてもう一度荷をもとの場所に下ろすと傍にしやがみこんで眩暈のする額の邊りをソッと手に揉みこすり氣分を直さうと努めた。

コツ〳〵と靴の音が近づいた。とわけもなし恐怖に捕へられてヒヨツコリと身を起すと逃げ腰になつて荷を持ちあげやうとしたが、彼の骨ばつた細長い軀は、意氣地なく地に膝をついてのめつてしまつた。

惡寒のためにガタ〳〵と震へ出して、彼の體は容易に地面から起ち上ることが出來ないのだつた。

「お爺さん」

頭の上から巡査が呼びかけた。返辭をしなけりやならない〳〵と思つて焦りながら口をきく丈の勢もなく地に坐りこむと、商賣道具に凭れかゝつて激しく眩む眼を固くつぶつてしまつた。其背中を、首筋をバラ〳〵と落ちかゝつて來た雨の粒が叩いた。空をふり仰ぐと舌打ちをして若い警官は手あらく老人の肩をつかみ嚇くといふよりむしろ怒鳴る様に云つた。

「雨だ、交番の中で休むといゝ、起つんだ、起つんだ、ぬれちまふじやないか」

「ありがたうムいます、旦那」

弱々しく返辭をすると、その中でも大切な道具は忘れることなく、恰度道具に引きずられる様な格好でヨロ〳〵しながら懸命の足

をふみしめて交番の方に近よつて行つた。

狹い交番の土間につくばつてハー〳〵大息をつきながら彼は熱にうかされたもの丶樣に

「ありがたう厶います、旦那、助かりますありがたう厶います」口の中でクド〳〵と同じ事を繰返して呟いてゐた。

ふと混亂してゐる頭の中にさつきの同業者の姿がチラりと浮ぶと、かうして交番の中に雨をのがれてゐる幸ひが一層にありがたく、終ひには手古ずつてしまつて外の方をむいてゐる巡査にむかつて頻りに低く叩頭して禮を述べるのだつた。

雨は益々激しくなつて來た。表のガラス戸を閉めると俄かにムーツとするほどむし暑くなつた土間に荷物にもたれて禮を繰返しながらいつか彼は涙をポロ〳〵とこぼしてゐた。

「孫の奴が今頃は心配して傘を持つて出かけて來てる事でせう。だのに私は、こゝで恁うして御親切にして戴いてゐます。何ともありがたいことで、旦那――」

をくれ走せの雷鳴がずつと遠くの空から響いて來始めた。

（一九二八、九、二一）

略歴



上田文子

明治三十八年生れですから、今年廿四になります。

生來、學校嫌ひの怠けものですから、申上げる樣な學歴など、全くありません。

戲曲らしいものを書き初めたのは、こゝ二三年のことです。

昨年でしたか「歌舞伎」といふ雜誌の募集脚本に喜劇を書いて選に入つたのが活字になつたはじめです。その後、小山内先生の御世話で「劇と評論」に現代劇を載せていたゞきました。

以來、折々、同誌に寄稿して居ります。



双生児を生んだお喜代

米澤順子

昨日の雷で上るかと思はれた梅雨が、まだはつきりしないらしく、今日も薄曇りの坂道、お喜代は洗ひたてのエプロンに小さい風呂敷包、すつかり髪結としての甲斐々々しいいでたちをしながら、一と月餘りも産褥に居た身は、何だかひどく足もとがたよりなくて、朴歯の日和が重く、がくりがくりと一足毎に膝頭の力が抜けるやうに感ずるのであつた。

引きつめた櫛巻、それに、大たいが薄手の顏のところへ、額に出た青筋が、まだどうしても彼女の顏を病人らしく見せて居た。

我にもあらず坂の中途で立ち止つて、見得も外聞もなく突いて來た洋傘を杖に、老人のやうに腰を伸ばして息を入れると、ふと、かうした事が、いつか遠い昔にもあつたやうな氣がするのである。

二度同じ夢を見て居る時、夢の中で、あゝこんな夢を前にも見たつけと思ふあの氣持、お喜代はそんなうつゝない思の中で、ぼんやりと、傍の石崖の上の塀からさし覗いて居る樫の葉からこぼれる緑の香を嗅いで居た。さうして居ると、十年も前、まだ師匠の家に居た頃の記憶が浮んで來るのであつた。

備前焼のやうな色をした、極端に淺い、厚ぼつたい、まるで小鳥の餌摺鉢のやうな茶碗に三膳と定められた御飯、それで朝は暗い中から起こされ、夜は眠りこける程疲れてしまふ。そして師匠や姉弟子の先へ先へと廻つては髪を梳いて歩く路すがら、上り坂にでもかかればきつと息が切れて、何と急いでも一度づゝはかうして休んで油汗を拭いたものであつた――。

あの時分は、やたらにその茶碗が恨めしく　割れでもしたら別のに替へてくれる事かと、一人の時、縁先の沓脱ぎに打ちつけて見た事があつたが、いつかなひゞも入らなかつた。

さうなると、赭黒いその燒物の色も、厚ぼつたく愚かしいその格恰も、むやみにふてぶてしく見えて腹立たしかつたものであつた。

その頃、一週間に一度位づゝ、お喜代が夕飯の後片づけをして居る頃を見計つては、母親が、これも仕事の歸り、そつと水口から小さな袋に入つた鐵砲玉などを持つて來てくれる事が、どんなに待ち遠しく、樂しみだつた事か。それを半分ばかり床の中でしやぶつて、あとは懷中へ入れたまゝ寢てしまふと、翌日ベトベトになつたのを、かうして息の切れる時など、珍重して口へ入れたものであつたが……。

當時は毎日泣きの涙であつたさうした生活も、十年といふ霧の奥に窺ひ見る今は、たゞ其處に、可憐な、何事も修業だと諦め通した健氣な少女の姿が浮ぶばかりである。お喜代はふとかすかなほゝゑみを感じて、さて又ゆつくりと坂道を歩き出した。

それにしても、あの頃の自分は何といふ蒼褪めた顏をして、瘦せ萎びて居た事だらう。と考へると、此度は、お產をしてからこの方、忘れやう忘れやうとして居ても、何かと云へば目さきにちらつく死んだ嬰兒の顏が、又してもまざまざと寫つて來るのであつた。

それは双生兒の一人、はじめての姙娠である彼女自身は勿論、產婆もそれとは知らなかつたらしいので、いざお產となると、一人生れてしまつたのにまだ一人居るやうだと、俄に產婆が周章て出したのであつた。やがて生れた兒は、前の子供の半分もない位の、白茶けた皺だらけの、ちようど海月の鹽づけにしたものみたやうな皮膚をして居た。それでも生れるまでは生きて居たのだが、外へ出ると、產婆が振つても搖すつても產聲も擧げず、そのまゝ冷たい塊になつてしまつた——。

「あゝ、老人のやうだつたあの顏、濡れた紙屑のやうな皮膚……」

彼女はそれ以來、それが目さきにこびりついて居て、又その事を思ふたびに身內がぞつと總毛立つのであつた。別にそれを憎んで居るのでは勿論ない。嫌がつて居る譯でも毛頭ない。不愍な、あはれなものだと思ふにつけてこの不氣味な戰慄が、すぐやつて來るのであつた。それ故三十餘日、肉體的には大してどうといふ故障のあつた譯でもなかつたのに、どうしても床を離れられなかつた——。

そして今日はじめて仕事に出て見たのであつた。殘つた子供も、幾分乳の足りないせいか、何となく脾弱さうには見えるけれども、これと云つて病氣もしないで育つて居る。

「然し……」

彼女の怖れて居る事が其處に一つ大きく横はつて居るのである。

双生兒の片割れが死ぬと、殘つた子供も所詮は育たないと云ふ事、それを彼女は何處から聞いたのか覺えて居ない。何故かくも根深く自分の頭に喰ひ入つて居るのかも分らないが、兎に角今は、そ

れが動かすべからざる信念となつて彼女を捕へて居るのであつた。

「それ故あの子は一層いとしい。否、さうではない。どうせ育たないやうな、張合のない子ではないか……」

育たないと極つて居るものなら、一日も、一時間も早い方が、なまじ笑顔など作らない中の方が、どんなに諦めいゝか知れない。と思ふ傍から、否々、はじめての子供、この肉この血で創り出した稚い生命、たとひ育たぬまでも一刻も長くこの胸に抱いて居たい、とも思ふのであつた。

さう考へると彼女は、前後の思慮もなく踵を返さうとした。あの兒を抱きに……。

ふらふらと立ちくらみがするやうで、確りと洋傘を突いて歩みを止めると、其處はもう今自分が仕事に行かうとして居る家の、二三軒手前であつたので、彼女ははじめて夢から醒めたやうに氣を取り直し、さまざまの思を拂ひ退けるやうにして、努めて身體をぴんと立て、足を踏みしめて歩いた。

「まあ珍らしい。お喜代さんかい。それはそれは……。初仕事だつて？ お目出度いわね。直ぐに結つて貰ひませうよ」

それ者上りだと云ふこの家の夫人は、さう云ふ種類の人に共通の、一寸澁のかゝつたよく透る聲で、取次の女中に云つて居るのが、お喜代の居る內玄關まで聞えて來るのであつた。

然し、閾際に手をついて默つてお辭儀をして、さて上げたお喜代の顏を見ると、夫人の顏色はさつと翳つたやうであつた。

「お前さんまだ惡いんぢやない？ 大丈夫？ 仕事に出ても……」

「はい、やつと確り致しました。さう何時までぐづぐづして居てもきりがございませんので、今日はおつ母さんに一日帶休みをして貰つて、はじめて出かけましたのです」

「それならいゝけどね。まあ一と休みしてからにしてはどう？」

夫人はもう鏡臺の前に坐つて居たのだが、思ひ直したやうに、肩へ布を掛けたまゝ長火鉢の前へ坐を改めて、手づから茶を淹れてくれるのであつた。

「どうも恐れ入ります」

どうしたものか、何と云ふ事なしに氣弱くほろりとしさうになるのを、お喜代は周章てて自分の膝へ眼を落した。その様子が、またひどくあはれに、影が薄いといふのはこんなのをでも云ふのではないかと思はせるやうに見えるのであつた。

夫人はますます眉を顰めて、

「でも、赤ちやんは達者なんでせう？」

「はい、おかげ様で……」

「それは何よりだわ。おつ母さんも此間來た時、ほくほくして居たわ。髮を結つてるうち中、何も他の話はしやしない。孫の話ばかり

なんだもの。あゝも孫と云ふものは可愛いものかしらと、後で噂をして居たの」

育つか育たないか分らぬ孫……。又してもそれを考へながら、お喜代は僅かに微笑んで見せるのであつた。

久し振で香高い煎茶を一口飲んで、お喜代は夫人の髮に向つた。一昨日母親の結つたばかりの、よく縮まつた元結に鋏を當てると、ぴちりぴちりと小氣味よく、撥ぢけるやうに切れてゆく。その感觸は、彼女の心をやつとほんとうに、平生通りに引き締めてくれたのである。今こそお喜代はもう双生兒を生んだ事も、否もつと前、あの妊娠中の大儀さも何も知らなかつたずつと前のやうに元氣に充ち、若々しさが皮一重下に躍動して居るやうに感ずるのであつた。梳く手も、元結を縮める呼吸も、ちつとも亂れても鈍つても居ない——。まあよかつたと彼女は、自分が自分に敎へられて始めて悟つたやうに、此頃無暗にじめじめと暗い氣持の中にばかり滅入り込んで居る自分を哄ひたい思ひが、はじめて腹の底から湧いて來たのであつた。

夫人もそれを氣附いたのか、きりきりと引き締まる中根の元結を、さも心地よさゝうにして居たが、やがて結ひ終つた髮を、合せ鏡で兎み角ら見。

「流石商賣だわね。見かけはひどく弱つたやうでも、かうして仕事にかゝれば、どうしてちつとも腕は弱つてなど居ない。それに矢張り若いだけあつて、どうしてもおつ母さんより艶があつて粋に出來るわ」

夫人はすつかり滿足した樣子である。かうなるとお喜代の心にも、ますます張りが出て來るのであつた。

「恐れ入ります」

かさかさと紙で手を拭きながら、はじめて嬉しさうに微笑んだ彼女の顏には、微かながら血の色が浮いて來た。

「奧樣、井の源のおかみさんが、何かお目にかけたいものがあるとかで參りましたが……」

「あゝ此處へ通しておくれ」

主人の骨董趣味にかぶれたと云ふのか、夫人も此處の人になつてから、頻りと古渡りの玉、更紗などを蒐める事をして居るのであつた。そして、主人の處へ出入りして居る書畫骨董商井上源兵衞の妻が、又さうした婦人らしい好みの物を持つては、時折此處へ來るのであつた。もう五十に近い、京都あたりの、小ぢんまりした座店にでも坐つて居さうな、どちらかと云へば血色の惡い顏をすつかり垢拔けするまで磨き上げたと云つたやうな、おかみさんである。

「今日はちと風變りなものを持つて參りましたのですが……。然し奧樣のお眼には必ず適ふだらうと存じまして……」

彼女はしやれた更紗の風呂敷包みを、膝の上で解きにかゝつた。

鏡臺の周圍に夥しくひろげられた道具のあれこれを、やつと片づけてしまつたお喜代は、椽際へ坐るとほつとして、一寸には外へ出る氣もしないやうな疲れを覺えたのであつた。

「お喜代さん、まあゆつくり休んでからお出で」

早くもその樣子を見て取つたやうに、夫人が云つてくれるので、彼女もその氣で、がつかりと坐り込んでしまつた。

「風變りのものつて、一體何なの？」

井の源のおかみさんのゆつくりした手許を待ち兼ねたやうに、夫人はさう聞いた。

「まあ當てゝ御覽あそばせ。とても可愛らしいものでございます」

「焦らすもんぢやないわ。早く見せておくれよ」

夫人の好奇心が絕頂に達したと思はれる頃、風呂敷包の中のものは、指環の三つも光つて居るおかみさんの手によつて、磨かれた長火鉢の猫板の上へ。

それは五寸程の、黑い、然し窪んだ所には如何にも落ちついた金箔の色を沈ませて居る一體の木像であつた。

「まあ、何樣なの？　それは……」

夫人も流石に意外らしく、然し充分の執着を眼に輝かせてそれに見入つた。

「地藏樣でございます。而も、子供の姿をかたどつたものでございます。このあどけない可愛いお顏を御覽あそばせ。恐らく何か、由緒あるものに違ひないと、主人も申してをりました」

「地藏樣？　成程ね」

夫人は、感に堪へたと云ふやうに、佛像を手に取つて頻りに眺めながら、

「然しこれは、お佛壇に入れとくもんぢやないわね」

「それはさうでございます。先づお部屋飾りか、お机の上の置物で……」

「さうね。まあ置いといて見て頂戴。一日二日眺めて見たいから……」

「どうぞさうお願ひ申します。おねだんは極くお安い物ではございますが、他の品と違ひまして強いてお勸め申す事も出來ないものでございますから」

何と云ふ氣高い、何と云ふ可愛いお顏の地藏樣だらうと、傍のお喜代の眼は、先刻から誰よりも熱心に輝いて居るのであつた。ふつくりとした頰、丸い肩のあたりのあどけなさ、それにしてもかう云ふ物を、玩具の如くに自由に買ふ事も出來るこの夫人の身分が、今更のやうに羨ましく思はれた。

「どうも有り難うございました。それでは又明後日伺ひます」

「あゝ御苦勞樣、おつ母さんによろしくね」

お喜代は門を出ると、氣の弛んだせいか、やつぱり膝頭はたよりなくがくりがくりとするし、それに疲れも手傳つてか、眼瞼が窪ん

でだるかつた。それに又洋傘を杖にしてとぼとぼと歩きかけた。

「いづれは由緒あるもの……。それは、子を亡くした親がその似顔を地藏尊の像に刻ませて、信心するお寺へ上げたものか？ さうだ、きつとさうに違ひない」

彼女はさう考へ、信じた。もう彼女の頭の中は、あの醜い死兒の姿のみに占領されては居なかつた。濡れた紙屑の塊のやうな子供のかたちを思ふと同時に、いつも襲つて來る不氣味な戰慄、それの來ない先に、氣高いかの幼童地藏尊のみ姿が、燦として魂の中に現じて來るのであつた。お喜代は立ちながら、はたと膝を打つた。

「さうだ。あれにお縋りすれば好いのだ。自分のこの萎えた心も身體も、死んだ兒もそれで助かるのだ。否、そればかりではない。生きて居る方の兒も、あの佛樣を家へお迎へして日夜大切にして拜んで居たら、つまりは勿體ない事ながら死んだ兒の身替りとなつて頂いたなら、きつとあの子も丈夫に育つに違ひない」

井の源のおかみさんが「おねだんは極くお安いもの」と云つた。五圓か十圓か？ その位の處なら何をどうしても、どうにかならないものでもない。否、萬一それ以上のものであつても……。

彼女は、渴いた咽喉を潤ほした程に元氣づいて、快い亢奮に汗ばみながら、中程まで降りた坂を引き返して上りはじめた。

どうでも一つ奥様に願つて、あの地藏樣をこちらへ讓つて頂から……」と。

秋の旅

——紫野大德寺——

十月三日の夕ぐれの小雨に土も、敷石もしんめりしてゐる。本堂の廻りをカラン／＼と鉦をならしてゆく。人を「德久利坊主」だときく。人がその名なのではない、鉦に坊主の名があるのだ。當寺何代かの大經の管にこの毎日鉦をふれば火災を助けると告げた坊主があつて、土を堀つたら此鉦が出たのだといふ、爾來毎夕ならさせれるのだ。

今宵一宿の結縁ある聚光院の樫（かし）の老樹にあたる雨の音をきいて、先宵のあたしは久しぶりで自分をとりかへしてボンヤリしてゐた。味はつても／＼掬（すく）しきれない生命の泉——カサ／＼な魂を濕してくれるやうに細い雨が、しめやかに、咲きながら、あたしの心にもきた。

百合さんは勞れてすぐに横になつた。ふささんと春子はまだ大阪である。ひとりお數寄屋によばれてゆく。大德寺々中御自慢のお會席をいたゞき、抹茶二服をかされて、所望（しよもう）する。大阪市内ビラ撒き宣傳とは、あまりにかけはなれた境地であるが、そのどちらにあつても勿體ない嬉しさが一ぱいである。

曉の勤業（ごん）を枕に聞いた。朝のおもてなしは茶飯に納豆汁、お席の隅床には白ダリヤが一輪、ほの暗い朝を幽（かすか）に目覺てゐる。和尚が特に一女人藝術一一行への心づくしであつた。

「今朝裏の樹に小鳥が來たわ／＼、雀も山鳩も早うから鳴いてゐた。あんたには小鳥がついてくる。」といはれたのが嬉しい。

あこがれの心よ、とう／＼土に立ちながら空とぶ鳥となつたか——だが、慾の熊鷹とならず小鳥の友となつたとは、これも嬉しいお土産である。

時雨



最初の舞踏會

野上彌生子譯

正確にいつ舞踏會がはじまつたかは、リイラにもちよつと分らなかつた。恐らく彼女の最初の實際の相手は車であつた。車にはセリダン家の娘たちとその兄たちが同乘してゐたのであるが、そんなことはどうでもよかつた。彼女は隅の方へ小さくもたれて掛かつてゐた。手先を乘せてゐたもたせが誰か若い男の夜會服の袖のやうに思はれた。ころがるやうに進んだ。ワルツを踊つてゐる街燈や家や塀や木を過ぎて。

『あなた、これまで本統に舞踏會に入らしたことないの、リイラ？　ずいぶんお固いのね――』セリダン家の娘たちは叫んだ。

『いつとう近いお隣だつて十五哩ですもの。』リイラは軟かに云つた。扇をしづかに開けたり閉ぢたりしながら。

おゝ、ほんとうに他の人達見たいに平氣でゐることはどんなにむづかしかつたゞらう！　彼は笑ひ過ぎないやうに努めた。心に留めないやうに努めた。併し何もかも目新しく、氣をそそり立てた。……メグの月下香も、ヂヨウズの長い琥珀の頸輪も、ロウラの白い毛皮の中か

ら雲間を分けた花の如く突き出して小さい暗色の首も。彼女はいつまでも記憶してゐるだらう。從兄のロウリが新しい手袋の留金から引き出した薄葉の丸めたのを投げ棄てるのを見ても、リイラには心苦しかつた。形身として、思ひ出として、その丸めた紙を仕舞つておきたかつた。ロウリは屈んでその手をロウラの膝の上に置いた。

『ねえ、』彼は云つた。『いつもの通り三番と九番だぜ。いい？』

おお、兄さんがあると云ふことは何と云ふ不思議だらう！　興奮のあまり、リイラは若し餘裕さへあつたら、若し不可能でさへなかつたら、泣かずにはゐられないだらうと感じた。何故と云ふに、自分はまだほんの子供で、『いい？』と云つてくれる兄もなければ、その時メグがヂョウズに云つたやうに、『あんたの髮が今夜のやうによく出來たのを見たことないわ。』と云つてくれる姉もなかつたから。

併し、勿論、そんな餘裕はなかつた。もうドリル、ホウルに來てゐた。前にも車、後にも車であつた。道は兩側とも動いてゐる扇形の光で輝しかつた。鋪道の上には華やかな組合つた人々が空を漂ひ行くやうに見えた。小さい繻子の靴が小鳥のやうに追つかけつこをしてゐた。

『私にくつついていらつしやいリイラ。はぐれてよ。』ロウラは云つた。

『さあ、お出で、ずん〳〵行かうね。』ロウリは云つた。

リイラは二本の指をロウラの石竹色のびろうどの外套の上においた。彼等はいくらかせり上げられるやうになつて、大きな金色のランプの下を過ぎ、廊下を運ばれて『御婦人室』と書いた小部屋の中に押込まれた。そこは大變な人で、殆んど身につけたものを取る場所もないほどであつた。騷ぎはつんぼになる程であつた。兩側の二つのベンチは外套類でうづ高くなつてゐた。白いエプロンをかけた二人の年取つた女が新たに腕いつぱい抱えたものを抛りながら、あちこちと駈け廻つてゐた。誰も彼も一番端にある鏡のついた小さい化粧テーブルのところへ行かうとして前の方へ押し寄せてゐた。

一つの大きな搖らめいてゐる瓦斯の吹出が婦人室を照らしてゐた。待つてゐられなかつた。もう舞踏ははじまつてゐた。ドアがまた開いてドリル、ホウルの方から整調の爆音が聞こえて來た時、殆んど天井まで跳ね上つた。

暗色の娘たちも、明色の娘たちも、髮を叩いたり、リボンを結び直したり、胴着の前面にハンカチフをたゝみ込んだり、大理石のやうな白の手袋の皺を伸ばしたりしてゐた。彼等は皆んな笑つてゐたので、リイラには皆んなが可愛らしく見えた。

『目につかないヘヤピンつてないか知ら？』一つの聲が叫んだ。『まあ、呆れてしまふ！　目につかないヘヤピンなら見えやしないわ。』

『私の脊中にお白粉を打つて頂戴。うしろにいゝ人がゐるんですから。』誰かほかの人が叫んだ。

『だつて、私は針と木綿糸がほしいのよ。ひだ飾を何哩も何哩も裂いちやつたんですもの。』三人目が云つた。

その時、『廻して頂戴、廻して頂戴！』と云ふ聲がした。プログラム入りの漆塗の籠が腕から腕へと採み運ばれた。可愛らしい、小さい石竹色と銀色のプログラムで、同じ石竹色の鉛筆と毬毛の房がついてゐた。リイラの指は籠から一つ取つた時慄へた。彼女は誰かに、『私も一つよろしいんでせうか？』と聞かうと思つた。併し、彼女がやつと「ワルツ、三、（丸木舟のふたり）ポルカ、四、（羽風を立てゝ）」まで讀むと、メグが『よくつて、ルイラ？』と叫んだ。彼等は人込みを押し分け、ドルリ、ホウルの大きな二重の扉へつゞく廊下へ出た。

舞踏はまだはじまつてゐなかつたが、樂隊は聲調を止めてゐて騒ぎがひどかつたので、音樂をはじめた時も聞こえさうに思へなかつた。リイラはメグの後にくつついて、メグの肩越しに眺めながら、天井に張られた、小さな揺れてゐる色のついた旗までが、話をしてゐるやうに感じた。彼女は羞かむことをすつかり忘れてゐた。彼女は着物を着ながら寢臺に腰かけ、片一方の靴は脱いだまゝ、片一方の靴をば穿いて、従姉妹たちに電話をかけて、矢張り『行かれないつて云つて頂戴』と母親に賴んだことを忘れてゐた。さうして、彼女がその人里に遠い田舎の家のヴエランダに坐つて、赤ん坊の梟が『モオ・ポウク』と月光の中で啼いてゐるのを聞きたいと望んでゐたのぼせ方は、一人で堪へきれない程の甘美な歡びののぼせに變つてしまつた。彼女は扇をつかんで、輝く金色の床や、躑躅や、提灯や、赤い絨毯に鍍金の椅子を並べて、隅に樂隊のゐる向ふの端のステイジなどを眺めながら、息をはづませて、『すてきだわ、本統にすてきだわ！』と思つた。

娘たちは皆んな扉の一方の側に集つて立つてをり、男たちは他の側に立つてゐた。黒い着物を着た附添婦人(シャプロン)たちは、幾らか間の拔けた笑ひ方をしながら、磨き上げに床をステイジの方へ、小刻みな警戒的な歩調であるいて行つた。

『これは私の田舎の従妹のリイラなの。よくしてあげて頂戴。お相手を見つけてあげてね。私の翼の下にゐるのよ。』メグは云つた。娘たちのところへ次ぎ〳〵に行きながら。

見知らぬ顔が幾つもリイラを見ては笑つた。――美しく、ぼんやりと。見知らぬ聲が幾つも答へた。『えゝ、よござんすわ。』併しリイラはそれの娘たちはほんとは自分を見てはゐないのだと感じた。皆んな男の人たちの方ばかり見てゐた。なぜ男の方ははじめないのだらう？　なにを待つてゐるのだらう！　皆んな手袋を撫せたり、艶のある髪を叩いたり、お互ひに笑つたりしながら立つてゐた。すると全く突然、たとへばどうしてもさうしなければならないと決心をしたかの如く、男たちは寄木細工の床の上を辷つてやつて來た。娘たちの間には悦びのどよめき

が起つた。一人の身長の高い明色の男がメグのところへ駈け寄つて、彼女のプログラムを取り上げ、何かを書きつけた。メグは彼をリイラに引合せた。『どうぞよろしく。』彼はお辭儀をして笑つた。そこへ眼鏡をかけた暗色の人が來た。從兄のロウリが友だちを一人連れて來た。それからロウラがネクタイの曲つた、雀斑のある小さい男といつしよに來た。すると全く年とつた男が――頭に大きな禿げたところのある肥つた男が――來て彼女のプログラムを取り上げて、つぶやいた。『はてな、はてな！』彼は長い間、名前で黒くなつた自分のプログラムと彼女のプログラムとを較べてゐた。彼は非常にまごついてゐるやうに見えたので、リイラは恥づかしくなつた。『おお、どうぞ困らさないで頂戴』彼女は熱心に云つた。併し肥つた男は返事はしないで何か書きつけ、またちらりと彼女を見た。『この輝やかしい小さいお顏に見覺えがあつたか知らんて？』彼は小言で云つた『以前に拜見したことがあつたかな？』その時樂隊が演奏をはじめた。肥つた男は消えた。彼は輝く床の上を飛んで來ては人の群を二つづゝに分け、撒きちらしたり、廻らせたりする音樂の大波に搖られて去つてしまつた。……

リイラは寄宿學校で舞踏を習つてゐた。毎土曜日の午後、寄宿生は小さな鐵のなまこ板の公會堂に追ひ立てられた。そこにはミス・エクルス（ロンドンから出張の）が彼女の『特別』の級を敎へるのであつた。併し、あの埃臭い公會堂――壁には更紗地の格言が張つてあり、あの憐れなびつくりした顏をして、兎の耳のついた褐色のびろうどの緣なし帽をかぶつた小さな女が冷たいピアノを叩いてゐると、ミス・エクルスが娘たちの足を白い長い棒で小突いてゐた公會堂――と、この部屋との相違は非常なものであつたので、リイラは、若し相手になつて與れる人が來ず、また皆んながその調子に乘つて金色の床の上をいつまでも、いつまでも滑つてゐるあの不思議な音樂を聽いてゐなければならなかつたとしたら、彼女は少くとも死ぬとか、氣絶するとか、兩手をさし上げて星の見えてゐる暗い窓の一つから飛び出すとかしたであらう。

『番がまゐりました――』誰かがお辭儀をし、笑つて、その手をさし出した。リイラは遂に死なずにすんだ。誰かの手が彼女の腰を壓した。彼女は池に投げ込まれた花のやうに漂ひ去つた。

『全くよい床ですね？』『氣力のない聲が彼女の耳許で物うげに云つた。

『ほんとうに、何んだか滑りさうですわ。』リイラは云つた。

『何んですつて？』その氣力のない聲は驚いて響いた。リイラはもう一度云ひ直した。ちよつと間があつて、『おゝ、全く！』とその聲が返事をした。彼女はまたぐるりと引き廻された。

彼は非常に美しく操縱した。娘たち同志と踊るのと男の人と踊るのとでは大した違ひだとリイラは決めた。娘たち同志の時はお互ひにぶつ

つかつたり、足を踏んだりした。男になつてゐる方の娘は、いつもきまつて相手を引つつかんだ。

躑躅はもう一つ一つの花ではなかつた。それは石竹色と白の旗になつて吹き流されてゐた。

『あなたは先週ベル家にいらつしやいましたか？』その聲がまた來た。それは疲れて聞こえた。リイラは、彼に止めたくはございませんかと尋ねるべきではないだらうかと迷つた。

『いゝえ、これが私の最初の舞踏會でございます。』彼女は云つた。

彼女の相手は小さい喘ぐやうな笑ひ方をした。『冗談でせう。』彼は抗議した。

『いゝえ、ほんとうに、私の最初の舞踏會です。』リイラは非常に熱心であつた。誰かに話すことが出來るのが非常に氣安めになつた。あの私は生れてから今までずつと田舍に住まつてゐましたから。……』

その時音樂が止んで、彼等は壁際の二つの椅子に掛けに行つた。リイラは石竹色の繻子の靴を穿いた足を後に曲げて扇を使つた。その間彼女は彼の組の人たちが跳ね戸を通つては見えなくなるのを見守つてゐた。

『おもしろくつて、リイラ？』ヂョウスが彼女の金髪の頭をうなづかせて尋ねた。

ロウラはそばを通り過ぎて、彼女にかすかな一寸とした目くばせをした。それでリイラは暫くの間、自分はほんとうに大人になつてゐるのかどうかを怪んだ。たしかに彼女の相手はあまりものを云はなかつた。彼は咳をしたり、ハンカチフを疊み込んだり、胴着を引き下げたり、短い糸を袖からつまみ取つたりした。併しそんなことはどうでもよかつた。殆んど間もなく音樂がはじまつた。彼女の第二の踊相手は天井から飛んで來たやうに思はれた。

『床は惡くありませんね、』新しい聲がした。誰でもいつも床のことから切り出すものか知ら？　それからその次には、『火曜日にはニイヴズ家の舞踏會に入らつしやいましたか？』それでまたリイラは説明した。相手がいつももつと興味を持たないと云ふのは恐らく少し不思議だつたに相違ない。何んとなればそれは感動しないではゐられないことであつたから。最初の舞踏會！　彼女は何事もはじめたばかりであつた。彼女は今まで夜とはどんなものか知らなかつたやうな氣がした。今までは大抵暗い、しづかな、美しい――おゝ、さうだ、でもどことなくもの悲しいものであつた。嚴肅なものであつた。然るに今やもう決して二度とそんなものにはならないであらう。――それは目眩しいばかりに明るくなつた。

『アイス・クリームは如何です?』彼女の相手の男が云つた。二人は跳ね戸を通つて廊下を降り、食堂へ行つた。彼女の頬は燃えてゐた。彼女はおそろしく咽喉が渇いてゐた。小さいグラスの皿の上のアイスは何んとおいしさうに見えたことであらう。さうして霜を結ばせたスプウンは何んと冷たく見えたことであらう。さうしてアイスも! やがて二人がホウルへ歸つて來ると例の肥つた男がドアのところで彼女を待つてゐた。彼が如何に年取つてゐるかを見ると、それは彼女にまた吐息を衝かせた。彼はほかの父親や母親連と一緒にステイジの上にをるべき筈の人であつた。リイラが彼を自分の今までの相手の男たちと較べて見た時、彼はみすぼらしく見えた。彼の胴着には皺がついてゐたし、手袋にはボタンが一つ落ちてゐたし、上着はフレンチ・チョウク(石鹸石)でよごれてゐるやうに見えた。

『さあ、まゐりませう、お孃さん』その肥つた男は云つた。彼は殆んど彼女をつかまへもしなかつた。さうして二人は非常にしづかに動いて行つた。踊つてると云ふよりは、むしろ歩いてゐるやうであつた。併し彼は床のことは一言も云はなかつた。『お初めてゞせう?』彼はさゝやいた。

どうしてお分りになつて?』

『えゝ、』肥つた男は云つた。『長くやつてゐると分かるものです。』彼女をあやつつて無器用な一組を追ひ拔いた時、かすかに喘ぎ聲を出した。『これで私は斯んなことをかれこれ三十年もやつてゐるのです。』

『三十年も?』リイラは叫んだ。彼女の生れるより十二年も前からだ!

『殆んど考へられないでせう?』肥つた男は陰鬱に云つた。リイラは彼の禿げた頭を眺めて全く氣の毒に思つた。

『まだ續けていらつしやるのが、私には不思議ですわ。』彼女はやさしく云つた。

『おやさしいお孃さん、』肥つた男はさう云つた。さうして彼女を少し手近に壓してワルツの一節を口ずさんだ。『勿論』彼は云つた。『何んでもさう長くつゞかせようとしたつて駄目です。決して。』肥つた男は云つた。『今にあなたもあのステイジの上に、立派な黒のびろうどを着て見物するやうになるでせう。さうしてこのお綺麗な腕も、小さい、短かい、肥つた腕に變つてしまふでせう。さうしてまるつきり別な種類の扇で——黒い骨だらけの扇で——拍子を取るやうにおなりでせう。』肥つた男は身震ひをしたやうだつた。『さうしてあなたはあすこにゐるお年寄たちのやうのやうにいつも笑つてゐて、あなたの娘さんを指しながら隣のお年寄に、或る恐ろしい男がクラブの舞踏會であなたの娘さんにキスしようとしたことを話してお聞かせになるでせう。さうしてあなたの心は非常にお痛みになるでせう。』——肥つた男は眞實その氣の毒な心

に同情するかのやうに、更に近く彼女を壓しつけた。――『何故と申せば、さうなつては誰もあなたにキスしたいと思ふ人はありませんからね。さうしてあなたは仰しやるでせう、まあこの磨き立てたやうな床はほんとうに歩きにくくていやだこと、とか、ほんとうに危なかしくて仕樣がない、とか。さうぢやありませんか、マドモアゼル・トウンクルトウズ（ちよこちよこさん）ねえ？』肥つた男は聲低くさう云つた。

リイラは輕い小さい笑ひを洩らした。併し彼女は笑ひたくはなかつた。それは眞實であるか――眞實であり得るだらうか？ それはおそろしく眞實らしく響いた。この最初の舞踏會は、要するに彼女の最後の舞踏會のはじまりに過ぎないのか？ その時音樂が變つたやうだつた。それは悲しい、悲しい音を立てた。それは大きな溜息になつてしまつた。おお、何んと急速に變つたことだらう！ 何故幸福は永久に續かないのであらう？ 永久と云ふものはちつとも長過ぎはしないのに。

『私止めにしたうございますわ。』彼女は苦しさうな聲で云つた。肥つた男は彼女をドアのところへ連れて行つた。

『いゝえ。』彼女は云つた。『外へ出たいのぢやございません。腰かけたいのぢやございません。ここに立つてゐたいのです。有りがたう。』彼女は壁に凭れて足先で輕く床を叩きながら、手袋を引きあげたり、笑つて見ようとしたりした。併し彼女の心の奥の方では一人の少女が前垂をかぶつてすゝり泣いてゐた。何故彼はすべてを臺なしにしてしまつたのであらう？

『あの、ねえ、』肥つた男が云つた。『私の申したことを氣になさらないで下さい、お孃さん。』

『そんなことありませんわ！』リイラはは云つた。彼女の小さい暗色の頭をもたげ、下脣を吸ひ込んで。……

またもや組が作られて並んだ。跳ね戸は開いたり閉ぢたりした。今度は別の音樂が樂長から觸れられた。併しリイラはもう踊りたくなかつた。彼女は家へ歸りたくなつた。また赤ん坊の梟の聲を聞きながら、ヴエランダに腰かけてゐたくなつた。彼女が暗い窓から星を眺めた時、星は翼のやうな長い光を放つてゐた。……

併し突然に軟かい融かすやうな、うつとりさせるやうな調子がはじまつた。さうして一人の捲毛をした若い男が彼女の前でお辭儀をした。彼女は作法上から、メグを見出すまで、踊らなければならなかつたであらう。非常に硬ばつて彼女はまん中の方へ步いて行つた。非常に高ぶつて彼女はその手を彼の袖の上に載せた。併し忽ち一轉廻して彼女の足は辷り出した。灯も、躑躅も、服裝も、石竹色の顏も、びろうどの椅子も、皆んな美しい一つの廻る車となつた。さうして彼女の次の相手が彼女を例の肥つた人に衝き當らして『御免なさい』と云つた時、彼女は今までよりも一層晴れやかに彼の方へ笑ひかけた。彼女はその人を覺えてさへもゐなかつた。

（カザリン・マンスフイールド）

婦人彙報

▼帝展初入選の女性

今秋帝展に於ける初入選の女流は日本畫では、小關きみ子、岡田千代子、藤井すゞ子、藤井えつ子、和氣春光女、棚澤てる、三谷十絲子、保野千代子八氏洋畫では、土本ふみ子、岡春野、八星三代、森下静、石井みはる、三浦龍子、落合ラン、吉里静、佐藤千里の諸氏で、龜高みよ子さんは洋畫家文子女史の愛孃、松崎喜美子さんはまだ女子美術の三年生である。

▲考古學の調査旅行に

我人類考古學の權威、鳥居龍藏博士の令孃、幸子さんは、父博士の考古學調査の秘書兼助手として、露領沿海州、黑龍州方面に旅行される事になつた。殊にウスリー、アムール兩河畔にある石器時代の遺蹟、並びにツングース族の部落の一般人類學、考古學の調査をするとの事である。若い女性がかうした旅行に助手として行くなどは、まだ幸子さんが初めてであらう。

▼婦人黑シヤツ黨領袖來朝

イタリヤ婦人黑シヤツ黨の旗頭マリア、ロスチ女史は目下米國を講演旅行中であるが、今冬、その歸途を日本へ立寄る由。同女史は伊國女子大學聯盟長、伊國女權擴張會長で、帝大英文科デルレー敎授への通知によれば、來朝の上は、各所で講演を試み、又我國の女權運動者と接近したいとの事である。

▲派出事平業創始十週年

「派出婦」も今では婦人の職業として著しい發展を見るやうになつたが、この事業の抑々の創始は大和俊子女史の婦人共同會であつて、羽仁もと子女史が英國の新しい女中制度にヒントを得て發案されたのである。始めは未亡人の小使ひかせぎ位な所だつたが、現今ではすつかり一般化して、市內外各所に「派出婦會」なるものは、實に多く見られるやうになつた。現在派出婦の平均年齡三十歲、小學校も高等科卒業者について、女學校を出た人々も多くなつてゆく由。それらの人々の境遇は、未亡人が最も多く、未婚者、が次位、夫を持つてゐる者が最も少いさうであるが、從つて就職の目的は、貯金の爲、子供の養育費を得る爲、結婚準備の爲等である。ある派出婦の談によれば、この職業にもやはり不良男性の誘惑があつて、男一人の世帶などへは大ていゐるが、夫人が病氣の家なども、年をとつた者が、行く事になつてなか〳〵油斷がならない事もあるさうである。

▼獨身婦人宿泊所

獨身婦人のみのアパートメント——それが同潤會の手によつて設立される事になつた。場所は小石川の高等師範學校前で、千坪の敷地を求めるとの事である。

▼女浮浪人調査

東京市社會局では、今回公園や火葬場をめぐる女浮浪人について調査する事になつた。三年前の統計によると、市中に二百八十名ゐた由。社會局のこの企てが、彼女達にどんな福音をもたらすのだらう？

▼ユーゼニツクスの子

シカゴの美人女優、ケティー、ブルマンは今回「優生學兒」を産んだと發表して社會を驚かした。といふのは、彼女は戀愛もせず、結婚もせず、單によき兒を得ん爲にのみ、某氏と一時的の夫婦關係を結んだので、姙娠後は無論何の關係もないといふ契約であつたといふ。ボルシエビキー、コロンタイは性慾を滿さんが爲にのみ、貞操を開放し、ヤンキーガール、ケティー、ブルマンは、兒を生まんが爲に夫のエキストラを求む。時代は新しくなつた。

▼大島婦人共働社

東京府下製鋼工場從業員中、組合を組織する人々の家庭婦人が、今回大島婦人共働社を組織し、一家の消費經濟、會員相互の共濟に就いて活動する由。

▼消費經濟講習會

家庭婦人の消費經濟知識を高めるため、東京市社會局社會敎育課で、十月から十二月まで四谷、牛込兩區で消費經濟講習會を開く。

▼女車掌の馘首及び復職運動

東京市圓太郎自働車の怠業事件に關聯して、電氣局ではその主謀者と認められるといふ理由の下に、女車掌三名の馘首を斷行した。右は何れも共產黨と關係があるといふ理由の下に、警視廳と打合せて馘首したのであるが、事實は、彼の女等が怠業中他の女車掌を道に擁して怠業に引込んだのを、電氣局は度々の事とて、この擧に出たといふ、電車從業員は大部分が市電自治會に加入してゐる關係上、その方へも怠業が波及するかも知れない形勢にある。右につき自治會自働車部澁谷、

大塚、新谷町、濱松町、四支部長は、十月五日、彼女達の爲に、道家勞働課長を訪ね、復職方を嘆願したが、拒絶された。尙、自治會幹部連數人は、再度右につき陳情嘆願するさうである。

▼姙產婦健康相談所

本所區外手町八四の愛國婦人會隣保館では、姙產婦の健康相談所を開き、毎週水曜日の午後一時より四時まで、種々その方面の相談を無料ですることになつた。但しそれは相談だけで、出產、投藥、治療など實際的方面はしないさうである。

▼汎太平洋婦人會議報告講演會

種々の波紋を引きおこした汎太平洋婦人會議の出席者は、東京聯合婦人會主催で報告演說會を開いた。藤田たき子、正田淑子、木内きやう子、ガントレット恒子、井上秀子の諸氏が出演、餘興に永井郁子女史の獨唱があつた。

▼ロータリー婦人午餐會

國際ロータリー主催、第二回太平洋ロータリー大會に出席のため、アメリカ、カナダ、メキシコ、ペルー、濠洲、ニユージーランド、フイリツピン、ハワイ、支那、印度各國から來朝した代表者と、その家族とが出席して東京會館にロータリー婦人午餐會を開いた。

▼外國婦人の御大典見物

今秋の御大典を見物のために、外國からぞく〳〵美しい婦人達が來朝する。その先發として、ハワイホノルルのハイスクールの校長ミス・ニユード、妹さんのアメリカロスアンゼルス青年會幹事のニユートン兩女史が來朝したが、日本基督教女子青年會の山本こと子、日比谷兒童遊園場指導者米田ます子兩女史が主催で歡迎會を開いた。

▼愛の託兒所

乳兒または學齡前の兒童を哺育することが出來ないとか、子供が居て職につく事が出來ず、身の處置に困つて棄兒をしたり、愛兒を殺したり、母子心中したり、自殺、墮胎、その他の悲痛な事が起つたりする事は非常に悲しむべき事として、「吉祥寺兒童園」といふのが市外吉祥寺に出來た。創立者は詩人野口雨情氏、園主は久連松弘氏夫妻で、久連松夫人みつ子さんは園兒の世話から保姆の監督など實際的な仕事につくされるといふ。託兒所の仕事は嬰兒、幼兒を長期間慈母に代つて家庭的に哺育教養するのを第一の目的とし、附屬として一般職業婦人、勞働婦人の勤務中の哺育、保護、教育、など普通の託兒所のやうな事もする。

▼守屋女史奏任待遇となる

婦人矯風會の少年禁酒軍の主任として獻身的に活動し、婦人ホームの母として幾多の虐げられた女性を保護してゐる守屋東女史は、今度少年保護司事業囑託として、奏任待遇を與へられることになつた。婦人の奏任待遇は大阪の救世軍女子希望館の主任酒井松子女史、神戸幼稚園長、望月くに子女史三人である。

▼國際會議參列婦人の會

今夏世界各國で行はれた國際的會合で日本から婦人の代表者を送つたのはハワイ汎太平洋會議、ブダペストの萬國基督教青年會大會、上海の中華キリスト教女子青年會全國大會、パリーの社會事業國際大會などであるが、それ等出席の代表婦人も大體歸國したので、それ等代表各自の意見や感想の交換をし、一般の參考にも供したいと、東京基督教女子青年會で茶話會をかねた外國みやげ話の會を開いた。出席者は、女子青年大會の酒井愛子女史、ブダペスト萬國大會の杉森孝子女史、汎太平洋會議の正田淑子女史、藤田タキ子女史、中野貞子女史等であつた。

▼帝展洋畫特選

本誌第三號表紙繪の筆者、有馬さと江女史は、今年も又特選。

▲關西女流洋畫家の集り

絹高文子夫人の主宰する「赤艸社」では、作品百餘點を選み、十月二十日から三日間神戸大丸で展覽會を催した。「赤艸社」の會員は五十名、關西における洋畫研究の若き婦人の團體である。

▲鎌倉小學校女訓導自殺

受持の組成績不良の爲、太田靜子氏毒藥を服して死す。年廿二。

悼　柳　浪　先　生

明治文壇新興の一勢力であつた巨星廣津柳浪先生の御逝去を謹んで哀悼いたします。「河内屋」「變目傳」「靑とかげ」その他、その時代にあつての異彩であるばかりでなく、いつまでも生きて殘る作品である事は、生前から言ひつくされ、讃美されてゐます。今、又更に思出を新たに、人々は書架を探ることでせう。

編輯後記

『女人藝術』が、各方面女人の活動の合流點でありたい。かたよらず公平でありたい。新しく、しかも鋭く、又圓滿で多彩でありたいとおもつてゐる。その所期の幾分かは示し得て來たと信ずるが、しかし號を追うて私どもの心は緊張する。『眼を八方にそゝいで』といふ言葉があるが、私ども編輯室何人かの八方を見る眼は、實に公正機敏ならんことを期してゐる。序に、本號所載の野上彌生子夫人の譯「最初の舞踏會」の著者、カサリン・マンスフィルドは英國の近頃の女流作家のうちでは、中々聞えてゐるさうです。チエホフに私淑した人で、作風はむしろ從來の英國風を脱した婦人です。先年亡くなりましたと、夫人より御來書があつた。（花世）

讀書の秋、仕事の秋、そして散策の秋、「女人藝術」も初めて秋を迎へました。そして稻穗が實るやうに、雜誌の內容も秋の收穫を見せたつもりです。もう數へてみると五號を重ねました。私共はいま、新年號の準備に奔走してゐます。新年號には、本誌には初めての某女史が素晴らしい短篇を下さる事になつてゐます。御期待下さい。男性訪問の一問一答もやつてみました。次號はどなたとどなたの問答にするか――一切に皆様の御意見、御希望を待つてゐます。別頁募集文御覽の上、どんどん御注文下さいまし。（しづか）

一冊の編輯が終るとほつとして、作つた雜誌の出來榮えを案じるよりも、すぐにもう次の號のことで心が一杯になり、心配し、樂しむ。恰度自分の年とるのも忘れて、子供の成長を喜ぶ親心のやうな他愛なさであるのがまだ若いつもりの私には變におかしい、

廣い意味でのあらゆる近代的なもの――感覺、問題、行動――の一切に確固たる裏付けをし、かつそれ等を充分生かして行かうとする「女人藝術」の意圖は、號を逐ふ毎に潑溂と誌面を輝かせてゐると思ふのは、親のひがめでせうか。

けだし、あやし氣な親？ があへて自讃の言を敢すよりは、出來たものは愛讀下さる方々へ任せませう。（素子）

奉天より――吉屋信子

昨日は撫順炭坑の地下八百尺の坑内に菜葉服をきてエレベーターで降りて見ました。

今日は奉天で張學良氏に面會しました。女人藝術でも一冊あげればよかつたなどゝ、あとで氣がつき申し候只今ハルピンへ向ふべく列車中にて候（十月八日）

支那服をかひました。

五龍背にて――十月十四日

秋の滿洲をあちこちと、けふで東京を出てから廿日これから朝鮮にかかります。ハルピンで吉屋さんにお別れしました。（金子しげ）

五龍背は紅葉美しく、稻の香日本を想はせ候。（河崎なつ）

滿洲はのんびりして居るので氣に入りました。高粱の刈られた畑に遊ぶ豚の背に白い羽の烏がとまつて居ります。（新妻伊都子）

大阪では皆様に大變お世話になりました。北村兼子女史を筆頭に若き婦人方の應援ぶりは、どんなに力をつけて下さつたか知れません。大阪毎日新聞サンデー部の御厚志で華々しく座談會を開いて下さいましたが、今日その記事を見ると、「男性はヤハリ横暴です。具合のわるい處がヌケてゐます。肝心のムードが出てゐないところなど遠征軍の罪ではありません。その點「女人藝術」は公平だから、女人の具合のわるい處でもヘブきません。皆さん女軍のために大いに聲援して旗をフツて下さい。（時雨）

女人藝術定價表

	定價	送料
一部	四拾錢	一錢五厘
六部	二圓參拾錢	
十二部	四圓五拾錢	

▲誌代の拂込みは成可く振替を利用して下さい。
▲郵便切手代用は一割増の事。

昭和三年十月廿三日印刷
昭和三年十一月一日發行
（毎月一回 一日發行）

發行者 長谷川時雨
編輯者 素川絹子
印刷者 生田花世
印刷所 株式會社 秀英舍

東京市牛込區左內町三十一番地
發行所 女人藝術社
電話牛込(34)一七八九
振替東京七一五八二五

大賣捌 東京堂 北隆館 大東館 東海堂

原作　三上於菟吉
監督　村田實
撮影　青島順一郎

激流

岡田時彦　中野英治
入江たか子　夏川靜江
島耕二　高木永二
小杉勇　主演

日活秋季超特作

人生の激流の波に流され、溺れ、歎き、悲しみ、沈む人間生活のあらゆる姿を盛れる、この一卷の封切りを括目して待たれよ。

昭和三年九月六日第三種郵便物認可



小寺菊子著

南薫造氏裝幀

情熱の春

本書は小寺菊子女史の創作中最も傑出せる十數篇を以てなる新選小說集である。熱き戀あり、惱ましき憧れあり、悲しき思ひ出あり、悉く讀者の心を撃たざるなし。その非凡の才筆とうるはしき情操とは現代女流作家中稀に見る異彩である。卷中の「哀しき祖母」は女史の名聲を頓に高からしめたる名篇で、女流中の大家の地位を確しめざる傑作である。全篇作者の血と涙を以て綴られたる自傳として見るとき、更に貴き創作集である。人生考察の指標として、若き女性の讀者に是を薦める所以。